中　島　遺　跡

——長野県塩尻市中島遺跡発掘調査報告書——

信州大学附属図書館
3470342159

長野県塩尻市教育委員会

中　島　遺　跡

――長野県塩尻市中島遺跡発掘調査報告書――

1　9　8　0

長野県塩尻市教育委員会

序　文

中島遺跡は塩尻市大字堀ノ内・桟敷にあり，田川の右岸段丘上に位置し，以前より縄文時代の遺跡として知られていました。この度県営圃場整備事業が実施されることになり，工事に先立ち発掘調査を行うことになりました。

発掘調査は中島豊晴先生を団長に，調査員には中信考古学会の諸先生方をお願いし，昭和54年11月～12月にかけて実施しました。この調査によって中島遺跡は縄文時代中期から弥生時代後期を経て，奈良平安時代まで長期間にわたって人々が生活の場としていたことが確認されました。また多量の土器とともに黒曜石の貯蔵遺構やガラス小玉の出土などは松本平南部地域の縄文，弥生文化を解明する上に極めて貴重な発見であったといえましょう。

この発掘調査が無事完了するについては，中信土地改良事務所の深いご理解と米窪千加代氏をはじめとする多数の地元の方々の暖かいご援助によるものであり，ここに心から敬意と感謝をささげる次第であります。

報告書の発刊にあたっては，調査団長・調査員の方々のご尽力によるものであり，重ねて謝意を表するものであります。

昭和55年2月

塩尻市教育委員会

教育長　**小　口　利兵衛**

例　言

① 本書は塩尻市東部地区県営圃場整備事業に伴う中島遺跡(長野県塩尻市大字堀ノ内・桟敷所在)の発掘調査報告である。

② 発掘調査は昭和54年11月13日から12月11日まで行った。

③ 遺物および記録類の整理作業から報告書作成は,昭和54年12月から昭和55年1月にかけて行った。

④ 本書は中島豊晴団長を中心とし，調査員，調査補助員が執筆し，その文責は文末に記した。また編集は小林康男が担当した。

⑤ 遺物整理から報告書作成にいたる過程で次の方々の協力を得た。記して深く感謝申し上げたい。(敬称略)

鳥羽嘉彦，三好博喜，山本紀之，宮城孝之，白崎卓，石渡俊一，山口秀和，大竹庄司，込山秀一，太田典孝，松本県ヶ丘風土研究部。

⑥ なお炭化種子の鑑定は信州大学農学部氏原暉男助教授，石器の石質鑑定は金沢大学理学部地学科学生鳥羽嘉彦氏にお願いした。明記して感謝申し上げたい。

⑦ 出土品・諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目　次

序　文

例　言

第Ⅰ章　調査の経過
第1節　調査に至るまでの経過……1
第2節　調査日誌……2

第Ⅱ章　遺跡とその環境
第1節　遺跡周辺の自然環境……4
第2節　歴史的環境……7
第3節　遺跡の概要……9

第Ⅲ章　遺　　構
第1節　住　居　址……12
第1・2・3・4・5・6・7・8・9・10・11・12・13・14・15・16・17・18・19・20号住居址
第2節　小　竪　穴……40
第1・2・3号小竪穴

第Ⅳ章　遺　　物
第1節　土　　器……42
第2節　石　　器……79
第3節　土　製　品……95
第4節　その他の出土遺物……99
第5節　炭　化　物……100

第Ⅴ章　結　　語……107

挿　図　目　次

第１図　松本盆地南部の地質図……5
第２図　C７グリッドにおける地質柱状図……6
第３図　中島遺跡周辺遺跡分布図……8
第４図　中島遺跡全体図……10
第５図　中島遺跡遺構分布図……11
第６図　第１号住居址……12
第７図　土器Ａおよび周辺の焼土・炭化物……13
第８図　土器Ｂ・土器Ｃおよび周辺焼土……14
第９図　土器Ｃおよび炭化種子出土状況……15
第10図　土器Ｃ埋没状態……16
第11図　第２号住居址……17
第12図　第３号住居址……18
第13図　第４号17号18号住居址……20
第14図　第５号19号住居址……21
第15図　黒曜石集石図……22
第16図　第６号住居址……23
第17図　第７号住居址……25
第18図　第８号住居址……26
第19図　埋甕炉断面図……27
第20図　第９号10号住居址……28
第21図　第11号住居址……31
第22図　第12号20号住居址……32
第23図　第13号住居址……34
第24図　第14号住居址……35
第25図　第15号住居址……37
第26図　第16号住居址・第３号小竪穴……38
第27図　第１号・２号小竪穴……41
第28図　第１号・３号住居址出土土器……42
第29図　第２号・３号住居址出土土器……44
第30図　第２号住居址出土土器……45
第31図　第３号住居址出土土器……46

第32図　第 4 号住居址出土土器……48
第33図　第 4・5・6 号住居址出土土器……49
第34図　第 6 号住居址出土土器……51
第35図　第 7 号　〃　……53
第36図　第 8 号 9 号住居址出土土器……55
第37図　第 8 号住居址出土土器……56
第38図　第 9 号　〃　……57
第39図　第 9 号 10 号住居址出土土器……58
第40図　第 10 号 11 号住居址出土土器……60
第41図　第 11 号住居址出土土器……61
第42図　第 12 号　〃　……63
第43図　第 12 号 13 号住居址出土土器……64
第44図　第 13 号住居址出土土器……66
第45図　第 14 号　〃　……67
第46図　第 15 号　〃　……69
第47図　第 15 号　〃　……70
第48図　第 16 号 20 号住居址出土土器……71
第49図　第 17 号 18 号　〃　……72
第50図　第 17 号住居址出土土器……73
第51図　第 19 号 20 号住居址出土土器……74
第52図　第 19 号住居址出土土器……75
第53図　第 3 号小竪穴出土土器……77
第54図　遺構外出土土器……78
第55図　〃　……79
第56図　第 2 号 3 号住居址出土石器……80
第57図　第 4・5・17・18 号住居址出土石器……81
第58図　第 6 号住居址出土石器……83
第59図　第 6 号 7 号住居址出土石器……85
第60図　第 13・14・15・16 号住居址出土石器……86
第61図　第 8・9・10 号住居址出土石器……88
第62図　第 11・12 号住居址出土石器……89
第63図　第 12 号住居址出土石器……91
第64図　第 19・20 号住居址出土石器……93
第65図　第 20 号住居址・遺構外出土石器……94

第66図　遺構外出土石器……96
第67図　上　製　品……97
第68図　ガラス小玉・有孔石製品……99

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査に至るまでの経過

昭和55年度県営圃場整備事業田川地区は田川右岸の塩尻市大字堀ノ内および桟敷の両地区を含む地域において実施されることになった。この地区内には以前から縄文中期の遺物散布地として知られている中島遺跡があり，このため工事施工前に発掘調査を行い，記録保存することになり，中信土地改良事務所からの委託をうけて塩尻市教育委員会が主体となり発掘調査を実施することになった。

発掘調査にあたっては調査団長に中島豊晴先生をお願いし，調査員には中信考古学会の諸先生方を，また調査補助員には信州大学・金沢大学・専修大学・日本大学等に在籍中の大学生にお願いした。調査員の先生方にはそれぞれ本務及び他の調査等仕事をお持ちの極めて多忙の中で発掘調査を実施し，しかも調査終了からわずか1ヶ月半という短期間で遺物，諸資料の整理，原稿執筆と，大変御無理をお願いした。特に発掘調査中は発掘を行いながら埋めもどしも同時に行うという煩雑で苦痛を伴う調査をしてもらわなければならず，この御苦労に対して心から感謝申し上げる次第である。

また地元の方々には調査期間中種々の御援助をいただき，発掘調査を無事終了することができた。厚くお礼申し上げる次第である。

発掘調査のための組織は次のとおりである。

団　長：中島豊晴

調査員・調査補助員：

大久保知己・倉科明正・三村　肇・山越正義・大沢　哲・浅輪俊行・神沢昌二郎・山本紀之・三好博喜・鳥羽嘉彦・小林秀行・直井雅尚・若菜　初・宮城孝之・谷崎史門・白崎　卓・矢口晋司・石田成二・平林彰・石渡俊一・込山秀一・太田典孝・山口秀和・大竹庄司・田中正治郎・永井ちひろ

高校生・一般：

米窪垈二・米窪一子・米窪すぎ・伊藤みつる・米窪訥子・米窪三保・青木豊子・野村つぐ子・米窪千加代・奈良井稔夫・百瀬よしの・島田哲男・竹原　学・塩原博之・田村秀則・安塚弘明・輿　賢次・中原伸二・上原一男・田中希代子・高橋康枝・三尾浩幸・伊藤英治・篠宮　正・寺島　猛・中原みどり・森下裕起子・若林由味子・中村明善・中村武志・市岡勇一・菊池みち子・百瀬文子・松沢ゆかり

整　理：三浦みぎわ・小宮山誉子・川上ますゑ

事務局：小林康男

第2節　調査日誌

11月13日（火）晴　午前中グリットの設定を行う。午後学生のみでＡＢＣＤＥの1～4　地区の掘り下げを行う。

11月14日（水）晴　午前9時に調査地に調査団員が集合し，若干の注意事項の伝達等を行った後，直ちに発堀調査に入る。A_5, $C_{3\sim4}$ $DEF_{5\sim6}$ の3ヶ所で遺物が多量に出土し，住居址状掘り込みも確認される。

11月15日（木）晴　風が終日強く吹き，作業を行うに困難。A_4 にて住居の床面検出。E_8 にて小竪穴状落ち込み確認（後に9号址柱穴と判明）。D_5 にて住居址壁および床面の検出。

11月16日（金）晴　ＡＤＥＦの3～6の掘り下げ。

11月17日（土）晴　4号5号6号住居址の掘り下げ。

11月18日（日）雨　雨のため現場での作業は中止し，博物館にて記録類の整理。

11月19日（月）曇　5号・6号を精査する。5号は南側でもう一軒の住居址（19号址）と重複していることが判明。6号址からは住居址中央部に土器が集中的に出上。

11月20日（火）晴　昨夜の冷え込みのため霜柱が立ち朝の間作業に難渋する。6号址の精査と B_8C_9・Ｊ・Ｋ・Ｆ・Ｈの9～11の掘り下げ。午後小口教育長，中島市公民館長，原田課長補佐，森川主査視察。

11月21日（水）曇　5号址の精査と $K_{2\sim8}$・$J_{3\sim5}$・I_2 の掘り下げ，ならびに4号6号址の埋めもどし。

11月22日（木）雨　雨天のため現場での作業中止。博物館にて整理作業を行う。

11月23日（金）雨　本日も雨となり作業は中止。

11月24日（土）晴　5号19号址の精査。19号址南壁下の床面上に小さな掘り込みを行い中に黒曜石塊を20ヶほど埋納してあり注目される。

11月25日（日）曇　ＤＥＦＧの5～10の掘り下げ。7号址の精査。

11月26日（月）曇　8号9号10号址の掘り下げ。8号址は隅丸方形の弥生期の住居址，9号址は北側が19号址と，南側が10号址と重複した縄文期の住居址，10号址は弥生期の住居址と判明。10号址と9号址との重複部分（F_{10}）からガラス小玉が1ヶ出土。

11月27日（火）晴　8号9号10号址の精査と11号址の掘り下げ。

11月28日（水）曇のち雨　8号～10号の作図と11号址の掘り下げ。午後に雨となり作業中止。

11月29日（木）曇　8号～10号の実測と11号址の掘り下げ。埋めもどしながらの掘り下げのため非常に苦痛。作業なかなかはかどらず。

11月30日（金）晴　11号址の掘り下げ。一辺5ｍなどの隅丸方形の弥生期の住居址と判明。

12月1日（土）曇一時雨　12月に入り一段と風が寒くなる。Ｅ～Ｈの13～20の掘り下げ。EF 15～16にかけて住居址状の落ち込みが検出され土器が多量に出土する。

12月2日（日）晴　13号址の掘り下げとE～Jの14～25の掘り下げ。

12月3日（月）晴　12号13号の掘り下げ。12号址の覆土中より土偶が出土する。

12月4日（火）曇　12号13号の精査。

12月5日（水）晴　12号13号の精査。12号は西側を20号と重複していることが判明し，20号址西壁下に石皿と磨石が並べて置かれていた。12号址の作図。

12月6日（木）晴　14号址の掘り下げ。東壁下から坏蓋出土。

12月7日（金）晴　14号址の掘り下げ。北壁にカマドが設けられ，その脇より平瓶が出土する。

12月8日（土）晴　14号址の作図と他遺構の埋めもどしを行う。

12月9日（日）晴　15号址の掘り下げとZグリットの掘り下げ。他遺構の埋めもどし。

12月10日（月）晴　16号址の掘り下げと他遺構の埋めもどし。

12月11日（火）晴　16号址の精査，作図と埋めもどし。本日で現場における主たる調査を終了する。

12月12日～2月4日平出考古博物館にて出土遺物の洗浄・注記・複元作業を行う一方，実測図の整理・製図・遺物実測・拓本等を行う。また報告書の原稿執筆を行う。

2月4日（月）報告書の編集を行う。

（小林康男）

第II章　遺跡とその環境

第1節　遺跡周辺の自然環境

1）位置と地形

塩尻市は，地溝盆地をなす松本盆地の南端に位置し，北を除く三方を山地に囲まれている。すなわち，西側には飛騨山脈から分岐する山々が連なり，鉢盛山（2446.4m）を最高峰としている。東側には美ヶ原を最高峰とする筑摩山地の一角をなす鉢伏山（1928.5m），高ボッチ山（1664.9m），東山（1429.5m），などが連なり，また南側は木曽山地の北端に位置する海抜1,000m前後の山々からなる。これらの山地は，幼年期の鈍頂地形を形成しており，太平洋・日本海の分水嶺の一部をなしている。

盆地地域には，木曽谷から流出する奈良井川によって形成され，その後の地盤隆起により高地化した桔梗ヶ原扇状地と，それを挾む形で北流する奈良井川・田川の両河川によって形成された2段から3段の河岸段丘が分布している。

遺跡は，塩尻の街を抜け，田川を渡った右岸の第一段丘面，いわゆる郷原面(森口面)の段崖縁に位置する。海抜は700m前後で，2～3mの段丘崖をもって沖積面に臨んでいる。この段丘面は北西に1.5°の傾斜をもち，直接東方約1kmにある高ボッチ山塊の斜面を構成する崖錐群まで達しており，田川右岸はそれ以前の段丘を全て欠いている。現在の田川河床は，段丘崖から約100m沖積面を隔てた西方に位置している。

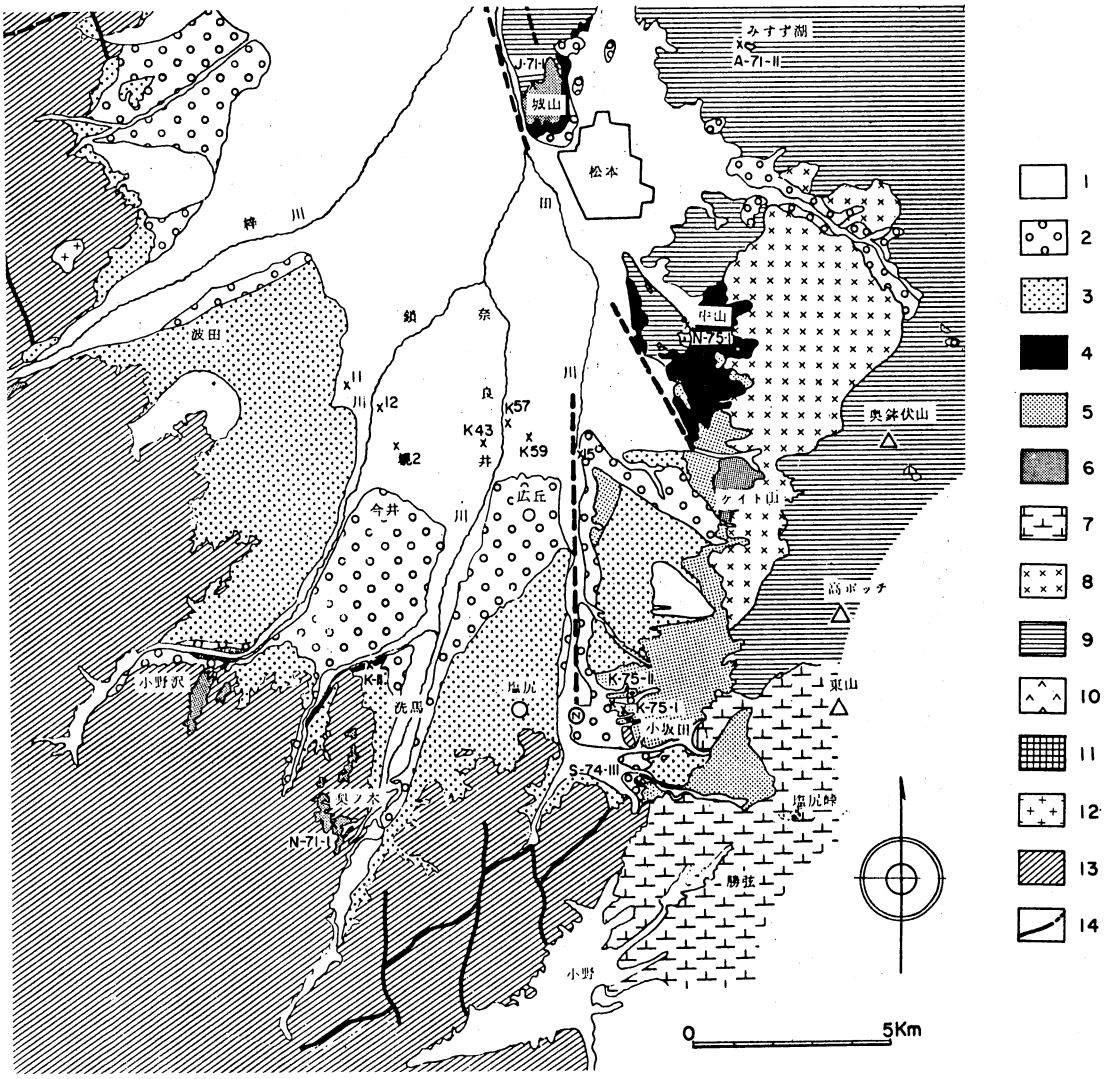
2）地質概要（第1図）

この付近は，ちょうど領家変成帯とフォッサ・マグナ西縁（糸魚川・静岡構造線）とがぶつかる地域にあたっている。

すなわち遺跡付近の新期の堆積層の下位には，糸魚川・静岡線が走っており，そのため南方の山地は古生層の藪原層からなるのに対し,東方の東山山麓には新第三系以降の火山岩類が分布している。

古生層の大半は中生代ジュラ紀に変成作用を受けているが(小野・1969)，再結晶作用が極めて弱いため，少なくとも肉眼では非変成古生層と変わらない。岩質は主に珪質粘板岩・頁岩・砂岩・チャートからなるが，善知鳥山から大芝山にかけては石灰岩層もかなり顕著に発達している。珪質粘板岩は淡緑色～青白色の絹糸光沢を示し，千板岩状で薄く剝がれ易い。砂岩はアルコース・硬砂岩の両者が見られるが，ち密で堅い硬砂岩が卓越している。石灰岩は一般に，かなり強く再結晶しており，そのため結晶質で珪質なものが多い。藪原層のもう1つの特徴である輝緑凝灰岩は，奈良井川の後背地では厚層になっているが，田川の後背地まで来ると著しく衰える。この傾向ま石灰岩の発達程度とまったく逆である。そのほかに岩脈として輝緑岩が確認されている。

一方，田川の上流域にあたる，みどり湖，東山および勝弦周辺は，鮮新世末～洪積世前期の火山活動による，いわゆる塩嶺累層と称される両輝石安山岩の溶岩が分布しており（松本盆地団研・



Ⓝ 中島遺跡

1：沖積層，2：森口礫層およびその相当層，3：波田礫層，4：中山泥炭層，5：赤木山礫層・片丘礫層，6：梨ノ木礫層，7：塩嶺累層，8：閃緑岩類，9：新第三系，10：木崎岩（熔結凝灰岩類），11：中生界，12：花崗岩類，13：古生界，14：断層（破線は推定断層）

第1図　松本盆地南部の地質図
松本盆地団研（1977）を1部改編

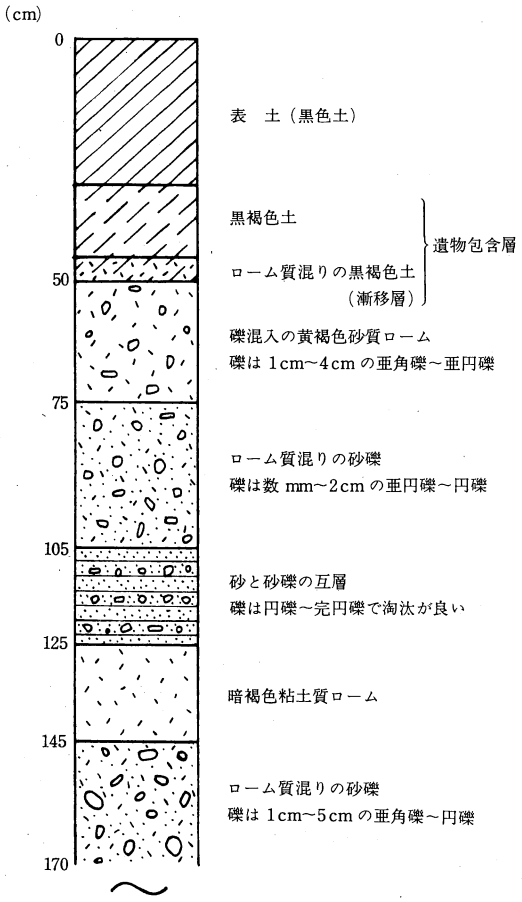
1972)，また地形的により低所の山麓部には，その凝灰角礫岩を主とする火山砕屑岩類および崖錐性堆積物の分布がみられる。

遺跡は，これらの地層を後背地にもつ田川によって形成された，第四紀段丘堆積層の上に立地している。

3）第四紀層

奈良井川・田川の扇状地および河岸段丘には，主に礫層からなる第四紀の氾濫原堆積層と，いわゆる“信州ローム”と称される火山灰層とが分布している。この礫層はかなり厚く，桔梗ヶ原付近では150m以上の層厚をもつが，塩尻駅付近では深度75mで基盤の古生層に達している。

遺跡のある郷原面は，洪積世最末期の礫層によって構成され，波田ローム層最上部（時期的には関東の立川ローム層上部に対比される）を整合にのせている。層厚は10～20m程度であり，桔梗ヶ原面を構成している波田礫層を削って不整合に堆積している。



第2図　C-7グリッドにおける地質柱状図

4）層　　序（第2図）

厚さ約50cmの沖積統は，色相から黒色土と黒褐色土に大別される。両者は漸移的な関係にあり，局所的に黒褐色土をほとんど欠いて20cm位の層薄になることもある。遺物包含層は主としてこの黒褐色土層にあたるが，おそらく後世の人為的な影響による攪乱が，かなりはいっていると見るべきであろう。

遺構は，その下の砂質ロームに掘り込んで造られているが，このロームはかなり水の影響を受けており，ローム面自体が西～北西方向，つまり段丘崖に向かって緩やかに傾斜している。そのために住居址の床面も若干傾斜している傾向がみられる。

礫質は，まれに古生層の硬砂岩・頁岩・チャートがみられるが，主として塩嶺累層の安山岩類である。この傾向は現河床の礫質と，ほぼ一致している。

5）遺構に使われている礫

住居址の炉石および埋甕の蓋石に使用されている砂岩・安山岩の巨礫は，そのほとんどが近くの田川から持ち上げられたものであるが，例外として5号住の炉石に使用されている安山岩の鉄平石がある。これは美ヶ原を中心に，武石峠・三峰山にかけて分布する美ヶ原溶岩類上部層の板状節理の発達した安山岩で，遺跡にもっとも近い所では，奥鉢伏山の頂上付近に局所的に分布している（松本盆地団研・1972)。しかしそこでも遺跡

との比高は1,100m以上あり，炉石の巨礫を仮りにそこから運び降ろしてきたとしても，その労苦はたいへんなものであったにちがいない。松本周辺では，鉄平石を遺構に用いている遺跡は少なく，最近では，梓川村の荒海渡遺跡で敷石遺構に用いている例が報告されているが，炉石としては類例が見あたらない。

6）環　　境

付近に湧水がないことから，古代の水の供給源は，やはり田川に依存していた分が強いと思われる。しかも縄文期の河床は，現河床よりも相対的に高いはずであるから，古河川が段崖直下を流れ，そのほとりに当集落が位置していた可能性も十分に考えられる。そう考えた場合，降雨時の川の氾濫および土砂の流出に対する問題が生じてくるが，実際には集落を破壊するそのような大規模な出水はなかったらしい。現に，遺構面に氾濫による攪乱や堆積物は確認されていない。おそらくこれは，田川の水量が少ないことや，川の勾配が極めて緩やかであることなどの現傾向が，古代においてもあまり違いがなかったということを意味しているのだろう。水質は比較的良質で，硬度が小さくまた鉄分も少ない。

気候的には典型的な中央高地式で，真冬の月平均最低気温は −7.0℃ 前後まで下がる。当時は現在よりも多少温暖であったと思われるが，加えて盆地中央部であるため山地からの吹き降ろしの寒風が強く，当時でも耐寒への配慮が多少なりとも必要だったと思われる。

（鳥羽嘉彦）

〈参考文献〉

井関弘太郎（1955）：遺跡周辺の地学的調査，『平出』，平出遺跡発掘調査団。

片田正人・礒見　博（1964）：5万分の1地質図幅「塩尻」，および同説明書，地質調査所。

岸　和男（1966）：長野県松本盆地水理地質図，および同説明書，地質調査所。

小野　晃（1969）：長野県高遠-塩尻地方に分布する領家変成帯の地質，地質学雑誌，Vol. 75, p. 491～498。

松本盆地団研（1972）：松本盆地の第四紀地質の概観，地質学論集，No. 7，p. 297～304。

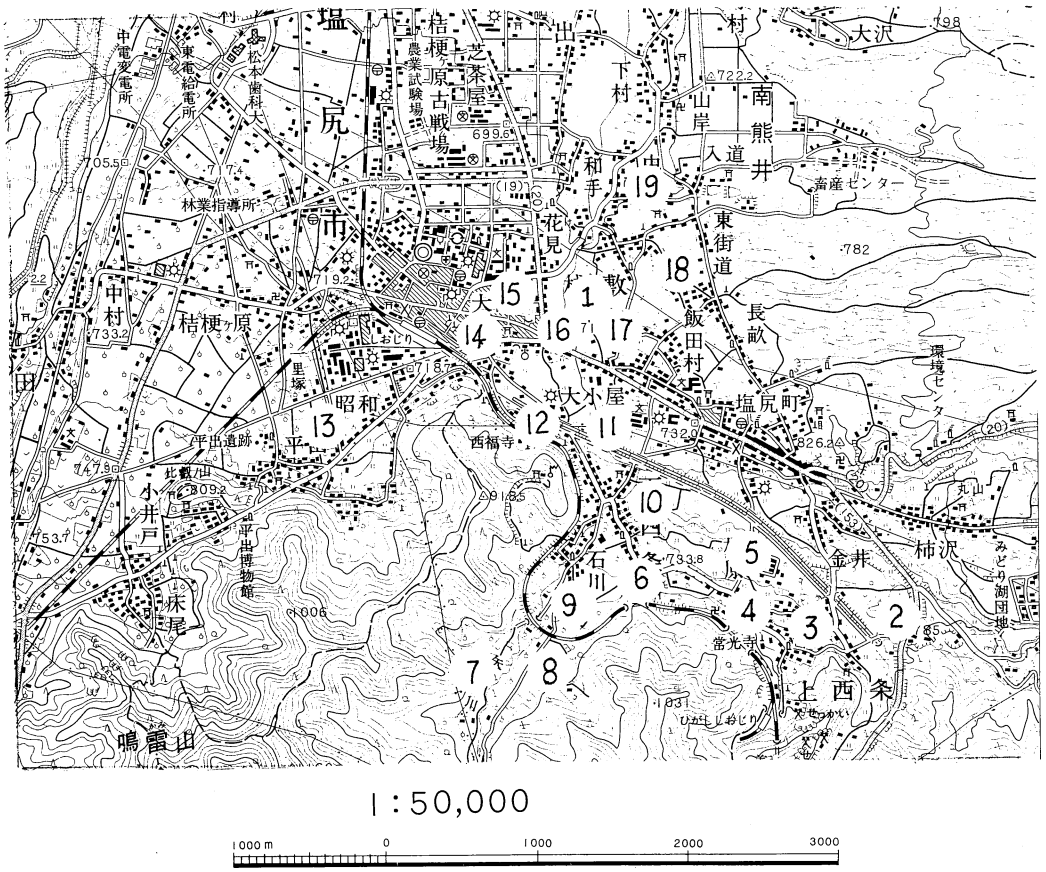
松本盆地団研（1977）：松本盆地の第四紀地質，地質学論集，No. 14，p. 93～102。

梓川村教育委員会（1978）：荒海渡遺跡発掘調査報告書。

第2節　歴史的環境

中島遺跡は松本平の南端，田川の右岸段丘上に位置する遺跡である。本遺跡周辺には第3図に示すように幾つかの遺跡が知られている。

まず縄文時代の遺跡であるが，田川の上流域および南方地域の中，下西条の山麓地帯に主として展開している。上西条には昭和44年に発掘調査が実施され8軒の縄文中期前半の住居址が検出された焼町遺跡（5），昭和47年に調査された峯畑剣の宮遺跡（3），更に前期の遺物を出土する中西条の



中島遺跡 1：中島，2：孤塚，3：峯畑剣の宮，4：記常塚，5：焼町，6：御岳神社西，7：栃久保，8：銭宮，9：石川，10：社前，11：砂田，12：西福寺前，13：平出，14：大門三番町，15：柴宮，16：大塚，18：五日市場，19：中挟

第3図 中島遺跡周辺遺跡分布図

御岳神社西遺跡(6)，下西条に存する中期前半の銭宮(8)，石川(9)，後半の栃久保(7)等多くの遺跡が知られている。

次の弥生時代の遺跡は縄文時代の遺跡が主として山麓地帯に分布していたのとは若干趣を異にして，より一層田川流域に近寄った場所に遺跡が残されている。しかし弥生時代の初めの中期初頭の土器を出土した社前遺跡(10)や阿島式土器の完形品を出土した銭宮遺跡(8)はやや山麓寄りの場所に立地している。後期になると石庖丁を出土した砂田遺跡(11)，西福寺前遺跡(12)，箱清水式土器を出土した大門三番町遺跡(14)，そして今回の調査地である中島遺跡は全て田川の沖積地沿辺に位置している。また重要なことは中島遺跡から南西約0.5kmに銅鐸を出土した大門柴宮遺跡(15)があり，今回の発掘調査で中島遺跡から弥生後期の住居址が検出されたことにより，銅鐸出土地は，中島・大門三番町・砂田・西福寺前の各遺跡のちょうど中心地に位置することが判明したことである。

弥生時代以降には栃久保，剣の宮，五日市場(18)遺跡から土師器，須恵器の出土があり，直ぐ西側の下大門からは瓦塔の出土も報じられている。また下西条の奥には銭宮古墳(８)，上西条には狐塚(２)，記常塚(３)の両古墳が知られ，更に本遺跡の200ｍほど南方の田川沿いに大塚古墳(16)が，そして現在その痕跡をまったくとどめないが小塚古墳(17)が存在していた。後の中世～近世にかけては中島遺跡の立地する小舌状台地の北端に高須城が築かれていたといわれる。

こうした歴史的環境の中にあり，中島遺跡は田川より100ｍほど東方にあたり，沖積面と2～3ｍの比高差をもって西側に緩傾斜する舌状台地に立地し，従来発見されていた縄文時代の遺跡分布はより山麓寄りであったことを考えるとかなり特異な在り方を示しているものとして重視されよう。そして，弥生期の遺構の検出も柴宮銅鐸の性格を明らかにする貴重な一資料を提供したといえよう。

（小林康男）

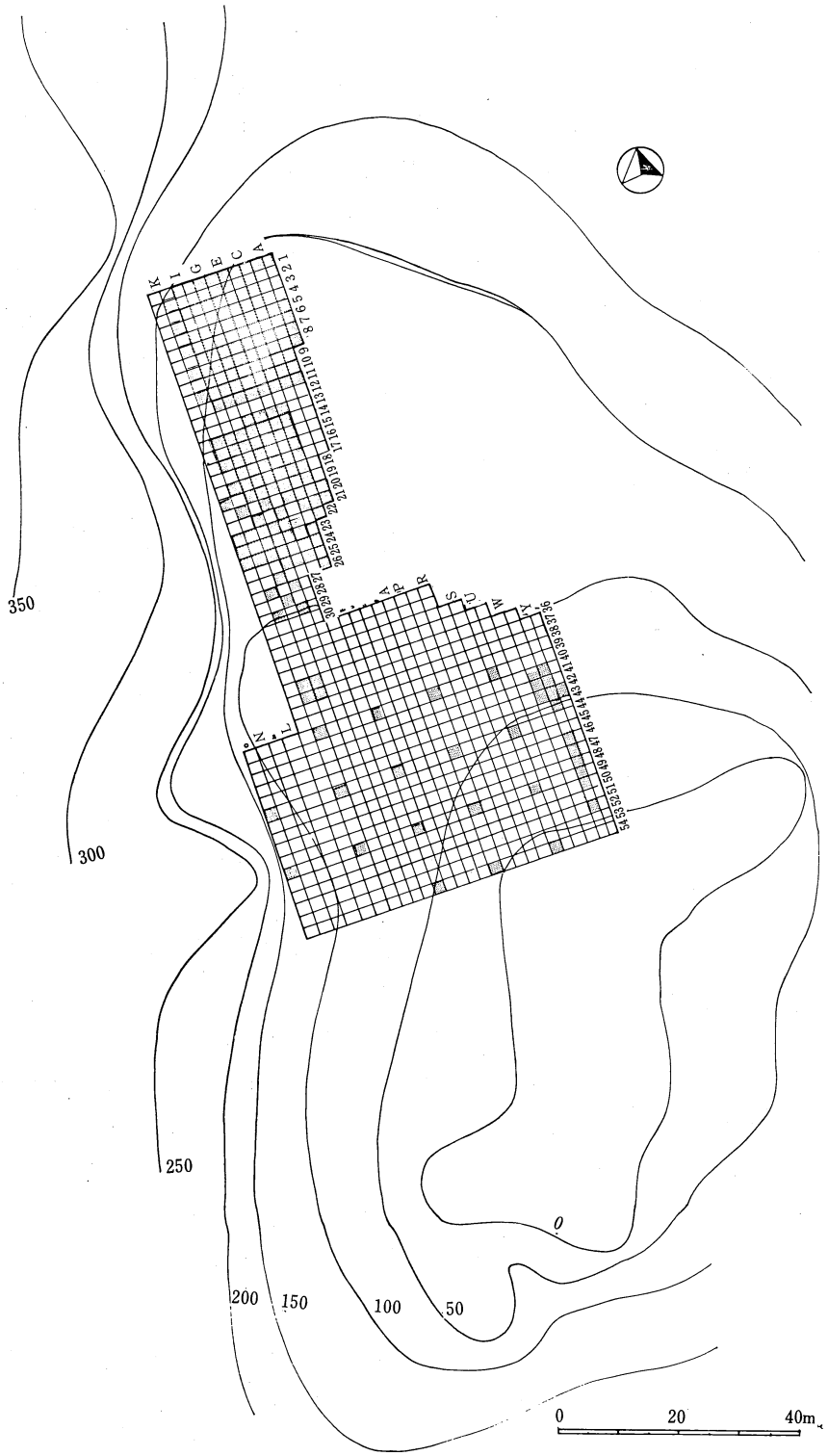
第３節　遺跡の概要

今回の中島遺跡の調査は，遺跡が立地する舌状台地の頂部および西側緩斜面を中心として行なった(第4,5図)。A～Z・1～54区まで214グリット856ｍ^{2}の発掘調査を行った。

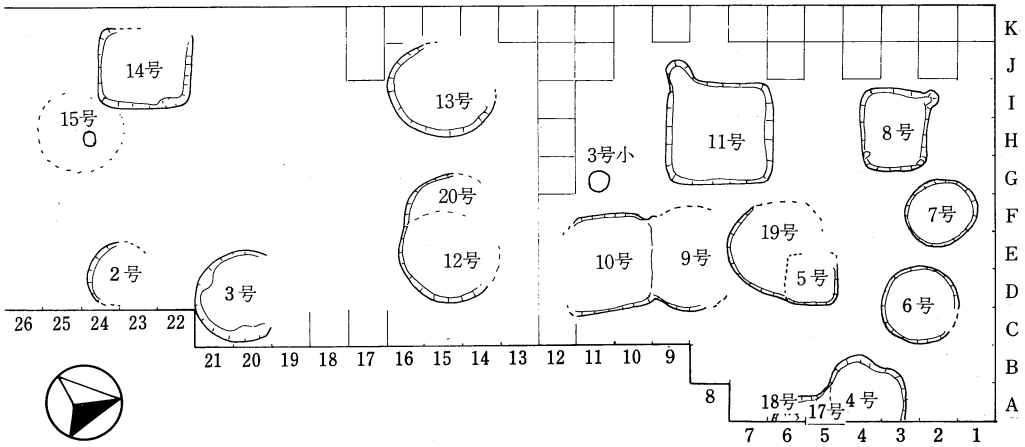
この結果，縄文時代中期前半1，中期後半13，弥生時代後期5，奈良～平安時代1の計20軒の竪穴住居址と縄文時代に属すると思われる小竪穴3ヶ所が検出された。出土遺物は縄文時代中期前半および後半に属する大量の土器・土偶・小形土器，そして石器では石鏃・石匙・打製石斧・凹石・石皿・磨石・磨製石斧・有孔石製品および黒曜石の原石その他がある。弥生時代に属するものは，後期の土器・ガラス小玉がある。弥生時代にはこの他に第1号住居址の大形甕形土器の中から検出された炭化種子がある。奈良～平安時代にかけては土師器の小破片・須恵器の坏・坏蓋・平瓶がある。

これらの遺構・遺物はその分布において若干の偏在性が認められる。すなわち本遺跡における最初頭の縄文時代中期前半には，台地上の中でもより南側E～G，P-24-43周辺にかけてかなり集中している。これに反して次の中期後半にはその中心がやや北側に移動し，A～J-1～22地区に集中的に遺構･遺物の分布がみられる。そしてこの中期前半と後半とは遺構･遺物は分布地区が余り重複せず独立しており，特にA～J-1～22にかけては中期前半の土器が1片の破片すら出土していない。またこれらの時期の住居址は，主として西側緩傾斜面に位置し，床面の西側に埋甕が，炉は東壁寄りに偏在していることが注意された。本遺跡地帯は北西ないしは南西方向の風が一年中強いことから，西側斜面に住居を構築し，しかもその出入口を西側すなわち田川方向（段丘崖方向）に向けていたものと推定される。

次の弥生期になるとその遺構・遺物の分布は台地頂部にはなく，西側傾斜面にのみ存在する。そして炉の位置は4号・8号のように西壁寄りになるものと，10号・11号のように北壁寄りに設置されるものとがあり，東壁寄りにあるものは皆無で，縄文時代の在り方と著しく相違しているは注目される。



第4図　中島遺跡全体図



第5図　中島遺跡遺構分布図（1：400）

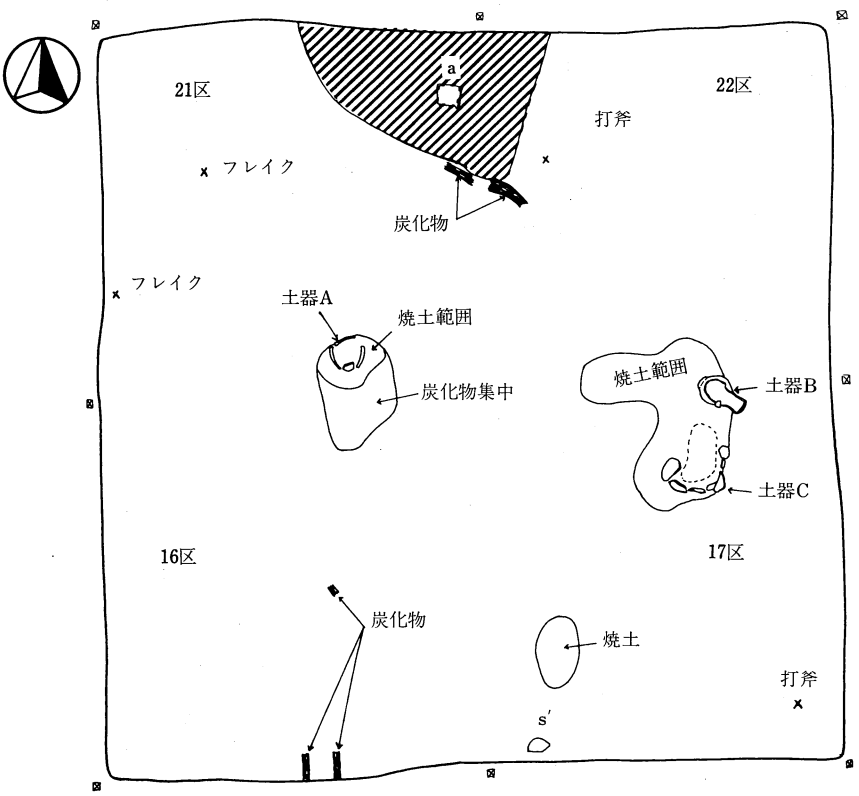
奈良～平安時代の遺構は段丘崖端にあり，大塚・小塚の両古墳の存在とともに，一軒のみではあったがその発見は重要であろう。カマドは北壁に設置され，弥生期のものと類似している。

（小林康男）

第Ⅲ章　遺　　構

第1節　住　居　址

1）第1号住居址（第6図）



第6図　第1号住居址

位置：第1号住居址はJK-35・36グリットにあり，本遺跡が存在する南北に伸びる段丘様の微高地の西端部に位置する。現地表面は微高地の最頂部から続く緩斜面の一部を成し，西および北西にかけてゆるやかな傾斜を持ち，この斜面は西に行き比高1.8mの急斜面になって一段低い田川の流れる高さと同じ高さの水田面へと続いている。場所的には，南方が微高地の最頂部で遮られてはいるものの，他の三方は視界が開け斜面前方に田川を望む場所である。

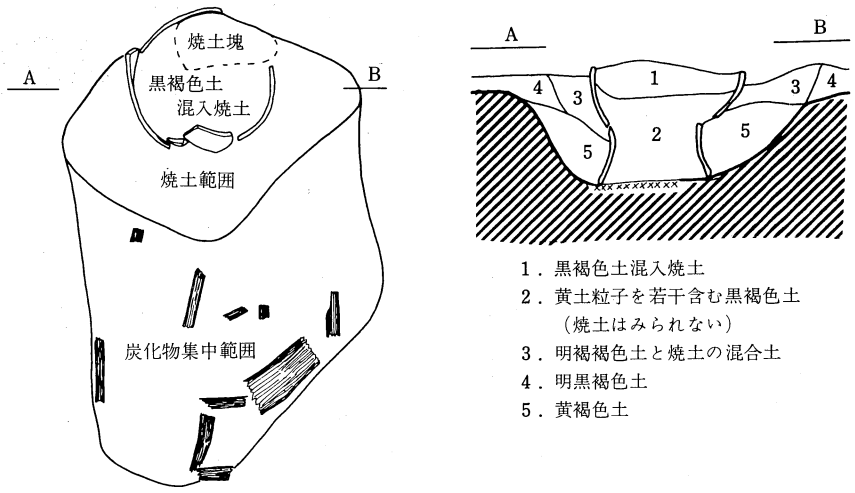
経過：調査は最初K35の掘り下げから開始された。耕作土は柔かい黒色土で－15cm～－20cm(現

地表面からの深さで，以下これに準ずる）と浅く，遺物はまったく見られなかった。この耕作土の下の層はよく締って硬くかつ粘性を持つ明黒褐色土層で結果的にこの層が遺物包含層であった。この明黒褐色土をさらに2cm～3cm掘り下げたK35北東隅に，ローム層（第6図a）が現われたため一時的にこの面で掘り下げを止めたところ，この面上K35南壁中央部際の明黒褐色土層中に土器個体（第6図土器A）および焼土が確認された。そのため隣接するJ35・36・K36区への拡張を行ない，最終的にこの地区はJK-35・36の合計四区の調査を実施したことになり，弥生後期の壺1，甕2，小形甕1の計4個体分の土器が出土した。

以下はこの四区の調査結果を挿図に基づき説明したものである。

第6図：第6図は土器・焼土・炭化物確認面（－20cm～－30cm）における全体図である。aはローム層の現出している箇所で他の部分は明黒褐色土である。ロームは砂質ロームで明黒褐色土とともによく締って硬く粘性を持っていた。遺物の出土面はほぼ平担で，あるいはこの面が当時の生活面であったのかもしれない。焼土・炭化物は全面にわたって広く散在していたが，図中には焼土は集中している部分，炭化物（木片質炭化物）は比較的大きな物のみが記入されている。これらは耕作土の下にある明黒褐色土層中の出土であり，後世の耕作による影響がまったく考えられないことから，火を受けている可能性を示しているといえるが明黒褐色土の状態からはどの程度の火であったのかわからなかった。なお，第6図四隅の深さは，K35北西隅で－30cm・J35北東隅で－23cm・K36南西隅で－20cm・J36南東隅で－26cmであった。

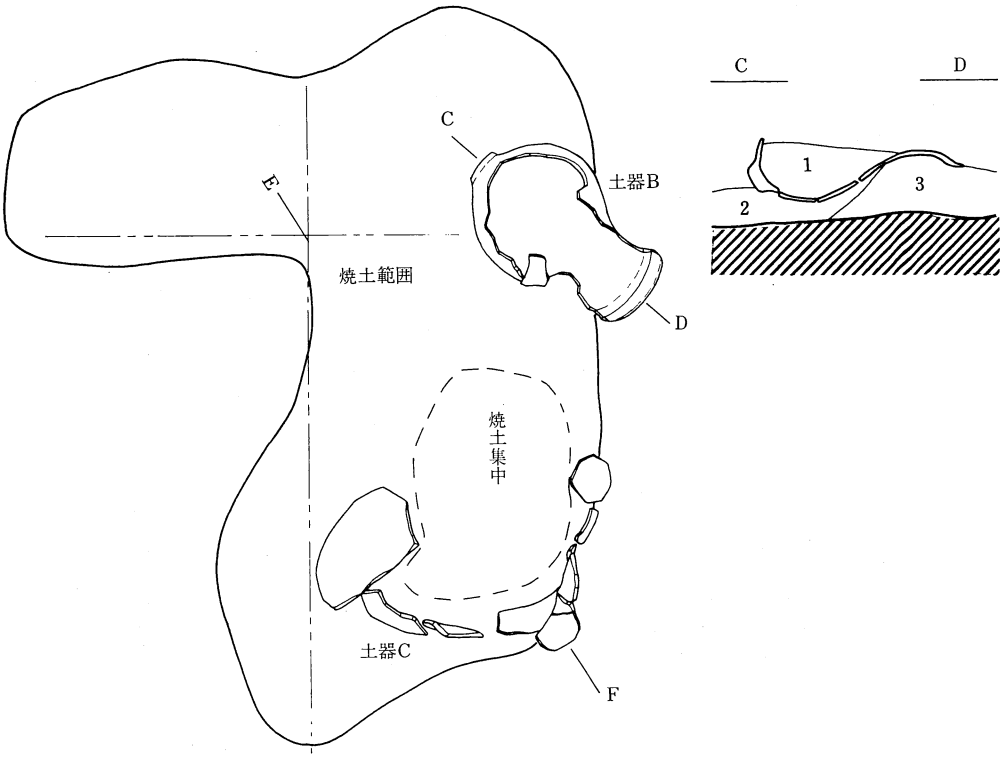
次に第6図中の出土土器A・B・C（便宜上出土順にA・B・Cとした）おのおのにつき述べていきたい。



第7図　土器Aおよび周辺の焼土・炭化物

土器Aについて：第7図はK35出土の土器A（第28図1）および周辺の焼土・炭化物出土状況の微細図である。箱清水式と思われる甕で土器上端の深さは－23cm～－25cm。焼土の分布は平均しておらずムラがあり，炭化物集中範囲内には焼土はみられなかった。土器Aはこの焼土範囲内に位置し，かつ土器上端部が焼土面より1cm～3cm程高かったため発見時点では埋甕炉を思わせた。ピットが掘られ逆位に埋められており，下胴部および底部は欠失していたが土器上端部がかなり磨滅しているため埋没時においてすでになかったものと思われる。図からも明らかであるが土器本体は土圧によって押し潰されていた。ピット覆土つまり図中5層は焼土粒を若干含む粘性強く硬い黄褐色土で，土器の支えのためかコブシ大の半分くらいの大きさの礫が埋めこまれ，かつピット内ローム直上には小礫が敷き詰められていた。土器内部の覆土については，上層である図中1層は明黒褐色土混入焼土および焼土塊，下層である図中2層は黄土粒を若干含む焼土のみられない明黒褐色土という構成で，1層・2層ともによく締っており硬い土であった。これらからこの土器が人為的に埋められていたことは明らかであったが，使用目的については埋甕炉の可能性を残しながらも現時点では断定することはできなかった。

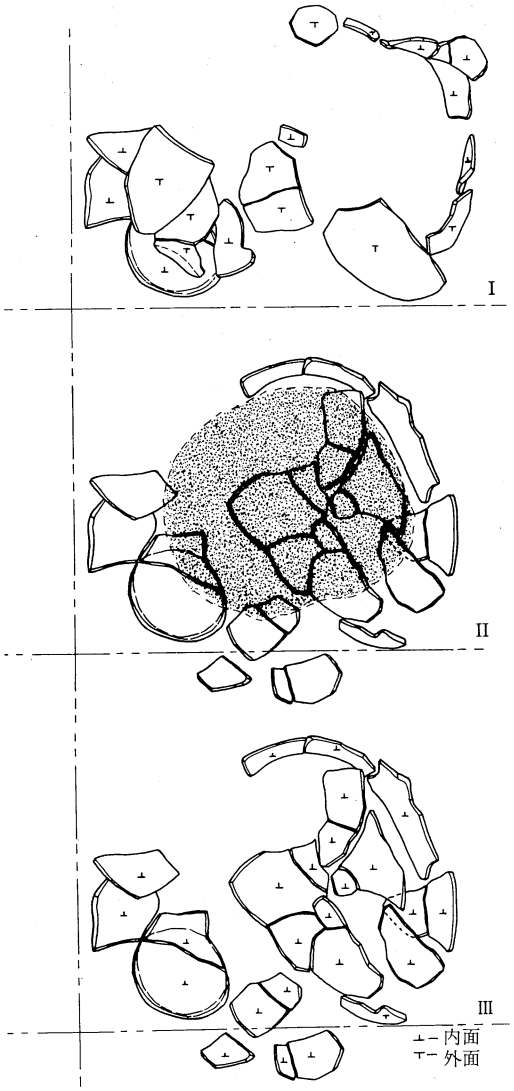
土器B・土器Cについて：第8図は，土器B（第28図2）・土器C（第28図3）および周辺焼土の出土状況微細図である。出土面はほぼ平担で－25cm前後。土器Cは多量の炭化種子出土をみた土



第8図　土器B・土器Cおよび周辺焼土

器であるが，この時点では一部を現わしているにすぎない。図中の焼土の分布は平均しておらずムラがみられた。しかし土器Cに囲まれた部分に焼土が集中しており，この部分のみきれいな焼土であったため，炭化種子出土と何らかの関連性があるものと思われる。以下は土器Bと土器Cおのおのについての出土状況説明である。

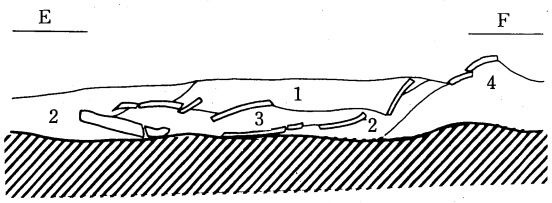
土器B：土器BはJ36とJ35区の境の焼土出土面直上，つまり調査時における東西ベルト内より発見されたもので，黒色薄手の壺形土器である。本来直立して置かれていたものが倒れた様な状態での出土であるが，土器本体は完全に横転はしておらず口辺部を上に底部を下にした幾分傾斜を持たせた状態で，残存部は3分の1程度埋没していた。土器内部に詰っていた土は黄土粒混入の硬い黒色土で，土器本体の上側半分は後世の耕作により欠失していた。この土器が発見された時点において残存部は完形ではないかと思われたが，やはり土圧によって破損を受けていた。



第9図　土器Cおよび炭化種子出土状況

土器C：土器Cについてであるが，多量の炭化種子の出土からおそらく貯蔵用の甕だったものと思われる。第8図からも明らかなように土器片に囲まれた部分に焼土が集中しており，土器上端部は焼土面より1cm～3cm程高く，あたかも人為的に並べられたかのような様相を呈していた。この第8図中の土器C関係の土器片は口辺部から頸部にかけてのものと胴上部にあたるものであった。この焼土の掘り下げを進めたところ，3cm～5cm下層において底部と下胴部にあたる土器片を中心とする土器層が存在した(第9図Ⅰ)。この土器層は上下2層に分けることができ，上層に存在する土器片は土器外面を上に向け，下層に存在する土器片は土器内面を上に向けており，さらに底部も内面を上に向けているため，横倒しになった土器が何らかの圧力で完全に押し潰されたということがこの状態から察せられた。この時点で土器周辺の焼土混入黒褐色土内に炭化種子が散在していることが確認されたため，この土器片の中でも上層のものを取り除いたところ，この土器片の下および第8図の焼土集中範囲下において厚さ2cm～

3cmに及ぶ炭化種子層の出土をみた（第9図II）。この炭化種子層はみごとなもので層内には炭化種子がぎっしり詰まっており，調査時点で崩壊してしまい採集不可能になったものが多多あるにもかかわらず全部で容積にして5ℓもあった（種子の種類については「第Ⅳ章の第5節炭化物」の項を参照されたい）。このため，急ぎこの炭化種子の採集を行なったのであるが，その際この層の下にさらに土器片群があることが確認された（第9図III）。この土器片群の土器片は胴上部から胴中部にあたる部分によって構成され，ほとんどが土器内面を上に向けた状態で出土していた。これらから土器Cは貯蔵用に土器内部に種子を入れたまま横倒しになり完全に押し潰されたということがいえる（第10図）。けれども焼土が土器Cの存在する箇所に集中している点，最下部の土器片群がローム直上であった点等疑問の点もあり，どのような経過を経て現在の調査発見時における埋没状態となったのであろうか，またどの時点において火を受けたのであろうかについては明らかにすることはできなかった。



1．焼土　2．明黒褐色土と焼土の混合土
3．炭化種子　4．明黒褐色土
（註－この図の1および2の一部は調査時の図に加筆修正したものである）

第10図　土器C埋没状態

その他：他の遺物としては，J35･36から打製石斧各1点（調査後行方不明），K35から黒曜石フレイク2点，17区と22区の境付近から出土し遺物整理時に判明した小形甕（第28図4）が出土している。これらはいずれも焼土・炭化物出土面からの出土であるが，他には遺物はみられなかった。

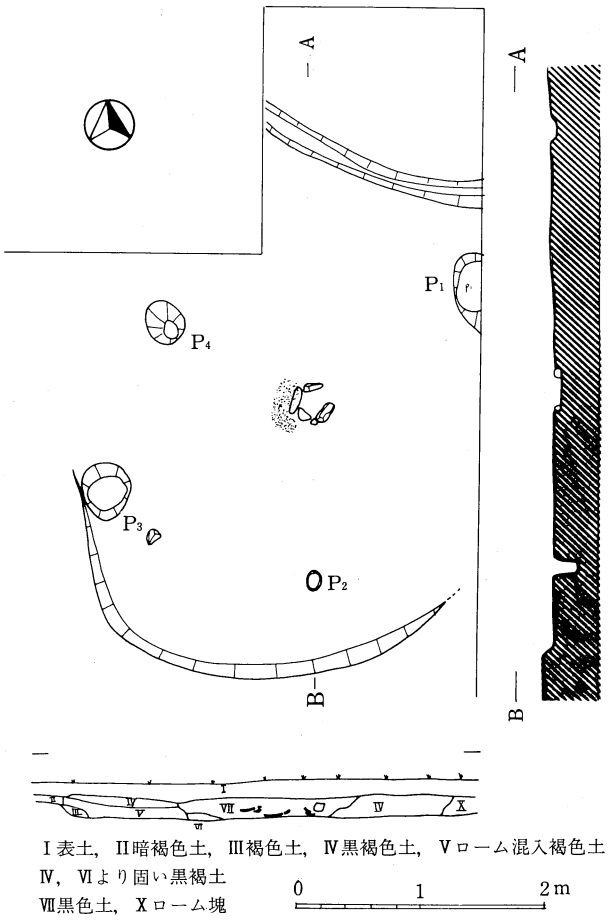
最後に：以上がJK-35･36区の調査結果である。この後，ローム層直上までの掘り下げを行なったが住居址の壁等の存在は確認できなかった。ローム層へは第6図の面から5cm～10cmの掘り下げで達することができたが，ローム上面はゆるやかな傾斜を持って第6図aに続きかつ平担ではなくかなりデコボコしており遺物もまったく見られなかった。位置的にみて本遺跡は，柴宮発見の銅鐸出土地から直線距離にして約0.5kmの位置にあり，現在は市街によって遮ぎられてはいるけれども，地理的にも地形的にも望見は可能な場所である。

（山本紀之）

2）第2号住居址（第11図）

第2号址は，F24～26，G24～25グリットに位置し，本址の北側には溝状遺構が東西に走る。

表土削除の段階で，多数の土器片が出土したため，住居址の存在を推定したところ，表土下20cm程で，ロームカットによる住居址の落ち込みを確認する。覆土を横剝ぎ法により除去していったが，覆土堆積が10cm程度と非常に薄いため，住居址内覆土セクション図の作成段階において，はじめて堆積状態を観察する。上層は，粒子が細かく粘性をもつ黒褐色土層であり，下層は，ローム粒を



第11図　第2号住居址

若干含み粘性の強い暗褐色土層である。更に，壁際では褐色土の三角堆積がみられる。最後に，住居址内を精査し，床面・壁面・炉址・柱穴を検出する。

住居址の平面形態は，径4.5m前後の不整円形と推定されるが，南壁が残存しているだけなので判然としない。壁面は，ローム層をほぼ垂直に掘り込み，壁高は9cmを計る。床面は，平担で比較的よく踏み固められている。

主柱穴は，P_1(−10cm)，P_3(−15cm)，P_4(−15cm) と規模は小さいながらも，配置を検討すると，4柱穴と推定されるが，住居址南東部には検出されない。P_2(−20cm) は，支柱穴であろうか。ともに垂直に掘り込まれている。

炉址は，住居址のほぼ中央に位置している。長さ15〜20cmの河原石4個と拳(こぶし)程度の石1個を使用した，径30cm前後の円形石囲炉であるが，北東側の炉石が抜去されている。炉石上面は床より5cmほど浮いている。また炉底は平担であり，深さは10cmと浅い。炉址内より，焼土粒や炭化物

片を少量検出し，炉址の南西側床面上において，焼土の堆積（45×15cm）を確認する。

遺物の出土は炉址脇の床面より5～10cmほど浮いて第29図－1の土器等が集中的に出土した。

本址の時期は縄文中期藤内Ⅰ式期と思われる。

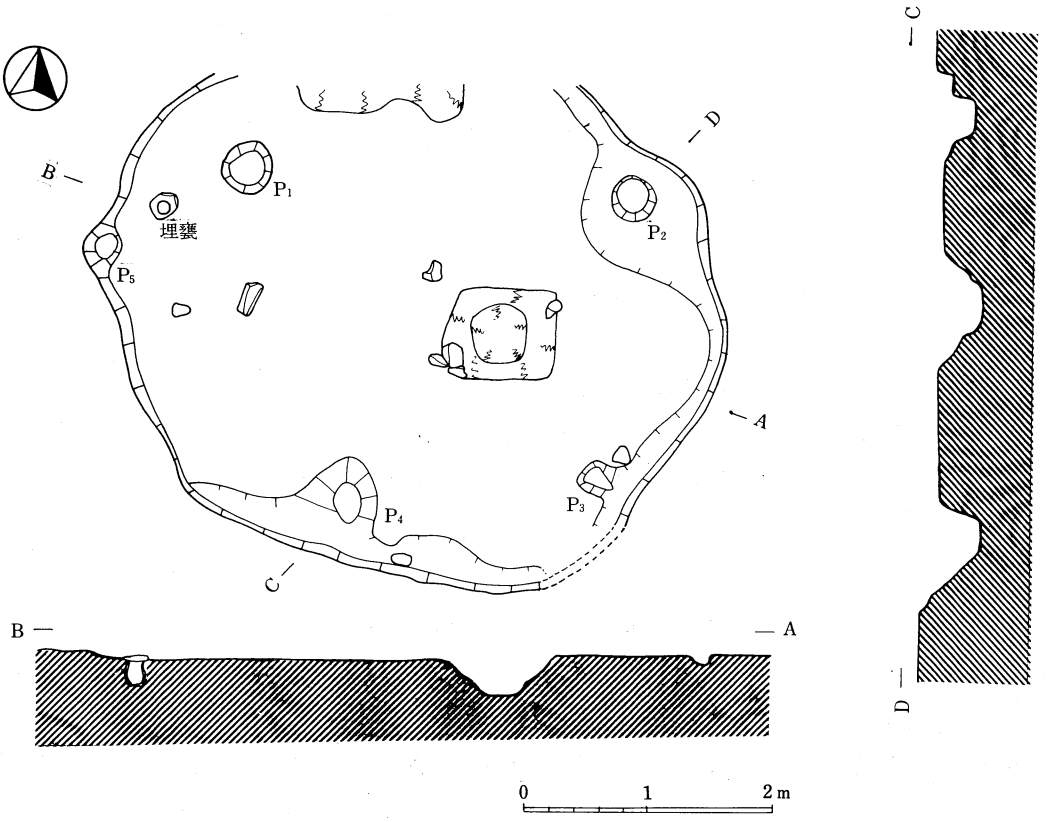
（平林　彰）

3）第3号住居址（第12図）

第3号住居址はDEF-20・21に位置する。北側部分が一部未調査であり，全体のプランを明らかにすることができなかったが東西5m，南北4.5mほどの東西に長い楕円形を呈するものと思われる。

壁は未調査部分を除き全周囲に残り，壁高は西壁で5cm，東壁で10cmと全体的に低い。砂利混じりのローム層を傾斜をなして掘り込んでいる。壁高が低いのは，本址が地表面から住居址壁面上までわずか22cm，床面まででも32cmと非常に浅いため，耕作時による攪乱もかなり影響しているものと思われる。

床は南半部分は堅く平担に踏み固められ，良好に残されているが，北半部分は砂利混じりローム



第12図　第3号住居址

上のためか凹凸が激しく余り良くない。東の床面上には28×14cm，厚さ10cmの石が置かれている。周溝は西・北壁下にあり，柱穴部分は攪乱され不規則になっているが，全体的に幅はおおよそ13cm～30cmで，深さは3cm前後と浅い。柱穴は5本あり，P_1～P_4が主柱穴であろう。深さはP_1(－40)，P_2(－17)，P_3(－18)，P_4(－47) でほぼ垂直に掘り込んでいる。

炉は東寄りに設けられ，88×74cmのほぼ正方形で，現在は3ヶの石がある。炉の断面をみると炉壁に石を抜き取ったような段が認められるので，当初は全周囲に石を巡らした石囲炉であったものと推定される。炉はすり鉢状に掘られ，炉底までの深さは30cmで焼土は認められない。

埋甕はP_1とP_5との中間で，西壁から30cm内側に入った所に位置する。19×24cm，厚さ6cmの蓋石をもち，第29図－2の土器を正位に埋め込んでいた。土器の底部には故意に穿ったものか否か判然としないが，3cmの穴が開けられていた。蓋石下面は床面と同一レベルに置かれ，埋甕の口縁は床面と同じレベルであった。埋甕と砂利混じりロームとの間には1cm前後の黒土がみられ，甕を埋めるにあたってはほぼ2の土器が入るだけのギリギリのピットを掘ったことがうかがえる。本址の時期は埋甕および第31図に示す出土土器により縄文中期曽利II～III期に相当するものと思われる。

（小林康男）

4）第4号住居址（第13図）

第4号住居址はAB-3･4グリットで発見され，今回の調査地域では最も北の地域にあたる。東側が未調査であり，また南側は19号住居址と重複しているため住居址の全体プランを確認することができなかったが，調査地域から推定すれば一辺4m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。

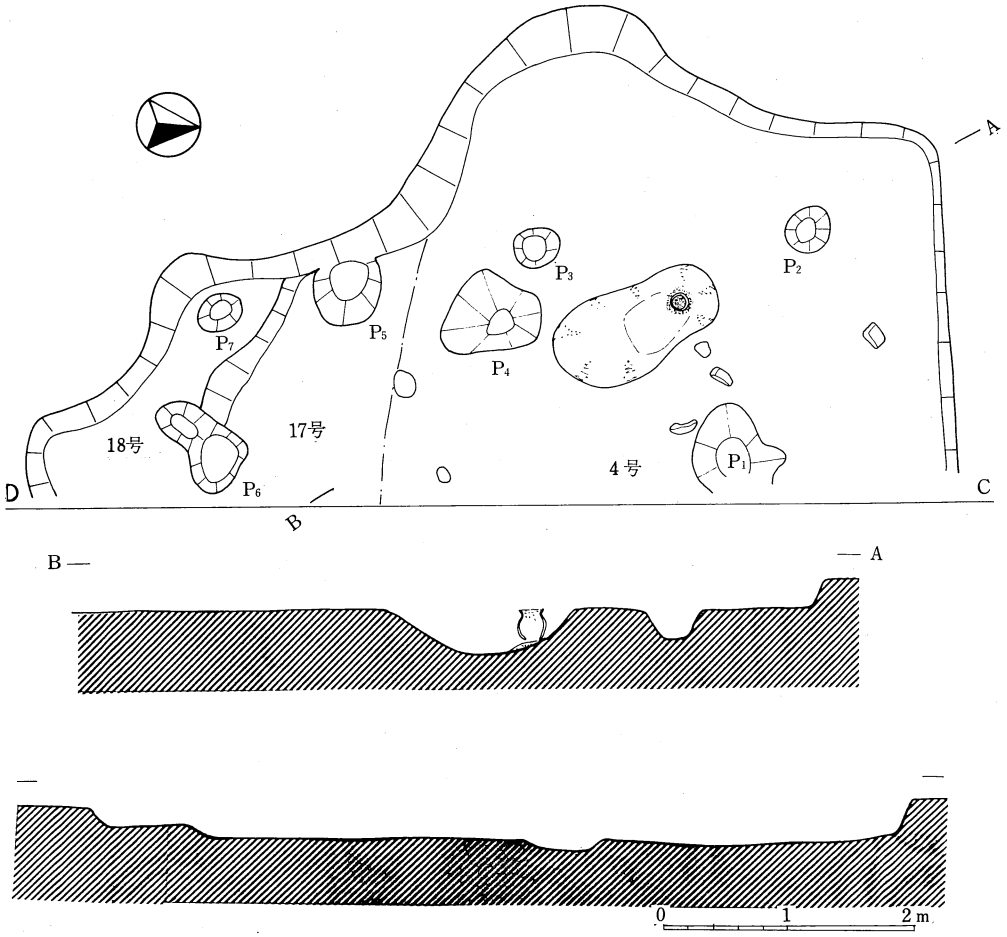
壁は西・北と南壁の1部が検出されている。壁の掘り込みは砂利層を掘り込んでいるため，壁面はくずれ易く，そのため壁はなだらかにくずれ落ち傾斜を示している。堅高は北で13cm，西で15cmである。

床面は砂利層上に1cm程度のローム土を敷き，よく踏み固めて作られている。しかしこのような床面は殆んど残されておらず，わずかに炉東側の一部に認められるだけで，他の部分は砂利層が顔を出しており，起伏が激しくかなり荒れた状態となっている。柱穴は4号址範囲内に4ヶ所あるが，4号址の柱穴と思われるものは，P_2・P_3であり，P_1・P_4は17号址あるいは18号址に属するものと考えられる。P_2(－26)，P_3(－17) で垂直にきれいに掘られている。

炉は西壁寄りにあり，135×70cmの楕円形で，23cmほど擦鉢状に掘り込んで作られ，その掘り込みの北端に土器を埋設している。埋設土器の周囲はローム状の土によって固められ，その周辺にわずかな焼土が散布していた。この埋設土器の上端は床面より5cmほど上に出ている。

本址は弥生期の住居址であるが，覆土中からは第32図にみられるごとく縄文土器の出土が多く，弥生土器の出土は非常に微々たるものであった。本址の時期は炉址埋設土器より弥生時代後期に属するものである。

（小林康男）



第13図　第4号17号18号住居址

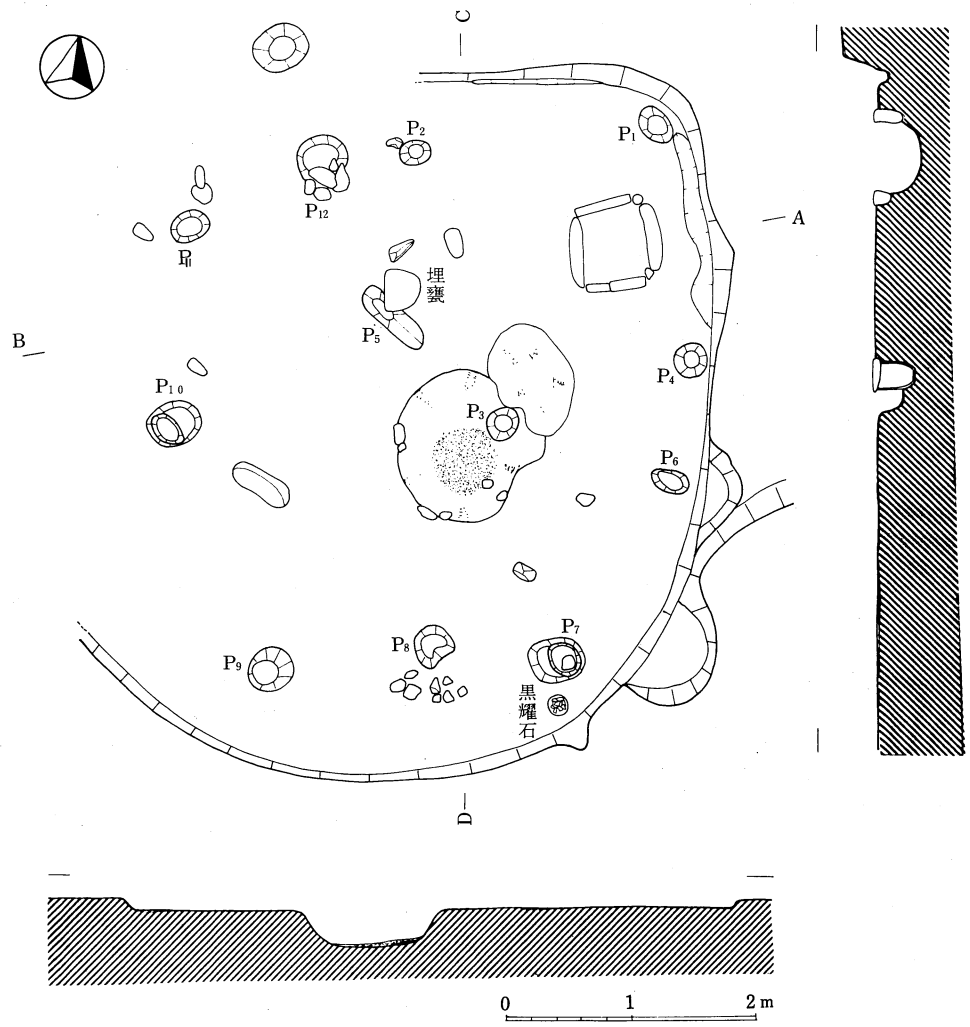
5）第5号住居址（第14・15図）

第5号住居址はDE-5・6にかけて発見された。南側を19号住居址と重複している。

プランは壁，柱穴の位置等から考えて一辺3mほどの隅丸方形と思われる。

壁は北および東壁の一部が残されていたが，他は検出することができなかった。壁高は北壁で18cm，東壁で30cmとなり西に向かって漸減している。西に向かって傾斜地となっているため西壁が殆んどなかったのかもしれない。

床はローム土上に作られ，炉周辺は平担であるが，埋甕の周囲になると10cm前後傾斜している。床面の状態は堅緻で非常に良好である。南側床面上に80×65cmの楕円形で，最頂部で20cmを計るロームの堆積がみられる。周溝は東・北壁下にあり，ちょうど柱穴の間に掘り込まれた形となっている。東壁下の周溝は幅10～20cm，深さ10cmで蛇行しているが，北壁下のものは幅8cm，深

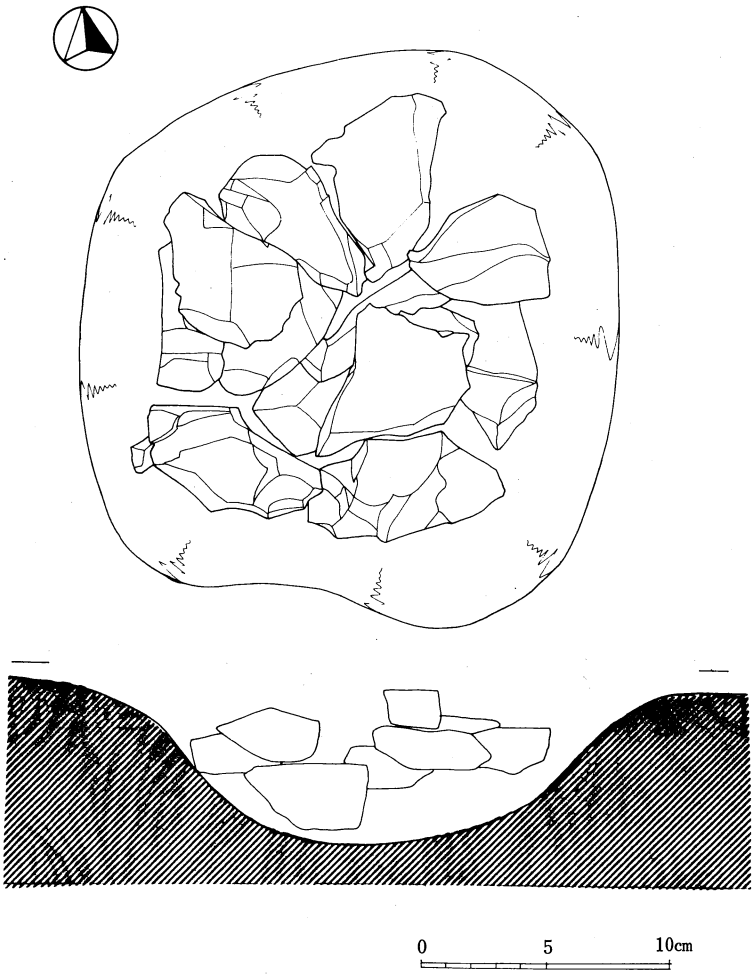


第14図 第5号19号住居址

さ7cmで直線状をなしている。

本住居址に属すると思われる柱穴はP_1～P_5まであるが，主柱穴はP_1(−24)，P_2(−21)，P_3(−49)，P_4(−39) の4本である。各々垂直にきれいに掘り込まれている。

炉址は東壁より35cmと非常に接近して作られている。65×75cmの方形の石囲炉で，小さな住居址の割には大きな炉址ということができ，壁に異常に接近して作られていることと共に本住居址を特色づけている。炉石は四周とも完存し，45×8cm，高さ25cmの大きな板状の安山岩や67×10cm，幅14cm，60×12cm・幅21cmというような大きな石を用いている。板状の安山岩に関しては第II章の遺跡周辺の自然環境の項で触れているごとく遺跡周辺では容易に手に入れることができ



第15図　黒曜石集石図

ないものであるという。炉石に何か特別な意義がもたされていたのであろうか。これらの炉石の上面は床面より3cmほど高く，平担な面をきれににそろしている。炉底はすり鉢状で，この周囲に焼土が散布していた。

埋甕は西側にあり，甕上に34×30cm，厚さ5cmの硬砂岩の扁平な石の蓋があり，甕上端はほぼ床面と同一レベルであった。したがって蓋石は床面上に出た状態であった。埋甕は第33図－4を正位に埋めていた。埋甕とローム土との間には1cmほどの黒色土がみられ，また南側にはピットがある。

遺物は炉址周辺，特に炉址と東壁との間に集中して出土した。第33図2～3の半完形品があたかも壁上から転り落ちたような状態で積み重なって出土した。

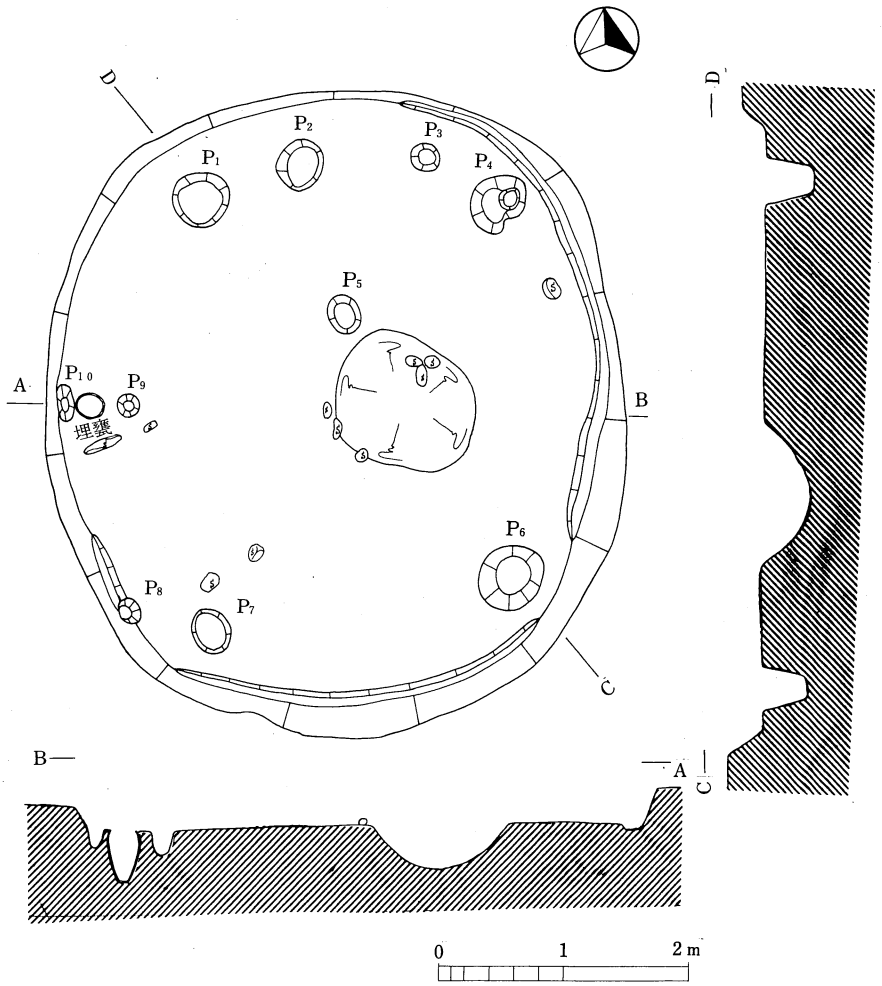
本址の時期は埋甕および出土土器から縄文中期曽利Ⅲ期と思われる。

（小林康男）

6）第6号住居址（第16図）

第6号住居址はC・D-2・3グリットを中心に発見された住居址でプランは完全に確認することができた。長軸5.1m，短軸4.5mのほぼ円形に近いプランで東壁のみ砂礫層を掘り込んでいるほかはローム層を掘り込んだ状態であった。壁は，北壁7cm，東壁28cm，南壁19cm，西壁18cmで垂直に近い状態で立ち上がっており，北側へいくにつれ壁は低くなっている。

床面は全体に堅く締まっており，ほぼ平担であるが，この住居址は全体として西側に傾斜してい



第16図　第6号住居址

る。周溝は幅約10cm，深さ2cm～8cmで二ヶ所切れてはいるが東側半分をめぐっており，西側半分には確認されていない。

ピットはP_1からP_{10}まで確認されている。この内P_1(－40cm)，P_4(－41cm)，P_6(－36cm)，P_7(－41cm) の4本は，他の6本のピットの深さが－20cm以内であるのに比べかなりの深さをもち，且つ4本とも近似した深さを持っているため，この住居址における主柱穴であると考えられる。

炉址は，中央やや東よりにあり，1.2m×1mの規模で床面からの深さ40cmの丸底の炉址である。炉底に多少の焼土を残し，炉址の縁辺に3個，炉址内中ほどに3個の石があり，後者の3個の石は縁辺からずり落ちた様な状態であった。どの石も焼けていない。当初はおそらく石囲炉であったものと推定される。

埋甕は，西壁中央部から20cmほど内側に離れて正位の状態で発見され，ほぼ完形の状態で出土した。埋甕上端はちょうど床面と同一レベルであった。内部には黒色土が入っており，わずかながら炭素の粒が見られた。埋甕の埋設状態を観察してみると，甕とローム層との間には約5mmほどの褐色土がはさまれていたことから，埋甕を埋設するに際しては甕がキッチリと入るようにきちんと掘り込んだことが分かる。本遺跡の他の埋甕でも同様な状態が観察されている。

尚，伴出遺物は，住居内の床面中央上層，炉址内及びその周辺から10～20cm浮上して埋甕までの間で割合かたまって発見されており，周壁の付近ではほとんど発見されなかった。また炉址内において底部から10cmほど上のレベルで炭化したドングリが1点出土しているほかに炭化物の発見はなかった。

（宮城孝之）

7）第7号住居址（第17図）

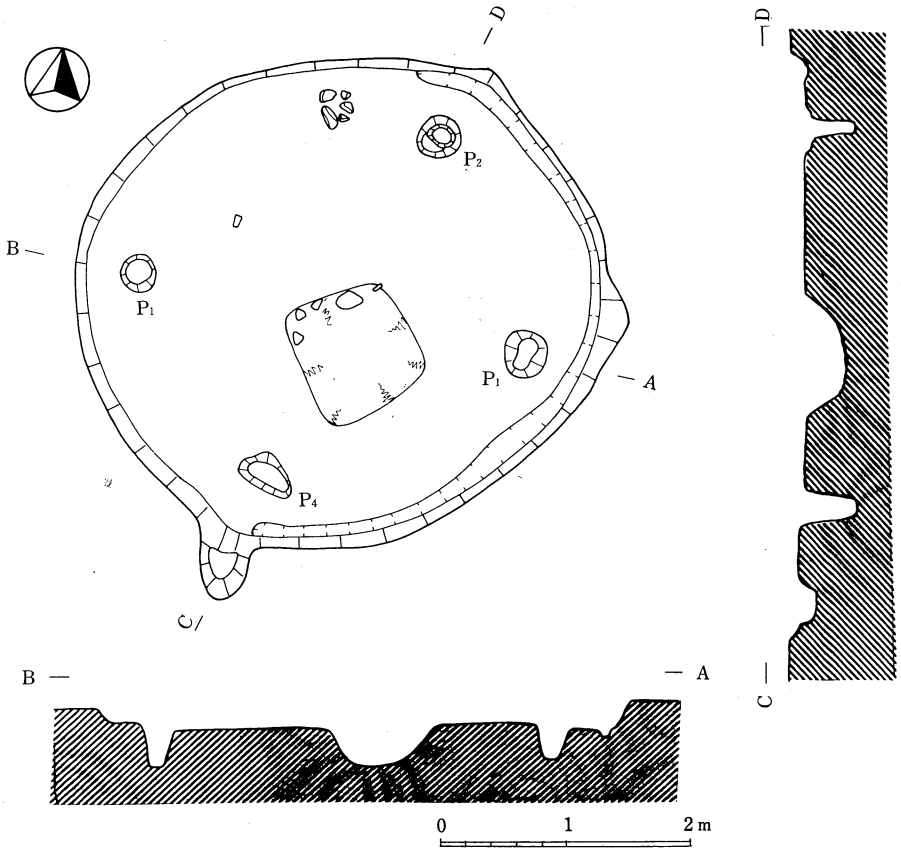
第7号住居址はEFG-1～3グリットにかけて発見された。調査区域の中では6号址とともに最も北に位置している。

プランは東西4.2m，南北3.9mのほぼ円形を呈する比較的小形の住居址である。壁は全周囲とも完存し，壁高は東壁25cm，西壁17cmで，西側になるにつれて低くなっている。地形が西に向かって傾斜しているためと思われる。壁の掘り込みはローム面をほぼ垂直にきれいに行われている。

周溝は東壁下を中心として一部南壁におよんでいる。幅は20～7cm，深さは6cmである。床面は北西方向にやや傾斜しているが，全体的に平担で，よく踏み固められたきれいな床である。北側隅の床面上から人頭大から拳大の石5個が床にくっついて発見された。

柱穴はP_1(－29)，P_2(－38)，P_3(－26)，P_4(－41) の4本で垂直に掘り込まれている。P_2の底より第59図－11の打製石斧が出土し，またP_4を中心とした床面および柱穴内から黒曜石の細片が多量に出土した。

炉址は南東にやや片寄って作られている。当初は石囲炉であったと思われるが北側の一部に炉石が残されているのみで，他は抜き取られている。残されている炉石は20～10cm内外のもので余り



第17図　第7号住居址

大きなものではない。炉底はすり鉢状に掘られ，丸くなっている。焼土は炉底付近に若干認められる程度で余り顕著ではない。

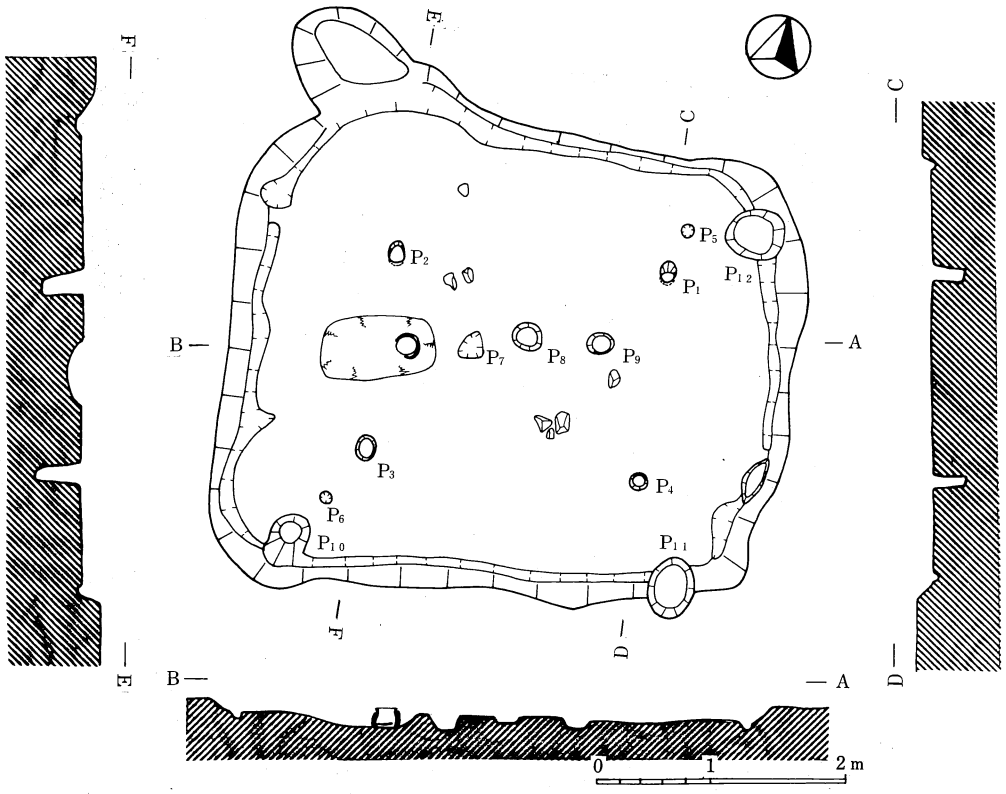
出土遺物は余り多くなく，その大部分が覆土中からの出土であった。本址の時期は縄文中期曽利Ⅲ～Ⅳ期と考えられる。

（小林康男）

8）第8号住居址（第18・19図）

第8号住居址はGHI-2～4グリットにかけて検出された。東西4.5m，南北3.7mの隅丸方形を呈し，北西隅には縄文時代のものと思われる小竪穴と重複している。

壁は北西隅を除き良好に残存し，壁高は東15cm，南14cm，西9cm，北7cmで，西に向かい低くなっている。掘り込みはやや傾斜をなして立ち上がっている。周溝は小竪穴，ピットの部分を除き全周している。幅6cm，深さ3～6cmである。

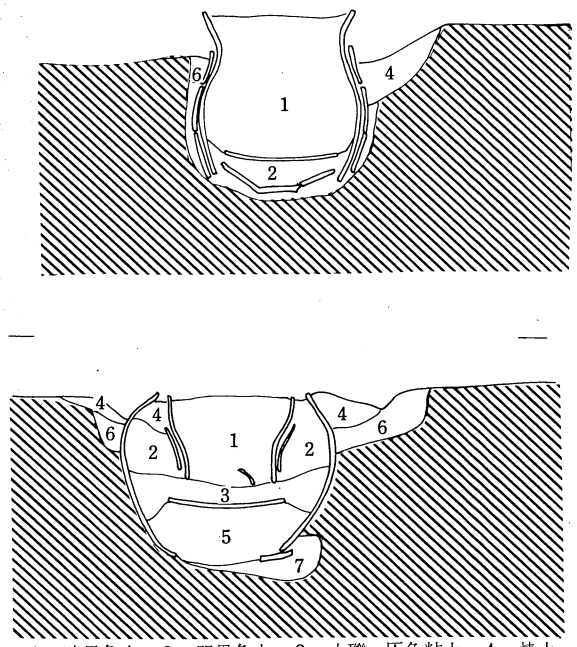


第18図　第8号住居址

床は小砂利混じりのローム面上に構築され，平担で非常に堅緻であるが，北西部分は凹凸があり軟弱である。中央部付近に人頭大の自然石が数個置かれている。

本址に属するピットは13あるが，主柱穴はP_1～P_4の4本である。直径はP_1(12)，P_2(12)，P_3(15)，P_4(14) で，深さはP_1(26)，P_2(36)，P_3(39)，P_4(30) である。P_5(−14)，P_6(−11) は対角線上にあり，支柱穴的性格を有するものであろう。また床面中央を東西にP_7～P_9のピットがあり，いずれも10cm内外の浅いものである。壁に接してP_{10}～P_{13}があり，P_{11}は −47cm と深い。

炉はP_2・P_3の中間にあり，西側に片寄って設けられている。90×50cm，深さ11cmの楕円形を呈した掘り込みの東端部分に第36図−1の土器が埋め込まれている。埋設土器の上端は床面と同一レベルである。この埋設土器は第19図に示す如く，やや特異な在り方を示している。第36図−2の土器の外側の肩部から下に第37図16～17のような6×3cmほどの土器片を貼りつけ本体の土器を補強していた。特に最も上に貼り付けられた16，17のような口縁部の破片は，本体土器により密着するように口唇部を下に向けられていた。発掘当初は余りにぴったり付いていたためただ一つの土器を使用しているものと見間違えるほどであった。更に土器内には底から5cmほど上位に15cm



1．暗黒色土　2．明黒色土　3．小礫・灰色粘土　4．焼土
5．黒色土　6．褐色土　7．ローム・黒色土の混入

第19図　埋甕炉断面図
上　8号址，下　11号址

ほどの大きな土器片を横に敷いて使用され，またその下には本体土器の底部が中にめり込むような状態で検出された。このような土器内に大形土器片を敷くという状態は第11号住居址の炉址でも認められ，中島遺跡の弥生期の住居址にはかなり一般的であったことがうかがえる。

本址からは床面中央部に弥生の土器片が大量に出土し注目された。

本址は弥生時代後期箱清水期と考えられる。

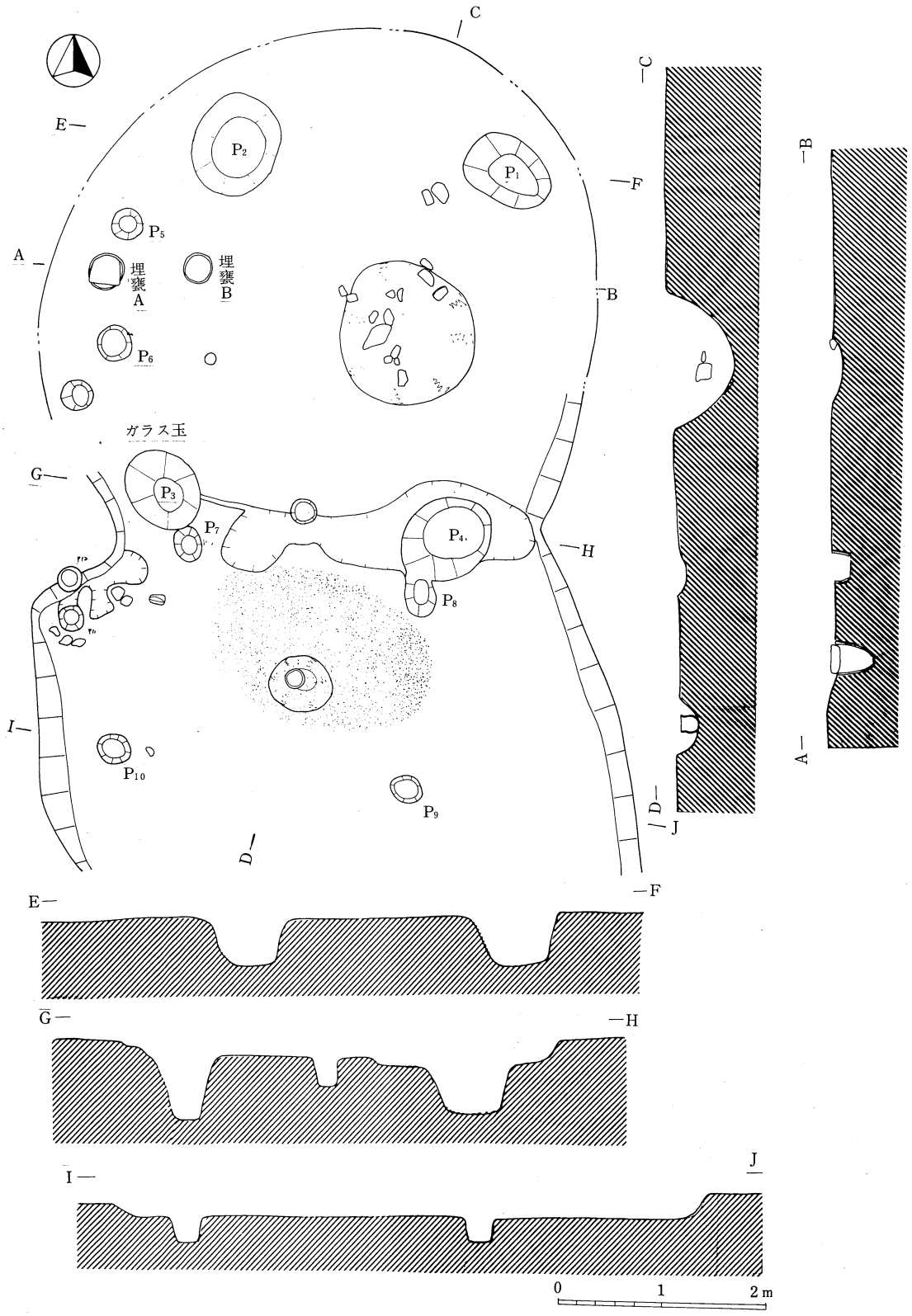
（小林康男）

9）第9号住居址（第20図）

第9号住居址はDEF-8～10にかけて検出され，南側を10号址に掘り込まれ，北側は19号址と重複している。

壁が東壁の一部のみしか残されていないためプランは判然としない。しかし，柱穴，埋甕の位置等を考慮に入れると，東西5m，南北6mの楕円形ないしは隅丸方形を呈していたものと推定される。

壁は残っている東壁もごく一部で，立ち上がりも傾斜が強く，明瞭さを欠いている。床面はロー



第20図　第9号10号住居址

ム上に構築され，全体的に平担であるが余り堅くはない。10号址との重複部分は荒れが目立つ。P_1・P_2の間に人頭大の石が散乱している。

柱穴はP_1～P_4の4本で，ともに非常に大きい。P_1(90×65, −55)，P_2(100×95, −49)，P_3(81×66, −44)，P_4(96×75, −53) で垂直に掘り込まれ，底面は非常に堅い。この他のP_5，P_6は出入口部の支柱穴と思われ，深さはともに15cmで浅い。

炉址は東寄りにあり，130×140cmの円形で，炉底までの深さが54cmとかなり大形のものである。炉底付近に35×15cm位を主として幾つかの石が落ち込んでいることから，当初は石囲炉であったと思われる。炉はすり鉢状に掘り込まれ，炉底に若干焼土の散布が認められた。炉内からは土器の口縁部片が出土し，また炉址上面からは土器の出土が多かった。南側の淵上から第61図－14の凹石が出土した。

埋甕は西側に2個発見された。No.1の埋甕は蓋石のあるもので，蓋石の一方は甕の中に落ち込み，一部が口縁にひっかかった状態であった。住居址使用中は中が空洞であったためであろうか。蓋石の石は床面より上に出ており，埋甕の口縁部も若干床面上に出た形であった。埋甕は第38図－2が正位に埋められ，中には黒色土が充満していた。No.2の埋甕は，No.1の埋甕から60cm内側にあり，蓋石もなく，埋甕の上端は床面と同一レベルに埋め込まれ，床面を精査してようやく発見することができたほどでNo.1の埋甕とは対象的な在り方を示している。埋甕に使用された土器は第38図－3の大形土器の胴部で，正位に埋められ，内にはローム土がつめ込まれていた。このNo.1とNo.2の埋甕は同時に使用されていたとは考えられず，No.2の埋甕内にローム土があったこと，精査しなければ発見できないほどに床面に埋めもどされていたことなどを考慮に入れると，No.2の埋甕を使用後，何らかの理由で廃棄し，内部に床面と同一のローム土をもって埋めもどし，No.1の埋甕を新たに作り，これを住居址廃絶時まで使用したものと推定される。埋甕の廃棄と新らたなる埋甕の使用は岡谷市長塚遺跡でも検出されており興味深い問題を提供しよう。

遺物の出土は炉址上面を中心とし，他の場所からは余り多くなかった。

本址の時期は埋甕および他の出土土器より縄文中期曽利Ⅲ～Ⅳ期と思われる。

（小林康男）

10）第10号住居址（第20図）

第10号住居址はDEF-10～12にかけて発見された。北側は9号址と重複し，南側は畑の境界線のため未調査であったため全体プランを出すことができなかった。一辺5.5m前後の隅丸方形を呈するプランをもった住居址と思われる。

壁は東・西に残り，壁高は東壁25cm，西壁15cmで，東壁は垂直に立ち上り，西壁はダラダラとした傾斜をもって立ち上っている。床面は北側の9号址と重複する部分に凹凸がみられるが，他の部分は全体的に平担で堅くしまっている。炉址を中心として2.30×1.45mの範囲に炭・焼土が散布している。あるいは火災にあった住居かもしれない。

本址に属すると思われるピットは7ヶ所あるが，主柱穴は P_7(−25)，P_8(−44)，P_9(−21.5)，P_{10}(−30) の3本が考えられ，他に未掘部分にも幾ヶ所かの存在が考えられる。

炉址は北側に片寄って設けられ，63×54 cm の楕円形で，深さ 15.5 cm のすり鉢状を呈している。炉址の掘り込みのほぼ中央に土器（第40図−1）が埋め込まれている。土器の口縁上端は床より2 cm ほど下位になっている。

本址で注目されるのは9号址との重複部分でガラス玉が出土したことである。ガラス玉はローム面直上から単独に出土した。10号址の北壁が果してどこであったかが判然としないため，このガラス玉が10号址の床面上から出土したことは断言できないが，炉址および柱穴の位置から推定して，ガラス玉の出土地点は住居址の北壁下周辺であったものと考える。本址からの他の出土遺物は極めて少量であるが，炉体土器から弥生時代後期箱清水期に属するものと思われる。

（小林康男）

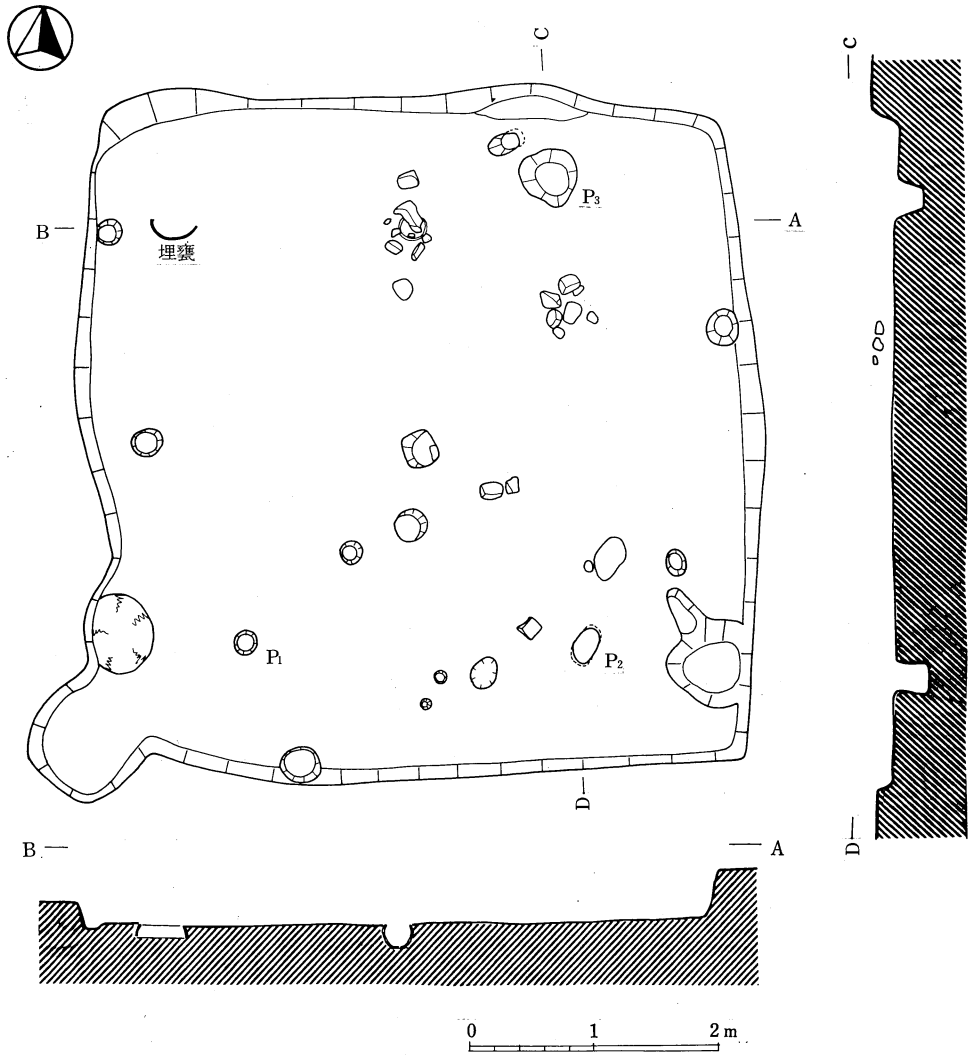
11）第11号住居址（第21図）

第11号住居址は GHI-6〜9 グリットにかけて発見された大きな住居址である。東西 5.45 m，南北 5.55 m のほぼ正方形を呈するプランを持つ。西南隅に 80×90 cm ほどの円形を呈する張り出し部分があるが，あるいは当住居址に属するものとはいえないかもしれない。

四壁とも完存し，ローム面をきれいに掘り込んでいる。壁高は南壁が 24 cm，北壁が 31 cm で，北側に向かってやや高くなっている。床面はローム上に平担に構築され，良く踏み固められ非常に堅い。なお床の東南隅および北壁寄りの部分は黒色土上にローム土 10 cm 前後を貼って作られており複雑さを示している。この床面下の黒色土中からは縄文土器の小片が発見され，弥生時代の住居址床面下に往々にして小竪穴状の遺構が存在するとのことであるが本址の場合は弥生期に属するものであるか否かは判然としなかった。また，北西隅の床面には第40図−5の縄文土器の胴部の一部が埋め込まれており，当住居址は縄文期の住居址を破壊して構築されたことがうかがえる。11号址を作るにあたり縄文期の住居址を掘り下げて床面としたため，縄文期の住居址に埋設された埋甕の最下部の一部が弥生期の住居址の床面に残されたものと推定される。

柱穴は P_1(−17)，P_2(−38)，P_3(−22) があり，あるいは4本柱であったかとも考えられるが北西隅からは検出することができなかった。他に東壁下2，南1，西2のピットがあり，ともに 20 cm 前後の深さで支柱穴的性格をもつものであろう。

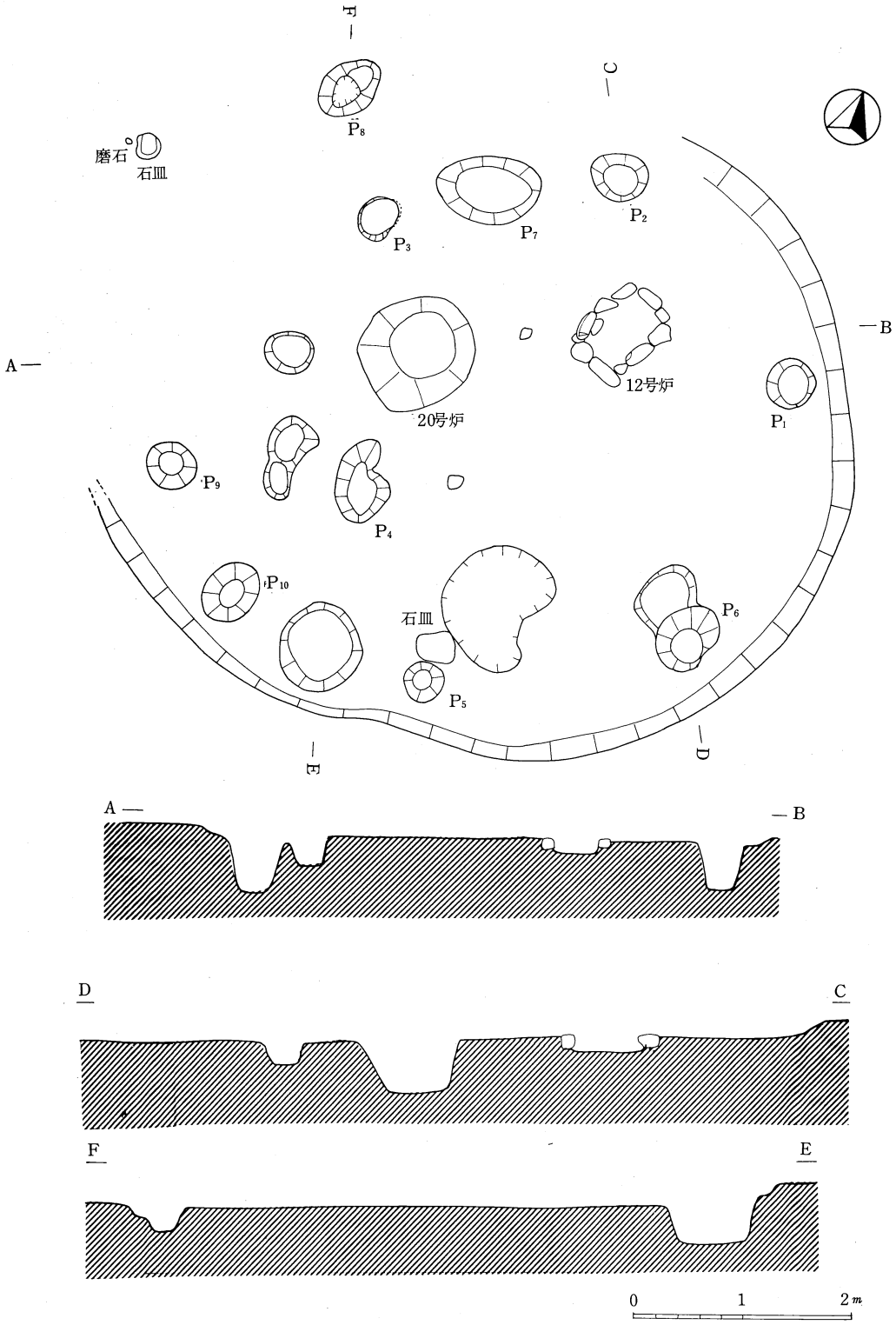
炉は北壁寄りに設けられ，土器の胴部を埋め込んだ埋甕炉である。埋設土器はその口縁上面が床面と同一レベルで，土器の上面に石が散乱していたこともあって床面を精査するまで発見することができなかったほどスレスレに埋め込まれていた。あるいは土器の上面および周辺に散乱していた石は土器を囲むようにして置かれていたのかもしれないが，検出時にはその形は崩れてしまっていて判然としない。また埋設土器は第19図に示すように底部のない第40図−4の甕を埋め，底から6 cm ほど上位に 15 cm ほどの大形土器片を横に敷き，小礫を含む灰白色のやや粘性のある土を入れ



第21図　第11号住居址

て土器片を固定し，その上に第40図－3の口縁部土器を逆位に置いている。この際この3の口 辺部破片を支えとして両側にあてがい，更にその外側は焼土・炭化物層が充満している。第8号址の埋設土器の在り方と共通性が認められる。

出土遺物は覆土および床面上まで弥生土器とともに縄文土器が混在して出土しており，かなり攪乱している。しかし埋設炉の存在から弥生時代後期箱清水期と考えられる。本遺跡において発見された他の弥生時代の住居址は一辺4m前後であることを考えると本址の規模はやや大きく，特異な存在といえよう。　（小林康男）



第 22 図　第 12 号 20 号住居址

12）第12号住居址（第22図）

第12号住居址はDEF-14～16グリットに検出された住居址で，西側部分が第20号住居址と重複している。南北6m，東西5.6mのほぼ円形を呈するプランをもつ。

壁は南・東・北の一部が残され，壁高は南壁で7cm，東壁で8cm，北壁で8cmと低く，南・東・北壁とも明瞭な立ち上がりは示さず，ダラダラと傾斜した掘り込みとなっている。床面はローム上に構築されているが，余り良く残っておらず全体的に軟弱である。炉を中心にして西側に向かってわずかな傾斜をみせている。

炉は東北寄りにあり，30～10cm前後の石10個を用いた90×70cmの長方形を呈する石囲炉である。炉石上面は床面よりおよそ3～5cm高くなっており，南東隅の炉石には石皿片（第62図－7）を使用している。炉底までは14cmほどの深さで平担で，焼土は認められない。柱穴は西側が20号址と重なっているため明確さを欠いているが，P_1(－57)，P_2(－47)，P_3(－20)，P_4(－50)，P_5(－39)，P_6(－64）の6本が本址に属するものと考えられる。名柱穴とも掘り込みは垂直にきれいになされている。

遺物の出土状態は炉址を中心として床面直上より20cm上位まで累々と出土した。なお南壁寄りの床面上に磨面を下にした石皿（第62図－8）が据えられていた。

本址の時期は縄文中期曽利Ⅰ～Ⅱ式期に比定されよう。

（小林康男）

13）第13号住居址（第23図）

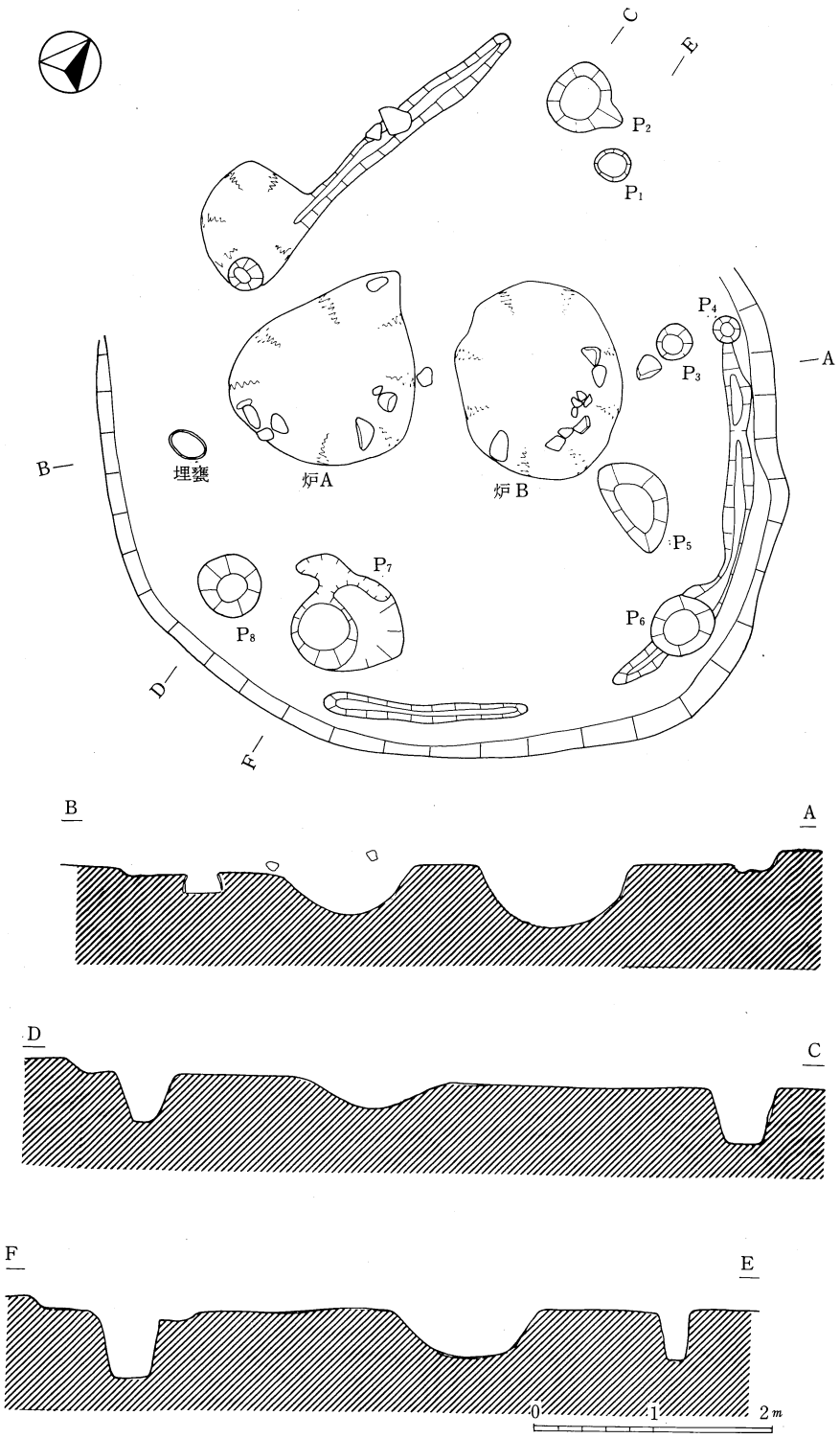
第13号住居址はIJK-14～16グリットにあり，今回の調査地域では最も段丘崖寄りに位置し，崖端より2mほど内奥にある。

本址は一回建直しが行なわれているが，現在のプランは径5.8mの円形を呈している。壁は北・西壁の一部を除き，南・東壁が残存する。本址が崖端近くに構築され，傾斜が急なため西・北の掘り込みが浅かったため消滅してしまったのかもしれない。壁高は東で18cmで掘り込みは垂直である。

床面は，東側ではローム上にあり，平担で良く踏み固められているが，西側に向かうに従い次第に傾斜し，一部には砂利層も現われかなり荒れた状態となっている。周溝は東および南側にあり，壁より30cmほど内側にある。幅は15～22cm，深さ6～15cmである。

炉址はA・B2ヶ所あり，Aは西壁寄りに，Bは東壁寄りにある。Aは不整円形で，砂利層を掘り込み，炉底までは床面から29cmあり，炉壁には長さ30cm前後の石がみられる。おそらく石囲炉であったものと考えられる。Bは径140cmの円形で，やはり砂利層を50cmほどすり鉢状に掘って作られている。炉東壁を中心に長さ25cmから拳大の石があり，A同様石囲炉であったものと思われる。

柱穴はAの炉址に伴うものがP_1(－45)，P_3(－37)，P_5(－37)，P_7(－44）であり，Bに伴うも



第23図　第13号住居址

のがP_2(−46)，P_4(−19)，P_6(−60)，P_8(−58) で，ともに垂直に掘られている。なおP_5の上面には厚さ5cmほどのローム土が貼られていたことから，最初は$P_{1,3,5,7}$(炉址A)が建てられ，後に西側から東側に移動して$P_{2,4,6,8}$(炉址B) に建て直され，当初からあった柱穴上にローム土を貼ったものと推定された。

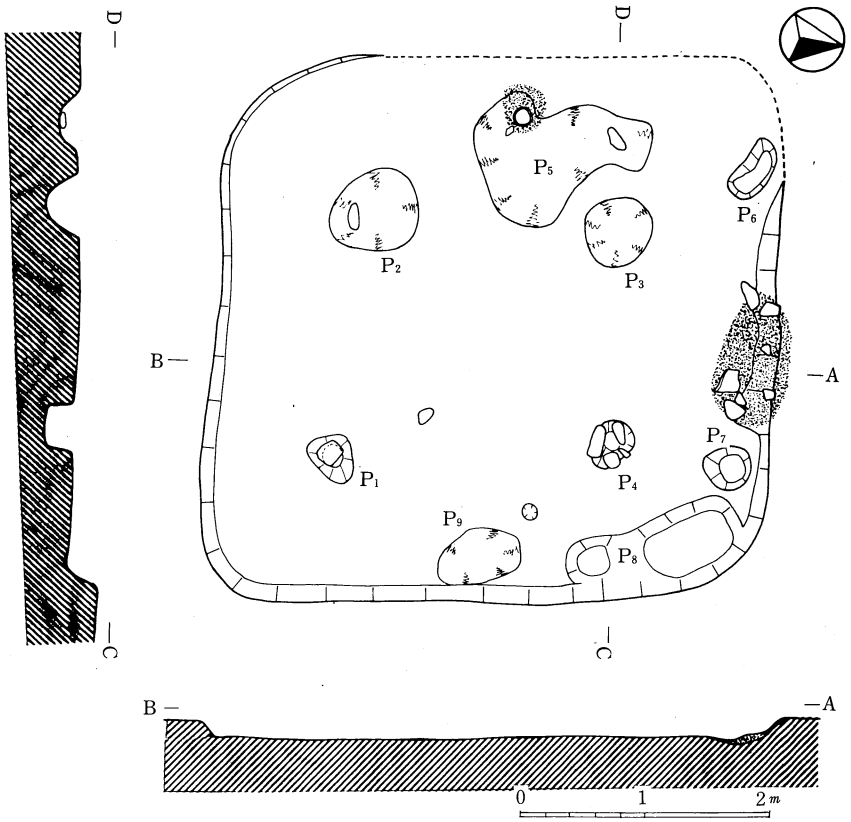
埋甕は西壁寄りにあり，壁から45cm内側に位置している。埋甕は第43図−2を逆位に埋め，その上端は床面より5cmほどとび出ていた。埋甕の内部からは第63図2・3の石鏃2点が埋甕の中位から，またこの石鏃の下からは土器底部が出土した。

本址からの出土遺物は余り多くないが，P_7周辺から黒曜石の剝片がまとまって出土している。本址の時期は縄文中期曽利Ⅲ〜Ⅳ式期と思われる。

(小林康男)

14) 第14号住居址 (第24図)

本址はローム層中にその遺構を残す，土師期の竪穴住居址である。全体的には，隅丸で，南東部より北西部への対角線は約585cm，南西部より北東部の対角線は，535cmを記録するやや崩れた



第24図 第14号住居址

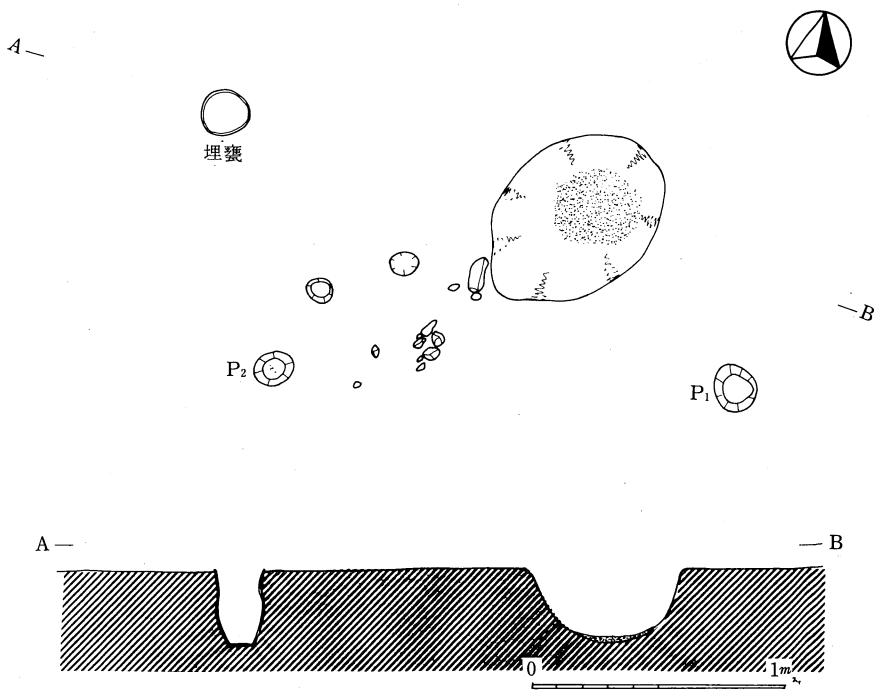
感じの，方形プランを示していた。規模は，東西方向の上面径が435 cm，下面径が420 cm，南北方向の上面径445 cm，下面径430 cmを示し，標準的な大きさであった。床面は，西側の一部と東北隅に，若干の凹凸がみられるものの他，全体的には平担で堅緻な仕上げであり，非常に良好であった。床面のロームは粘質性強く，多少ベタつく状態であった。壁は，地山そのものが北東部より南西部へ傾斜度をもつため，東北壁が最も高く30.5 cmを数え，東壁は北より南へかけて19 cmと低くなり，南壁は東より西へ22～5 cmと更に低くなる。又，北壁も東より西へ21～11 cmと細まる。西壁はその南部において，壁高5 cmとその輪郭をつかむことができたものの，北部へかけての大部分は，地山ロームのとぎれもあり，明確にはつかみ得なかった。又，各壁の掘り込みは，ほぼ垂直に近い状態であった。ピットは址内に9箇所確認された。この中，柱穴は4箇所に検出される。P_1はその上面径35×40 cm，下面径20×25 cm，深さ43.5 cm。P_2は66×73 cm，深さ15 cm。P_3は55×55 cm，深さ26.5 cm。P_4は30×42 cm，深さ24 cmで，P_3と共にすり鉢状であった。P_1の内部には15×15×20 cmの四角状の石が入っており，P_2にも8×22 cmの石が，P_4には，こぶし大から人頭大の石4個が集められていた。以上の他，P_5は，本址の西側中央部に，深さ13～16 cmと浅く，範囲が110×145 cmを記録する，大きな不整形な落ち込みがあり，その1部には，35×40 cmに亘る浅い焼土の分布を認める。又，その焼土内に15×15 cm径の欠損土器が所在した。P_6は北西部の隅に近く，上面径25×55 cm，下面径12×38 cm，深さ30 cmの細長い落込みとなり，P_7は竈の東に接するもので，上面径25×40 cm，下面径20×20 cm，深さ12 cmを記し，P_8は北東部隅の壁に沿って所在し，50×143 cm，深さ6～13 cmの浅い凹地をつくっていた。P_9は東壁中央部に接しており，43×70 cm，深さ10.5 cmであった。竈は北壁中央部にあり，素材は石組使用であったらしく，焼土の分布範囲内に6×10 cmから，11×25 cm程度の石が7個崩れたかたちで散らばっていた。又，焼土中より塊りが散発的に出土したところをみると，竈構築に際して，当初は粘土併用がなされていたものと考えられる。この焼土は，北壁にそって東西に長く60×100 cmの分布を示しており，掘り割の調査結果では，焼土の堆積が10 cm認められた。又，竈構築は，その底部の下地として，掘り込んだローム内に粘土と小礫の混合したものを，約10 cmの厚さに敷き固め，その上面に約2 cm程の粘土を塗りあげて，仕上げをよくしていることが明らかとなる。煙道の施設は認められなかった。

（大久保知己）

15）第15号住居址（第25図）

第15号住居址はGHI-24・25にかけて存在し，その西側を第14号住居址に切られている。壁は検出することができず，したがって全体プランは判然としなかった。

床はローム層上に構築され，平担堅緻である。本址より北側地域に存在する住居址と異なり，かなりベタベタとした粘質性の強いロームの床である。柱穴は2ヶ所あり，P_1(−15)，P_2(−19)で浅く，すり鉢状に掘られている。主柱穴であるか否かは不明。炉址は165×115 cmの楕円形の地床



第25図　第15号住居址

炉で炉底までの深さは48cmを計る。炉の西側に長さ25cmの細長い石があるが，炉石かどうかはっきりしない。炉底には10～15cmの厚さに焼土がみられる。西側に埋甕がある。第46図－1の土器が正位に埋められ，上端は床と同一レベルであった。

出土遺物は余り多くないが，炉内部からはかなりまとまって土器片が出土した。本址の時期は縄文中期曽利Ⅲ～Ⅳ式期である。

（小林康男）

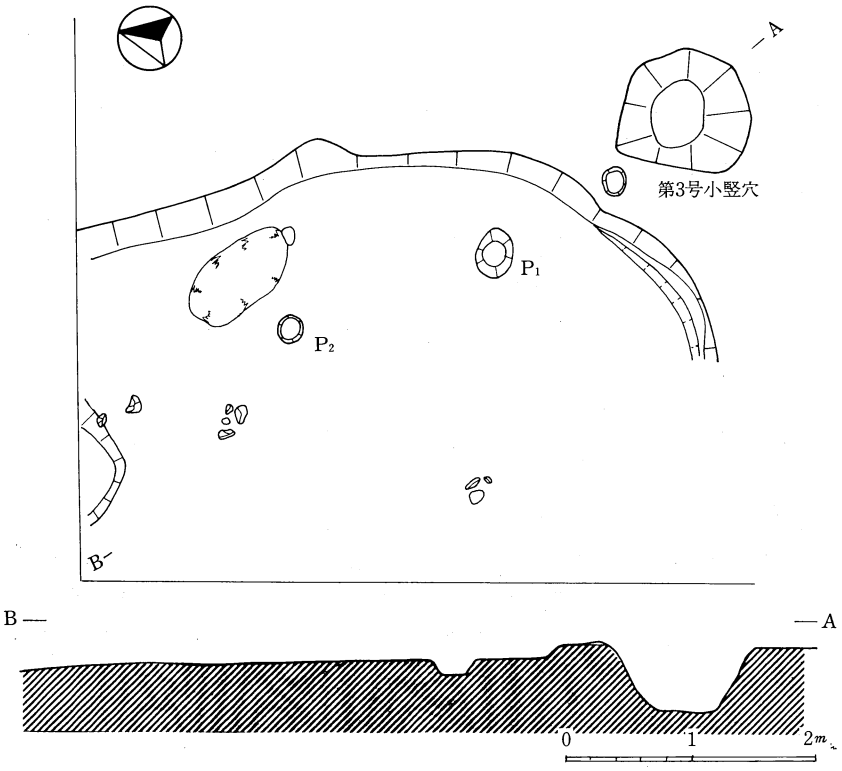
16）第16号住居址（第26図）

第16号住居址はXY-40～42にあり，本遺跡の東端地域に位置する。

南側および西側はリンゴの木があったりして未調査のため東壁が検出されたにすぎない。

壁は東壁のみで壁高は19cm，ロームを掘り込んでいる。床は東壁下周辺に良く残り，西側になるに従いロームはなくなり，床は不鮮明となる。東壁下に深さ7cm，50×95cmの楕円形の浅い掘り込みがある。周溝は東壁下にあり，幅15cm，深さ7cm。

ピットは2ヶ所あり，P_1は－15cm，P_2は－17cmでともに浅く，柱穴になるのかどうか判然としない。炉址と思われるものは未検出で，焼土の散布するような部分も見当らない。



第26図　第16号住居址・第3号小竪穴

遺物は主として覆土中からであるが第67図－4の土偶は西側の床面上から出土した。しかし床面からの出土というだけで特別な施設はなかった。

本址の時期は縄文中期曽利期であろう。

（小林康男）

17）第17号住居址（第13図）

第17号住居址はA-5グリットにあり，北側を4号址に，南側は18号址と重複し，更に東側は未調査地区のため本址は極く一部分が検出されたのみである。

壁高は9cmで，なだらかに掘り込まれている。4号址にあるP1，P4はあるいは本址に属する柱穴かもしれない。南壁下から第49図－1，第50図－6～7がかたまって出土した。本址の時期は縄文中期曽利Ⅰ式期と考えられる。

（小林康男）

18）第18号住居址（第13図）

第18号住居址はA-6グリットにあり，北側を17号址に切られ，また東側は未調査地区のため本址に属するものは南壁の一部と柱穴が検出されたのみである。

南壁は壁高が22cmで，ほぼ垂直に掘り込まれている。床面はローム上にあり平担である。柱穴はP_6～P_8があるが，P_6(－35）が主柱穴の一つであると推定される。出土遺物は第49図－2の土器底部が壁から50cm内側に逆さになり1点出土したのみである。したがって本址の時期は判然としないが底部の形態から縄文中期の後半に属するものと推定される。

（小林康男）

19）第19号住居址（第14図）

第19号住居址はDEF-6～8グリットにかけて検出され，南側の9号址を切り，北側は5号址と重複している。

壁は東と南に残されているが，北・西には認められなかった。壁高は東壁で18cmで，西に向うに従い漸減している。他の住居址同様地形の傾斜と関係しているのであろう。東壁の一部がやや荒れているが，ほぼ垂直に掘り込んでいる。

床はローム上に作られており，5号址とのレベル差は認められなかった。壁周辺がやや高まり，炉周囲が5cmほど低くなっている。全体的に良く踏み固められ，堅くしまっている。西側の床面上には50×20cmの大きな石が据えられ，P_8の南側には拳大の石8個が散乱している。

炉址は東側に片寄って作られている。120×110cmの円形を呈し，掘り込み上部に拳大の石が数個置かれている。元来石囲炉であったものの石を抜き取られたものとも思われる。炉の掘り込みはすり鉢状になっており，炉底までの深さは24cmを計る。炉底には径60cmに焼土が認められる。

本址に属すると思われる柱穴はP_6～P_{12}の7本があるが，主柱穴はP_6(－20)，P_7(－51)，P_9(－47)，P_{10}(－61)，P_{12}(－65）と思われる。しかしP_{12}とP_6との間隔が開きすぎている感がありあるいはこの間にもう一つピットがあり6本柱であったとも思われるが調査時には発見することができなかった。

本址で注目されたものに黒曜石の出土がある。第15図のように南東壁下に23×21cmの大きさで，深さが9cmほどのピットを掘り込み，その中に7cm角から5cm角の大小あわせて20個の黒曜石の原石を貯蔵した貯蔵穴が発見された。黒曜石は図版9に示すように殆んど加工を加えない原石を2～3段に積み入れてあった。西側床面上に検出された作業台的な大きな石の存在と考えあわせると，石器の加工場を推定させるが，黒曜石のフレーク，チップ等は出土しなかった。こうした原石を多数貯蔵した貯蔵例は中信地区はもとより他地区でも余り調査例が報じられておらず興味深い発見といえよう。

本址の時期は縄文中期曽利II式期であろう。

（小林康男）

20）第20号住居址（第22図）

第20号住居址はEFG-14～16にかけて存在し，その大部分は12号址と重複している。そのためプランの詳細は不明確であるが，壁，炉址，柱穴等から考えると径6m前後の円形を呈していたものと推定される。

壁は南壁の一部が残存するのみで他は検出することができなかった。ほぼ垂直に掘り込み，壁高は10cmである。床面はローム上に構築され，起伏が激しく余り堅緻ではない。また柱穴にもならないような小さな浅いピットが幾つか掘り込まれ床を一層荒れさせている。

炉は東北寄りに設置されたものと思われる。当初石囲炉であったと考えられるが，現在ではそれらの石は除去されており105×95cm，深さ44cmの大きな穴になっている。炉壁はほぼ垂直で，炉底は平担になっており，その下面はローム層を掘り抜き砂利層に達している。炉内からは炭の細片が若干出土したのみで焼土は認められなかった。

柱穴はP_7(－32)，P_8(－28)，P_9(－17)，P_{10}(－55)までが考えられる。他に何本か存在するであろうが，調査では未検出に終わった。

北西隅に第64図－18の石皿と17の磨石が並んで検出された。石皿は磨面を上にし，磨石はその西側に10cmほど離れて置かれていた。この部分の壁がなかったため，この石皿と磨石が果して住居内に置かれていたか否かは明確さを欠くが，残存壁から考えて，おそらくこれは西壁直下に置かれていたものと考えてよいであろう。

12号址との前後関係であるが20号址は炉石が抜き取られていること，および土器の出土状態をみると，主として12号址の住居址範囲内から大量に投げ込まれたようにして出土し，20号址からはこのような出土状態が認められなかった。したがって，20号址の廃絶後，12号址を1.5mほど東に作り，12号址廃絶後その凹地に大量の土器が投げ込まれたため，20号址覆土からは余り土器が出土しなかったけれど，12号址からは大量に出土したものと考えられる。以上から20号→12号となるであろう。20号址の時期であるが縄文中期曽利Ⅰ～Ⅱ式比定の時期である。

（小林康男）

第2節　小　竪　穴（第26図，第27図）

小竪穴は3ヶ所発見された。

1）第1号小竪穴（第27図－1）

第1号小竪穴はF-10グリットから発見され，径1.30mのほぼ円形で深さは35cmでローム層を垂直に掘り込んでいる。底面は堅い。西側の壁上には径10～7cm，深さ7cm前後の小さなピットが7ヶ所掘られている。

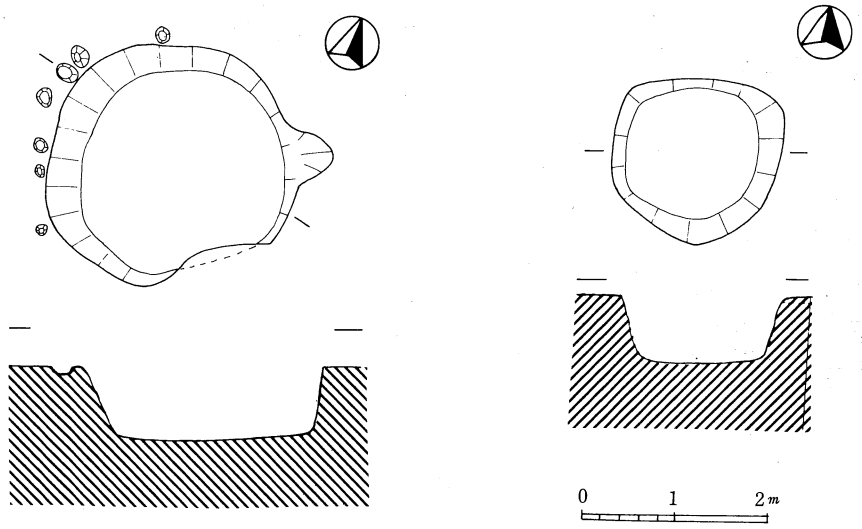
2）第2号小竪穴（第27図－2）

第2号小竪穴はP-42グリットにあり，径90cmの不整円形で深さは40cmである。壁はほぼ垂直に掘られ，底面は平担である。

3）第3号小竪穴

第3号小竪穴はZ-42グリットにあり，第16号住居址の南東35cmにある。1.0mの不整円形で，深さは47cmである。上面には第53図の土器が横たえられていた。

（小林康男）



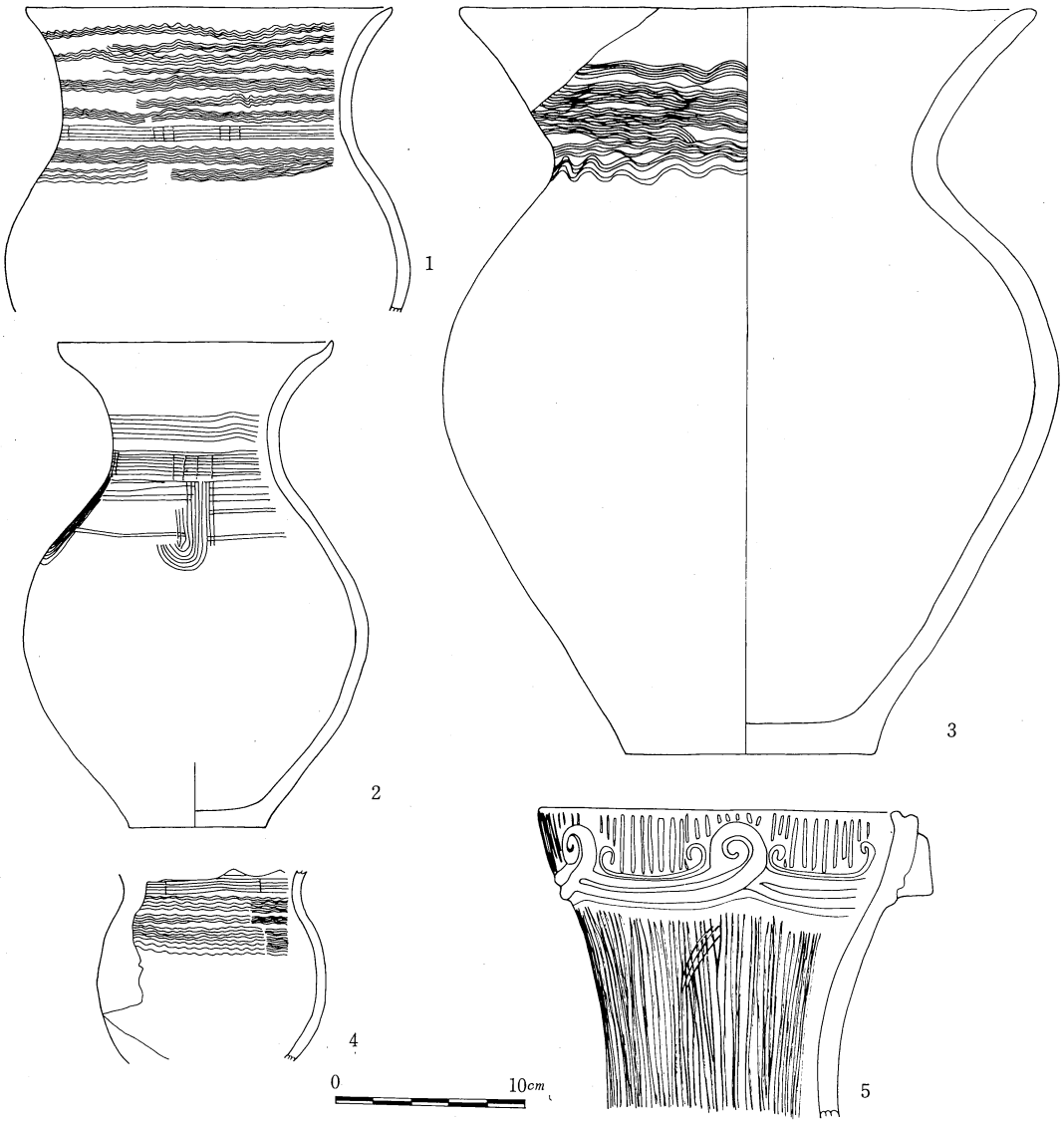
第27図　第1号・2号小竪穴

第Ⅳ章　遺　　物

第1節　土　　器

1）第1号住居址（第28図）

第1号住居址からは，1･3･4の甕形土器と2の壺形土器の4個体が出土した。



第28図　第1号3号住居址出土土器

1は7図に示すように焼土範囲内に逆位に埋設されていたもので，おそらく埋甕炉として使用されたものであろう。そのため下辺の内外面とも摩耗が著しい。丸味をおびた胴部から頸部にかけてゆるやかにくびれ，それより口縁にかけてゆるく開く。口径は19.5cm，胴部は21.5cmで胴部に最大径がある。文様は口縁部から頸部にかけて施されている。内外面ともヨコミガキにより整形され頸部に簾状文を施し，口縁部には全面に櫛描波状文を，また胴部上半には2帯の櫛描波状文を施文している。胎土には小砂利を含み，赤褐色を呈し，焼きは非常に良い。

2は，8図のように床面に胴部を半ば埋め込んだような状態で出土したもので，3分の1ほどを欠いている。器高25.5，口径14.5cmで，最大径は胴部にあり18.2cmを計る。器形は球形を呈する胴部に強くくびれた頸部が続き，それより口縁にかけては外方に大きく開く。口縁端部はやや内湾気味に立ち上がり，内面は幾分凹状となっている。施文は頸部および胴部上半に集中してみられる。頸部の簾状文をはさんで，上位には櫛状工具による横線文が一巡している。下位には横線文を巡らし，それに直交するように櫛描文を垂下させ，その端を2分の1回転させた同心円文としている。この文様は4単位施文されたものと思われる。内外面とも黒色を呈し，薄手で丁寧に整形され，光沢を発する呈よく焼きしまっている。

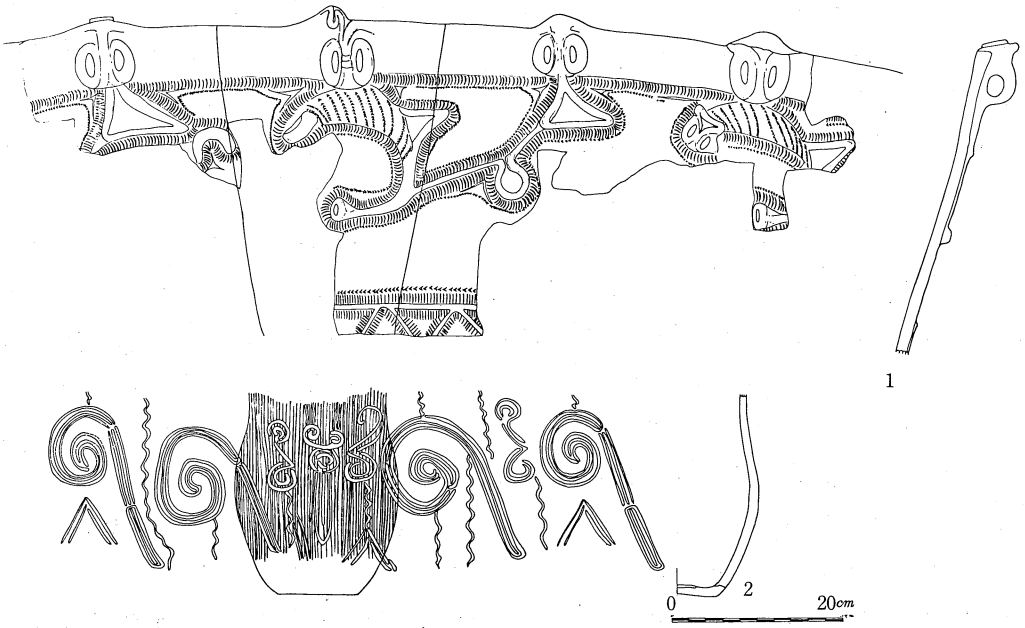
3は9図のように中から多量の炭化種子が出土した甕で，器高39.5，口径30cmで，最大径は胴部にあり32.2cmを計る大きなものである。炭化種子の出土より明らかに貯蔵用の大甕であろう。器形は口縁部から頸部にかけて強くくびれ，球形の胴部に続き，やや外反気味に底部に至る。文様は口縁部にのみみられ，粗い櫛描波状文が施されている。器壁は部厚く，胎土には砂粒を含む。黄褐色を呈する部分もあるが大半は内外面とも黒色を呈している。

4は口縁部・底部を欠き，全体の形態は判然としないが，1と同様の形態を呈するものであろう。胴部径12cm，現在高10cmの小形甕である。文様は頸部に簾状文をもち，その下位に櫛描波状文が施されている。波状文には粗密の2種類が認められる。円外面とも黒褐色で，胎土・焼成とも極めて良い。

2）第2号住居址（第29・30図）

第2号住居址は覆土が非常に浅く，土器の出土量は余り多くない。

29図－1は住居址の床面中央の上位5～10cmに折り重なるように出土したもので，2号址では形態の判別する唯一の資料である。胴部下半を欠失しているが，口径26.5，現在高36.5cmの大形深鉢形土器である。器形は単純に口縁に向かって開き，口縁に4ヶの把手を付している。文様は胴部上半と下半とに分けられる。上半部の文様は，口縁部に付された4つのミミズク把手の下位にそれぞれ異なった文様が展開し，4単位の文様構成をとっている。4つのミミズク把手を結ぶようにキャタピラ文が横走し，隆帯による三角形区画文と連続刺突文を斜めに幾条にも施した半月形の隆帯部分とが交互に把手下に連なっている。この半月形の隆帯の末端はラッパ状の小突起に連結し，他端はミミズク把手の変形した突起と単純な小突起とに接続している。これらの複雑な文様の周囲はキ



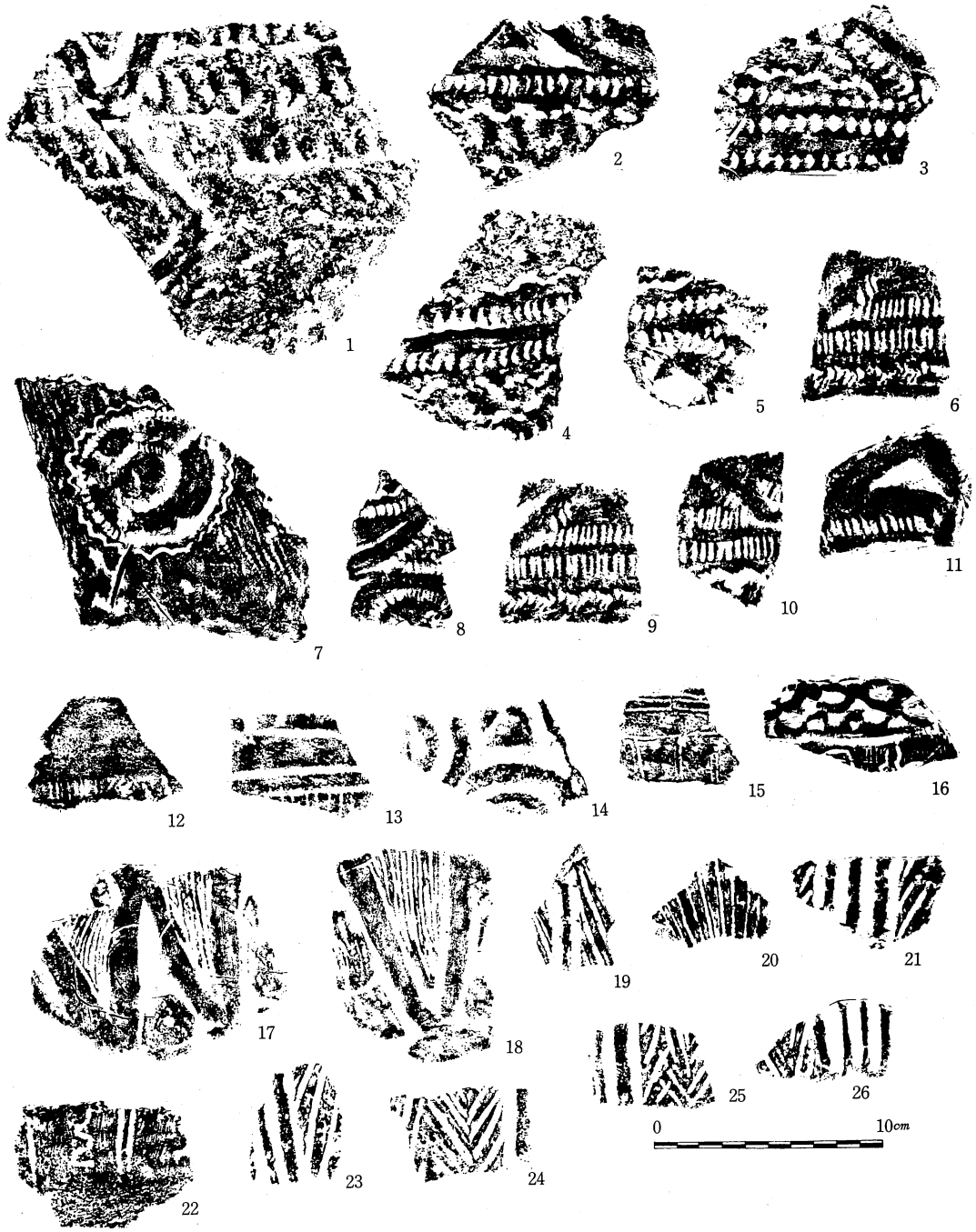
第29図　第2号・3号住居址出土土器

ャタピラ文が巡り，更にその外側を三角形の連続刺突文が取り囲み，文様構成をいっそう煩雑にしている。胴部の無文帯をはさんで，胴下部には隆帯による三角形区画文が横に連なり，その周囲はやはりキャタピラ文と連続刺突文が施されている。黄褐色を呈し，砂粒を多量に含み，焼成は余り良くない。

30図1～12の破片も1と同じ場所から出土した同系統の土器である。1は整形のための指痕が顕著に残され，断面四角の隆帯がY字状に付されている。2～5はやや大きなキャタピラ文が横走し，1部に沈線による波状文がみられる。6・9～12はキャタピラ文により三角形区画を作り出すもので，2～5よりキャタピラ文は細身である。三角形の連続刺突文も1部認められる。7・8は円形文を中心とするもので，キャタピラ文を円形に2重に施文し，その外側をジグザグ沈線によって取り囲んでいる。7は地文に縄文を施している。これらの土器片はともに砂粒を多量に含み焼きは非常に悪い。以上が2号址を代表する藤内I式に比定できる土器であるが，他に少量ながら時期の下がる土器も出土している。17・18は隆帯による三角形区画の内に平行沈線と円形文とを交互に施文している。19・21・23～26は1～2条の隆線と綾杉文とが組み合さったもの。16・22は沈線による懸垂文と条線とが施文されている。

3）第3号住居址（第28・29・31図）

28図－5は床面直上から出土したもので，胴下半を欠いている。胴部から頸部にかけて単純に外



第30図　第2号住居址出土土器

第 31 図　第 3 号住居址出土土器

方に開き，やや内湾気味の口縁に連なる。口径20cmの深鉢形。口縁部の文様は2本の隆帯による渦巻文により6分割され，区画内には沈線によるくずれた渦巻文と縦の沈線によって充塡されている。頸部以下は条線文が施されている。暗褐色で焼成良好。

29図－2は埋甕として埋設されていた土器である。口縁部を失なっているが，胴部にゆるやかなふくらみを有し，頸部にかけて収縮する形態をもつ。文様は沈線による渦巻文と懸垂文とによって構成されている。渦巻文とそれよりU字状に施文した沈線文を中心として両側に正逆に施文した渦巻文とジグザグの懸垂文を配し，更に3本1組の沈線による大きな渦巻文を置いている。類似した文様構成をとりながら，沈線文の1部を切ったり，懸垂文を組み入れたりして変化をつけている。これらの文様間は条線によって埋めている。底部には径3cmほどの穴が中心より片寄ってあけられている。黒褐色で焼成は良い。

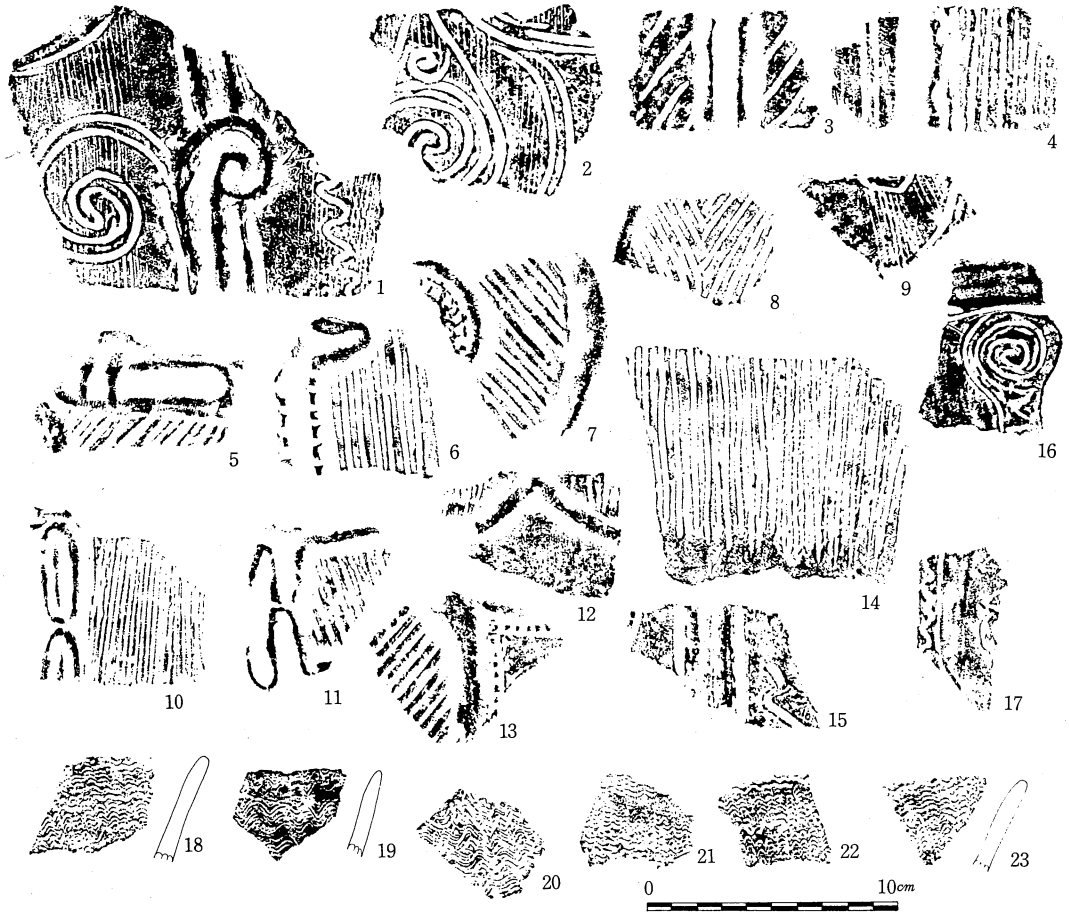
器形の分かる以上の土器の他には小破片の土器が少量出土したにすぎない。31図－1は隆帯による円形区画の両側をキャタピラ文を施し，その外側にジグザグ文を施文する。2は三角形区画文内に三叉文，交互刺突による蛇行状文を充塡し，3は刻目のある隆帯による楕円区画文内に沈線文と蛇行状文を施している。5･7は粘土粃を指圧することによって蛇行した文様を頸部にもつもので，7はそれより下に縄文を有する。8は隆帯による渦巻文を，9･10･13は平行沈線文と隆帯文を組み合せたものである。11は隆帯による渦巻文を施し，その間に綾杉状の沈線を埋めており，12･17～23も同類である。25～27は口縁部破片で，同一個体であろう。口縁部文様は孤状にめぐる隆帯により区画文が作り出され，その内は縦方向の沈線文で埋めている。無文帯をはさんで頸部には沈線によるジグザグ文が横走している。これらの土器は1～4を除き曽利II～III式に比定されるものであろう。

4）第4号住居址（第32・33図）

第4号址は未完掘のためもあって土器の出土は少なく，しかも弥生期の住居址であるにもかかわらず弥生土器が極めて少量であった。

1は4号址の出土土器で器形の分かる唯一の土器で,炉址に埋設されていたものである。口径21.2,現在高18.5cmで最大径は口縁部にある。器形は大きく開いた口縁から頸部にかけてゆるく収約し更に球形の胴部に連ながっている。文様は口縁部および胴部上半に施文され，頸部の簾状文を中心に，口縁部に5帯，胴部に3帯の櫛描波状文が施されている。施文は文様の重複状態から，口頸部の簾状文を最初に施文し，下から上に，つまり頸部から口縁部に向かい，更に胴部では上から下に，底部方向に施文していることが分かる。このような施文順位は中央高地型櫛描文の性格を知るうえで重要な要素として生仁遺跡の調査報告書において既に指摘されている所である。赤褐色を呈し，胎土に土砂利を含むが，焼成は極めて良い。

32図－18～23も弥生土器片であるが，ともに波状文をもつ。4号址から出土した弥生土器で資料として取り上げることができるものは以上である。他には覆土から縄文土器片が若干出土している。



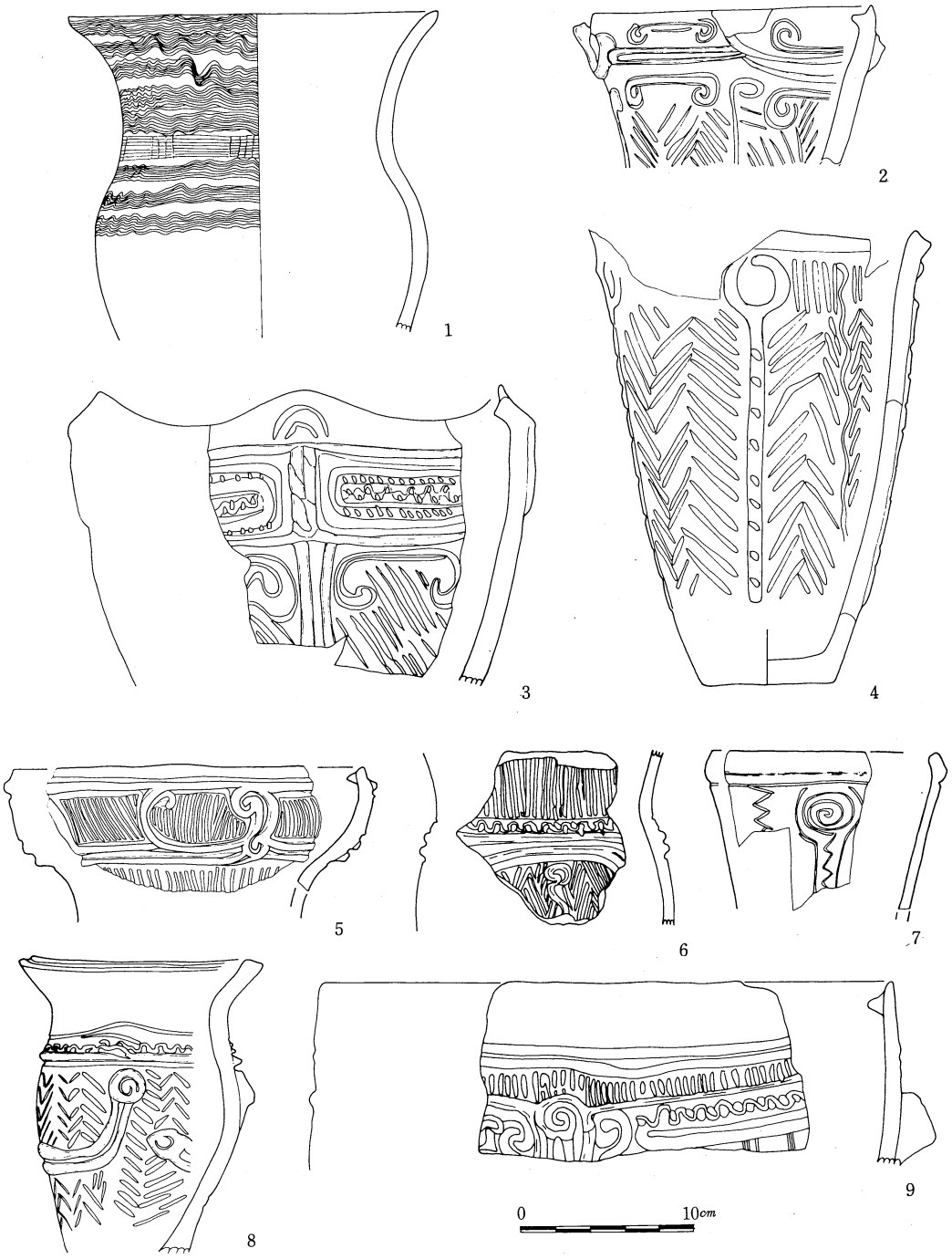
第32図　第4号住居址出土土器

1は隆帯によるH字状懸垂文と沈線の渦巻文・懸垂文を配している。2・9は沈線による渦巻文を施し，地文に条線文をもつ。3・4・8は隆帯と縦位あるいは斜行する沈線を，5・6・10・11は楕円形を呈する隆帯と沈線文とが施されたものである。12は櫛形文の1部であろう。16は沈線による渦巻文があり，17がこの下に結がる文様であろう。

5）第5号住居址（第33図）

第5号住居址は炉址東側地区からかなり多くの土器が出土したのであるが，資料として使用できるものは意外と少なく，図2,3位のものであった。

2は胴下半部を欠いた口頸部の破片で，比較的小形の深鉢形土器である。頸部には横走する2本の隆帯と欠失してしまって判然としないが小突起が付されている。口縁部にはの字状の沈線文を施



第33図　第4・5・6号住居址出土土器

文し，胴部には口縁部と対になるように同じ文様が配され，この文様間に蕨手文のくずれた文様があり，空白部は綾杉文によって埋められている。暗褐色で焼きは良い。口径16cm。

3は口縁部破片である。4単位の波状口縁をもつ深鉢形で，口縁部はやや内湾気味となる。波状口縁の頂部分に沈線による半円形が二重に印され，その下に隆帯による矩形の横帯文が巡る。横帯文は交互刺突による蛇行状文が一条横走し，その両側に刺突文を施している。この下にはの字状の沈線文と右傾の沈線文で埋めている。推定口径27cm。

4は埋甕として埋設されていた土器である。形態はわずかに外方に開いた単純な深鉢形土器である。口唇部はやや肥厚している。文様は隆帯による環状文とそれより垂下する一条の懸垂文により4区分されている。頸部にあたる部分は縦方向の沈線が，それより下位は粗い綾杉文が施されている。一面にのみ綾杉文間に蛇行する懸垂文が配されている。器高25.5，口径19cm。茶褐色で焼きは余り良くない。

5号址の出土土器はいずれも曽利Ⅲ式に比定できよう。

6）第6号住居址（第33・34図）

第6号住居址からは床面上より5～20cmほど浮いて多量に出土した。

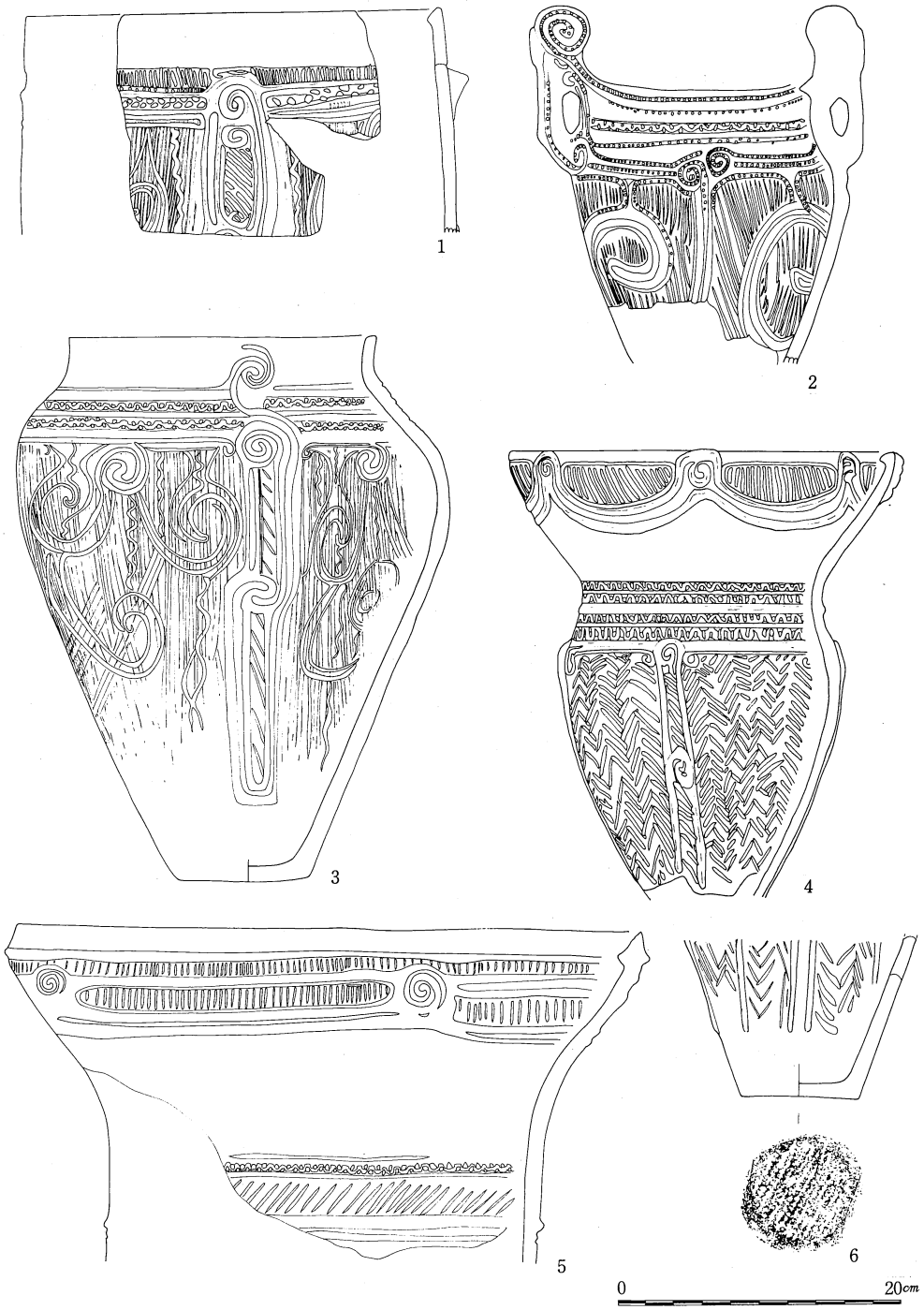
33図－5は頸部がくびれ，口縁が内湾気味に立ち上がり，推定口径20cmの深鉢形土器である。文様は口辺部に主要な文様が集中し，口辺と頸部の境に2条の隆帯をめぐらし，それより上位にややくずれた渦巻文を配して楕円と矩形の区画文を作り出している。区画文内には縦位の沈線を充塡させ，胴部には縦の沈線を埋めている。黒褐色を呈し，雲母粒子が多量に含まれ，焼成は良い。

6は深鉢形土器の頸部破片である。最もくびれた部分に交互刺突による蛇行状文を横走させ，その上位に縦方向の沈線文を施し，下位には2条の隆線がみられる。胴部には蛇行した懸垂文と綾杉文がみられる。

7は推定口径12.5cmの小形深鉢形土器で，口唇部がやや内湾している。沈線のみによる文様構成で，頸部に1条の沈線文が一巡し，それに連らなって蛇行する懸垂文と渦巻文が施されている。渦巻文にはそれぞれ接続する蛇行した懸垂文も施文されている。なおこの土器は内面の調整痕が明瞭に観察でき，幅約1mmの溝で7～8mmが一単位となった工具で上半分は横位に，下半分は縦位に調整されている。色調は外面は黒褐色，内面は黄褐色で，胎土に石英粒が若干みられる。

8は小形深鉢形土器で，頸部でゆるくしまり，胴部下半から底部にかけて急激に収約する。文様は口唇部に二条の隆帯を巡らし，口辺部の無文帯をはさんで頸部に一条の沈線と交互刺突による蛇行状文ならびに隆帯を横走させている。胴部文様は隆帯による渦巻文が上位と中央部にあり，それを二条の隆帯によって連結させている。空間部は綾杉文によって埋めている。器高16.5，口径14cm。

9は口径30cmの大形深鉢形土器の口辺部破片で，口唇部内面には突起がみられる。文様は口縁部に無文帯を置き，その下位に二条の隆帯が横走する。頸部には隆帯による渦巻文と交互刺突の蛇



第34図　第6号住居址出土土器

行状文がみられ，口縁部との間は縦位の平行沈線文で充たされている。胎土には鉱物を含み，黒みを帯びている。

34図－1は大形深鉢形土器の口縁部破片で，推定口径27cm。文様は隆帯による渦巻文とそれに接して縦の楕円区画文により左右に文様が区分され，更に横位の隆線と交互刺突文とにより口辺部文様帯と胴部文様帯とに分けられている。口辺部は口縁の無文帯に続いて縦方向の沈線文が施され胴部は条線の地文に沈線による蛇行懸垂文と渦巻文とがみられる。渦巻文の末端は剣先状の突起を形作っている。砂粒を含む。

2は口縁が内湾する単純な鉢形土器で，底部を欠いている。一対の装飾把手をもつ。口縁部には中に刺突文を施した二条の沈線文をめぐらし，把手上端の渦巻文へと結ながっている。頸部には交互刺突による蛇行状文と刺突を有する沈線文および渦巻文が施文されている。胴部には隆帯による4単位の渦巻文があり，その中間には頸部の渦巻文から派生した懸垂文が垂下し，空間は沈線文により埋められている。胎土・焼成とも良い。口径18cm。

3は埋甕として埋設されていた土器で，口辺部のしまった甕形土器である。文様は隆帯によるややくずれたH字状の懸垂文により4単位に分割されている。口縁部には渦巻文を置き，頸部には二条の交互刺突による蛇行状文を巡らしている。胴部文様は沈線による渦巻文と懸垂文を複雑に組み合せ，地文には粗く条線文を施している。色調で暗褐色で，砂粒を多く含む。焼成は余りよくない。

4は頸部できつくくびれ，口縁部が大きく開いた深鉢土器で，口径27cm。文様は口縁部と胴部に分かれる。口縁部文様帯は2本の孤状に連結された隆帯によって構成された渦巻文を6単位配し，残りの部分は縦位の沈線で充塡している。胴部上半には4本の交互刺突による蛇行状文が2本1組になって横走し，それ以下は隆帯によるH状の懸垂文により4区分し，その間を綾杉文を施している。胎土・焼成とも良好。

5は口径44.5cm，現在高23.5cmの大形深鉢形土器で，胴上半部から外方に大きく開き，口縁部にいたりやや内湾気味となる。文様は口縁部と胴部とに分けられる。口縁部は上下端を隆帯によって限り，その中に横走する平行沈線文と隆帯による渦巻文とを配し，その間を平行沈線文で充塡した楕円区画文を施文している。胴部文様は交互刺突による蛇行状文を一巡させ，その下には隆帯と沈線とにはさまれた斜行する沈線文がみられる。

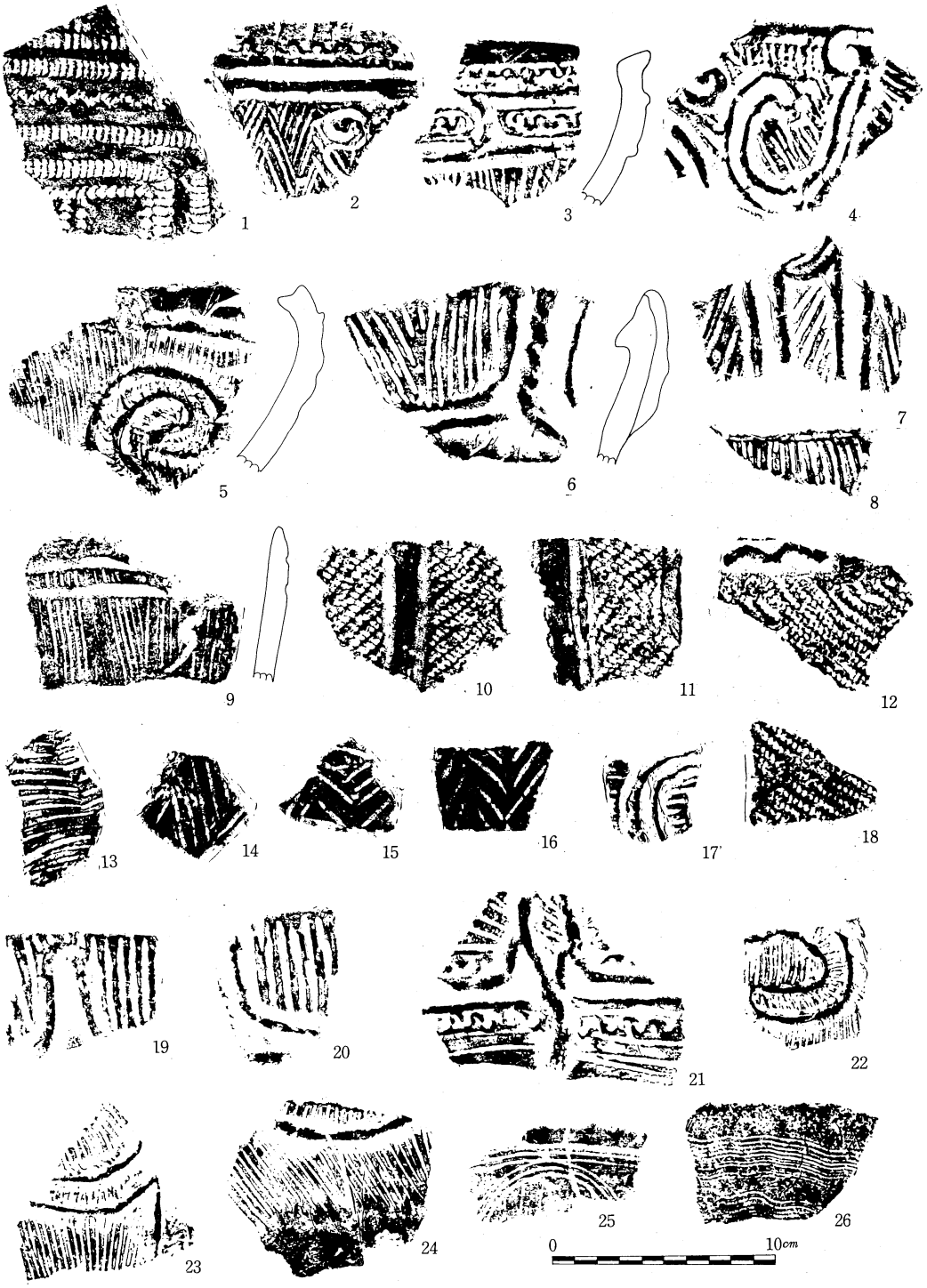
6は底部破片で，隆帯の懸垂文間に綾杉文を施し，底面には網代痕が印されている。

これら6号址出土の土器は曽利II式に比定されよう。

7）第7号住居址（第35図）

第7号住居址からは余り良好な土器が出土せず，器形を窺い知ることができるものは発見されなかった。

35図－1はキャタピラ文と三角形の刺突文を連続させた文様をもつものである。2・3・21は交互刺突による蛇行状文を有し，下位に綾杉文をもっている。4・5・17・22～24は2本の隆帯による渦



第 35 図　第 7 号住居址出土土器

巻文とその間を沈線文によって埋めたものであり，5・22～24は隆帯間にも細かな沈線を施している。6・19・20は口辺部破片で，隆帯により孤状に区画し，その中に沈線文を充塡させている。9は条線文の地文に幅広の2本の沈線が横走し，蛇行する懸垂文が配される。10・11は幅広の沈線文により区画し，その中に縄文で埋めた磨消縄文が配される。12は蛇行する隆帯が横走し，縄文を地文とする。25は竹管工具により円状の沈線を施文する。26は弥生土器でくずれた櫛描波状文が施されている。7号址の出土土器は曽利Ⅲ－Ⅳ式に比定できようが判然としない面が多い。

8）第8号住居址（第36・37図）

36図－2は18図に示したように炉に埋設されていた土器で底部付近は内部にめり込んでいた。またこの土器の外側に貼りつけられていた土器は37図16・17などがあり，土器内に敷かれていた土器は7である。

2はきつくくびれた頸部からゆるやかなふくらみを持った胴部につづき，単純に底部へと連らなっている。口径20.5，器高30.5cmの甕形土器である。文様は口縁から胴部上半にかけてみられる。口唇部には刻目が施され，同様の文様は文様帯の下端にも1条施されている。頸部には簾状文が巡り，口縁ならびに胴部上半には不規則で粗く，くずれた櫛描波状文が配されている。炉体土器として使用されたためか非常に脆く，胎土には砂粒を若干含んでいる。また文様帯下の胴部には全周囲にわたり6cmの幅にススの付着が顕著にみられる。

3は甕形土器の口辺部で，口唇部がやや肥厚している。文様は口唇部に櫛描平行線文を，また頸部には2帯の簾状文を施文している。口縁部，胴部は櫛描波状文を施している。

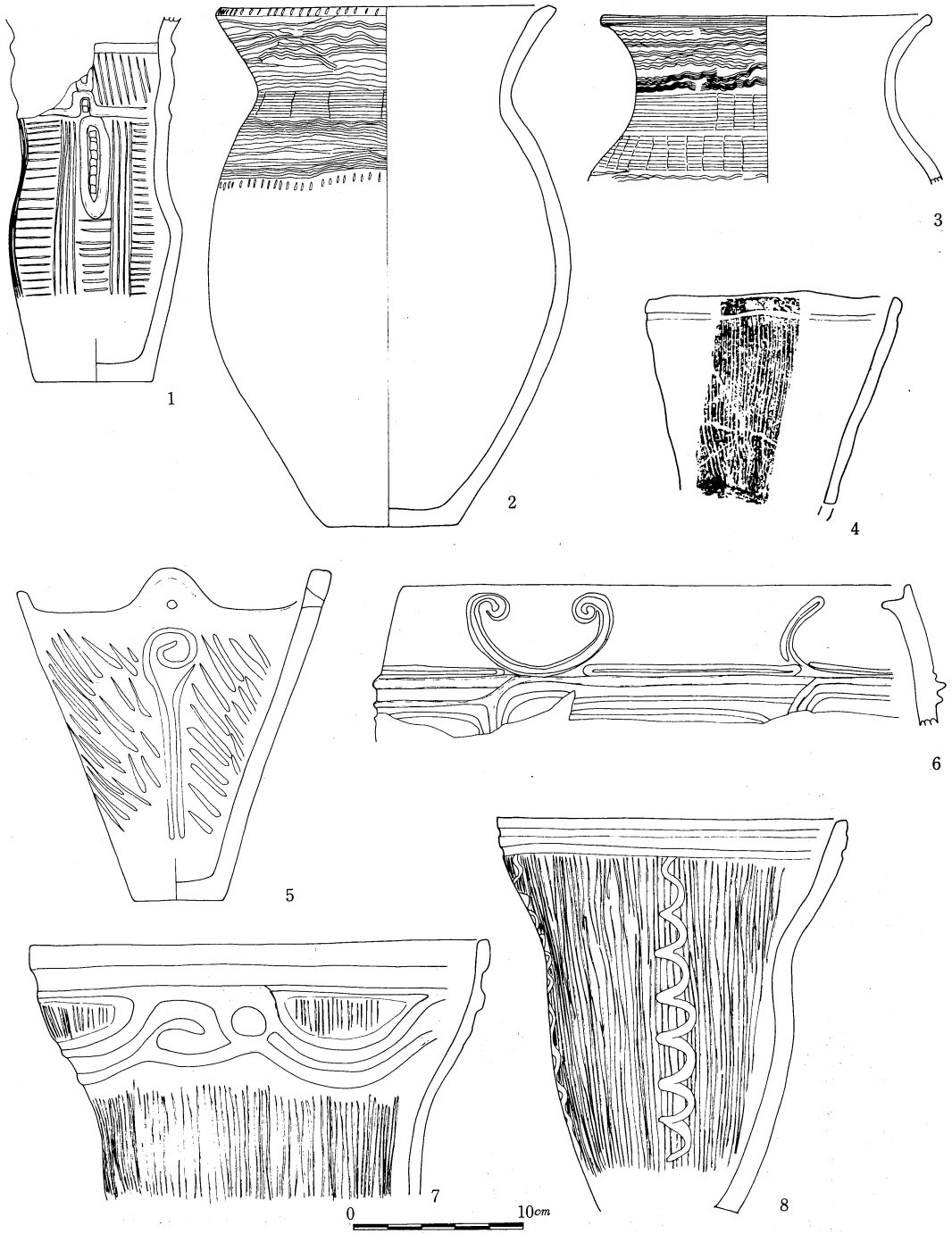
口縁部の37図6・8・18は大きく外反し，口唇部で内屈気味に立ち上るものと，10・17のように余り強く外反せず，ゆるやかに開くものとがある。前者には内屈する表面に一帯の櫛描波状文が施され，下部には無文部をはさんで波状文が施文されている。16・17は前述の口縁部土器片よりも大柄な波状文がみられる。胴部破片では簾状文をはさんで上下に櫛描波状文を施すものが大半で，1・4・21などは4号址の埋設土器の施文法と同様に簾状文を最初に，その後口縁方向に，また底部方向に施文したことが分かる好資料である。19は波状文に櫛描平行線文を直交するように垂下させている。

以上の弥生土器の他に覆土からは縄文土器が若干出土している。36図－1は小さな深鉢形土器で頸部には隆帯による区画文を配し，その内を縦の平行沈線により埋め，胴部は縦位に隆帯による楕円形文を施し，それを中心に縦位と横位の沈線文を交互に配列している。

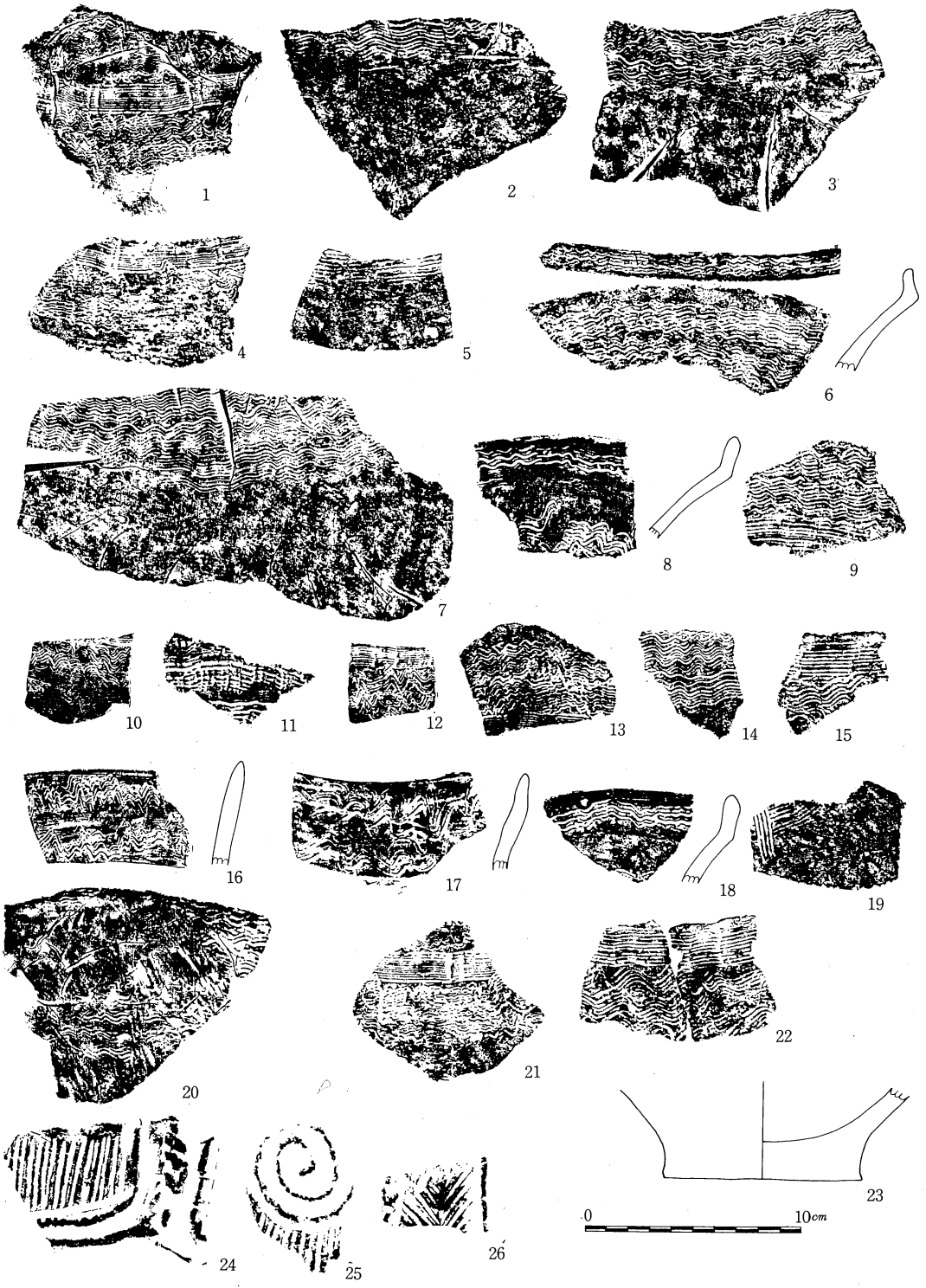
9）第9号住居址（第36・38・39図）

第9号址からは埋甕，炉内出土土器の他は全て覆土中から出土したものである。

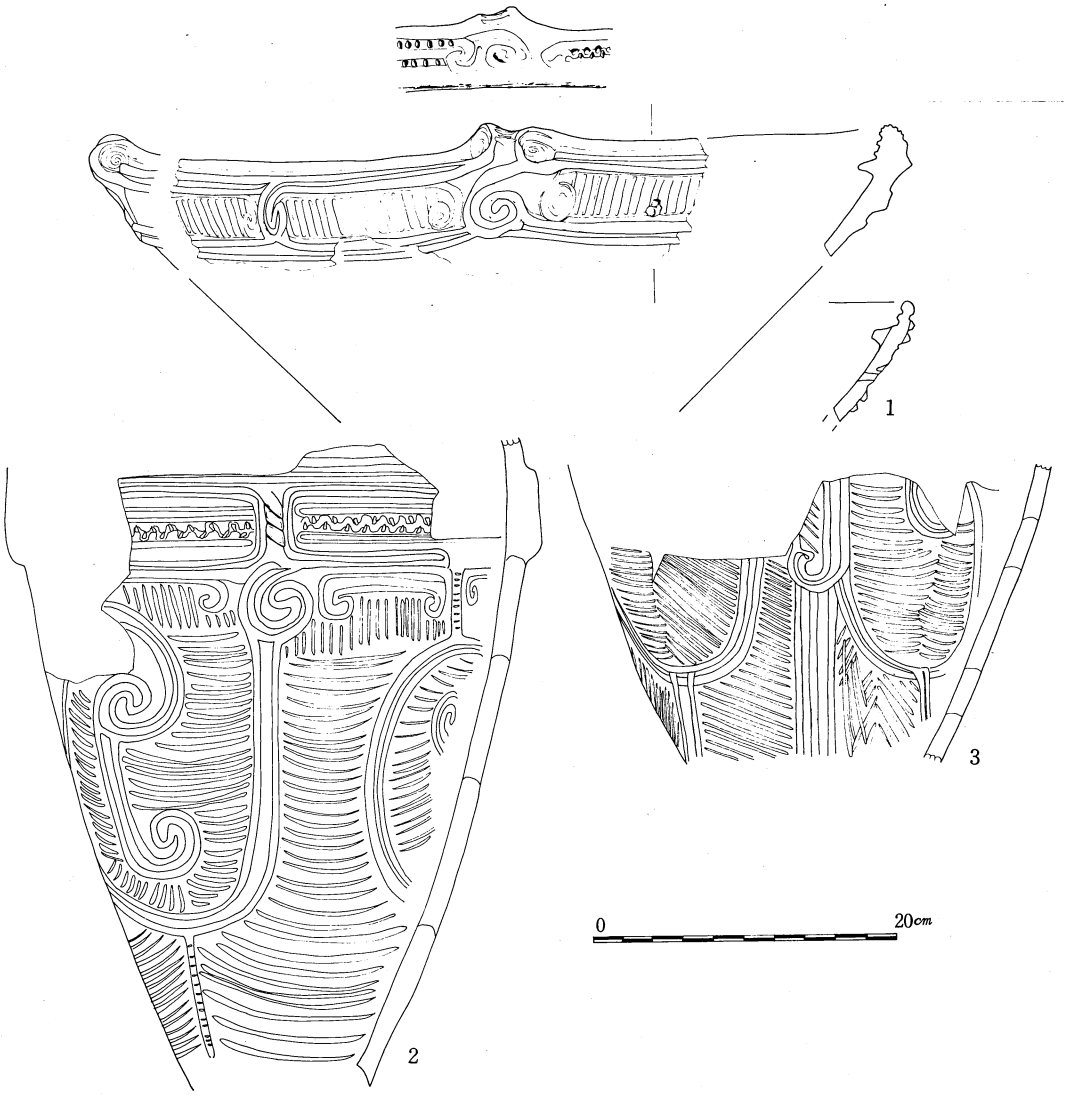
36図－4は推定口径15cmの単純に外方に開く小形深鉢形土器である。文様は口縁部に沈線を一条巡らし，胴部には全面に縦の沈線文を施している。黄褐色を呈し，胎土に石英粒を含み，焼成は



第36図　第8号9号住居址出土土器



第 37 図　第 8 号住居址出土土器



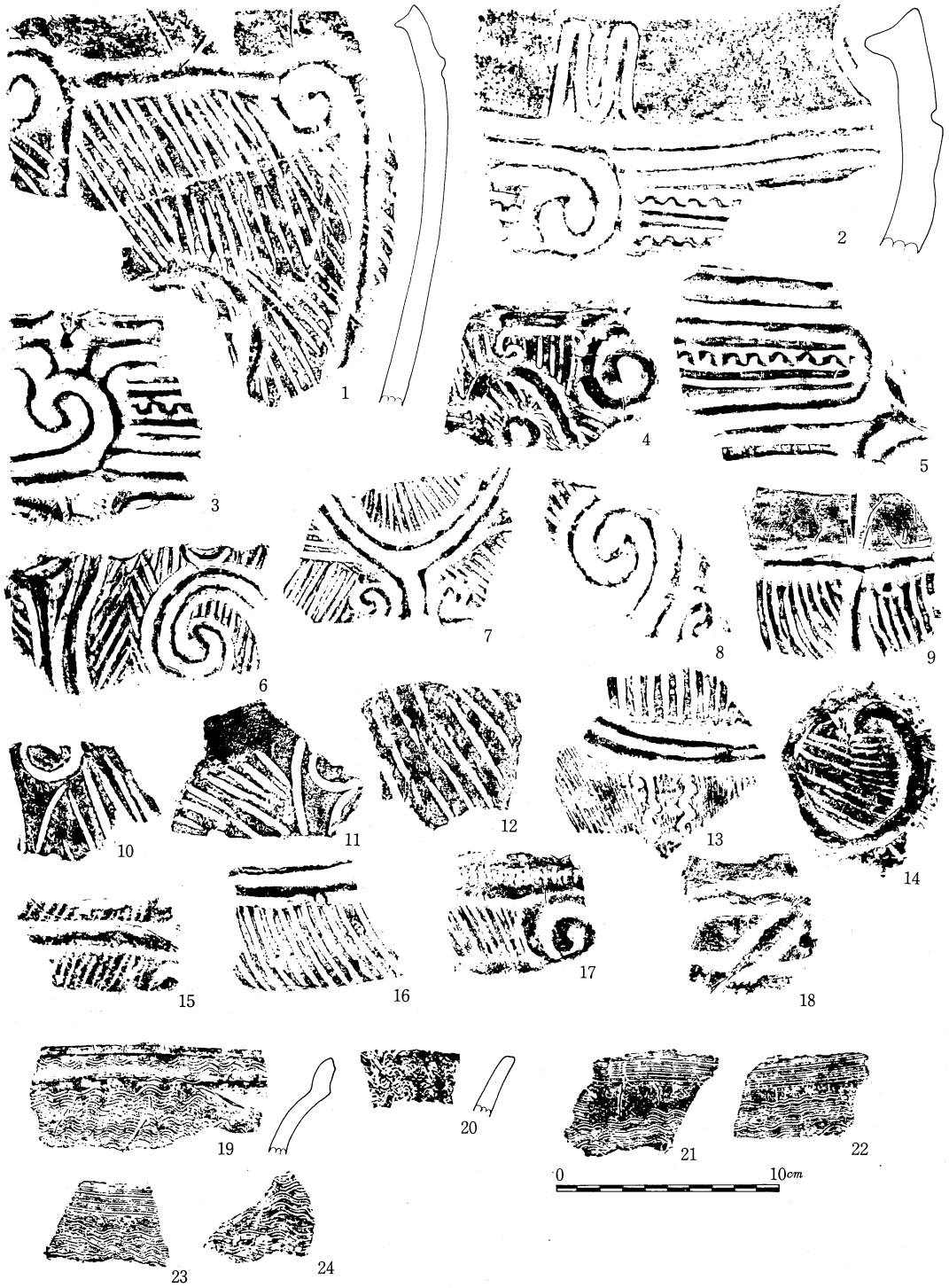
第38図　第9号住居址出土土器

良い。口辺部にススの付着が認められる。

5は底部から口縁にかけて単純に開く小形深鉢形土器で，2対の小突起を有する波状口縁を有する。波状口縁の突起部分には内側から外側に向かって貫通孔があけられている。文様は蕨手状の文様を中心に左右には右傾する粗い沈線文が施されている。暗褐色で，胎土は良好で，固く焼きしめられている。器高19，口径18.5cm。

6は口径30cmを計る大形甕形土器の口縁部破片で，口縁部に沈線による渦巻文があり，その下には横走する隆帯が配されている。

7は推定口径27cmの大形深鉢形土器で，口辺部はやや内湾気味に立ち上がる。主文様は口辺部に集中する。幅広の沈線が1条横走し，その下位に2本の孤状に結がる隆帯による円文と渦巻文に



第39図　第9号10号住居址出土土器

より楕円区画が作り出され，区画内には縦の沈線文が充塡される。胴部は条線文によって埋められている。黒褐色で焼成良好。

8は単純な形態の小形深鉢形土器で，口径20.5，現在高23cm。文様は口縁部に2本の沈線文を巡らし，頸部以下には強く蛇行した沈線による懸垂文を4単位配し，その間に条線を施している。黄褐色で焼成は良い。

38図－1は炉址内から出土したもので，推定口径49cmの浅鉢形土器である。小突起を付したゆるやかな波状口縁を呈している。文様は口辺部に隆帯と沈線による渦巻文で横帯区画を作り，その間を縦の沈線で埋めている。胴部は無文である。口縁内面には沈線による渦巻文と交互刺突文が施文されている。なお図示してあるとおり内側より穴があけられている。補修孔であろうか。この穴の上にもう一つ凹みがみられ，これは外側から穿孔途中で中止したものであろう。黒褐色を呈し，胎土に砂粒と雲母片を含む。焼成は良い。

2は埋甕Aとして埋設されていた土器である。底部および口縁部を欠く深鉢形で現在高42cm。文様は頸部と胴部とに分けられ，頸部は隆帯による横帯区画文で，内に交互刺突による蛇行状文が施されている。胴部は隆帯による大きな渦巻文が4単位配され，その間を上位は縦の沈線を，その下は横の沈線で埋めている。黄褐色を呈し，焼成良好。

3は埋甕Bとして埋設されていた土器で2と異なり破損が著しい。残存部分は胴部の1部のみで，隆帯の懸垂文とそれに結がる渦巻文とが大きく配され，その間に横位ないしは一部縦位の沈線文を充塡する。黄褐色で焼きは良い。

39図－1は甕形土器の口縁部破片で，口縁部に無文帯を残し，その下に隆帯の蕨手状文を，またその間には沈線文を施文している。2・3・5は隆帯による渦巻文と交互刺突による蛇行状文が配されている。4・6～8は隆帯による渦巻文とその間を埋める綾杉文が施されている。10～12は沈線による渦巻文と平行沈線文の土器である。13は孤状隆帯により区画された口辺部破片で，区画内には平行沈線文を，それ以下には蛇行する沈線の懸垂文が地文の条線と共に施されている。

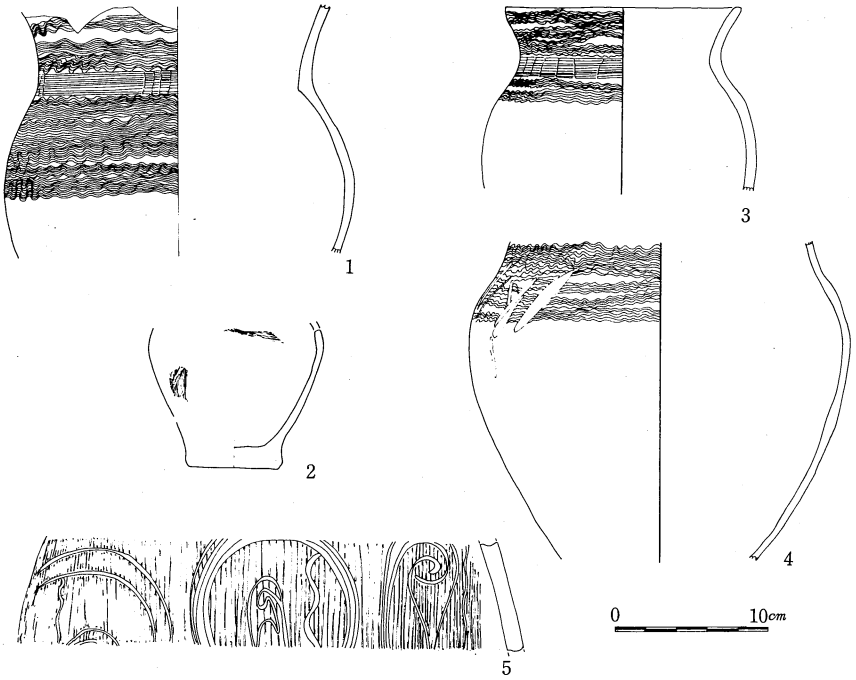
これら9号址出土の土器は曽利Ⅲ～Ⅳ式に比定されるものであろう。

10）第10号住居址（第39・40図）

第10号住居址からは土器の出土は殆んどみられなかった。わずかに39図1と40図14～24が取り上げることができた資料であった。

40図－1は炉に埋設されていた土器で，口唇部を欠いている。頸部できつくくびれ球形の胴部につづく形態をもち，胴部径22.9cmを計る。文様は頸部から胴部上半にかけて施され，頸部に一帯の簾状文を，それより下位の胴部上半には5帯の，また頸部には3帯の櫛描波状文を施文している。頸部以下の外面にはススの付着がみられ，頸部は赤色塗彩されている。小砂利を含み焼成は良い。

39図－19は内屈する口縁部破片で，口唇部は外側に鋭く切られている。内屈部分および口辺部には櫛描波状文が施文されている。21は簾状文と波状文が，22・23は櫛描平行線分と波状文とが描か



第40図　第10号11号住居址出土土器

れている。

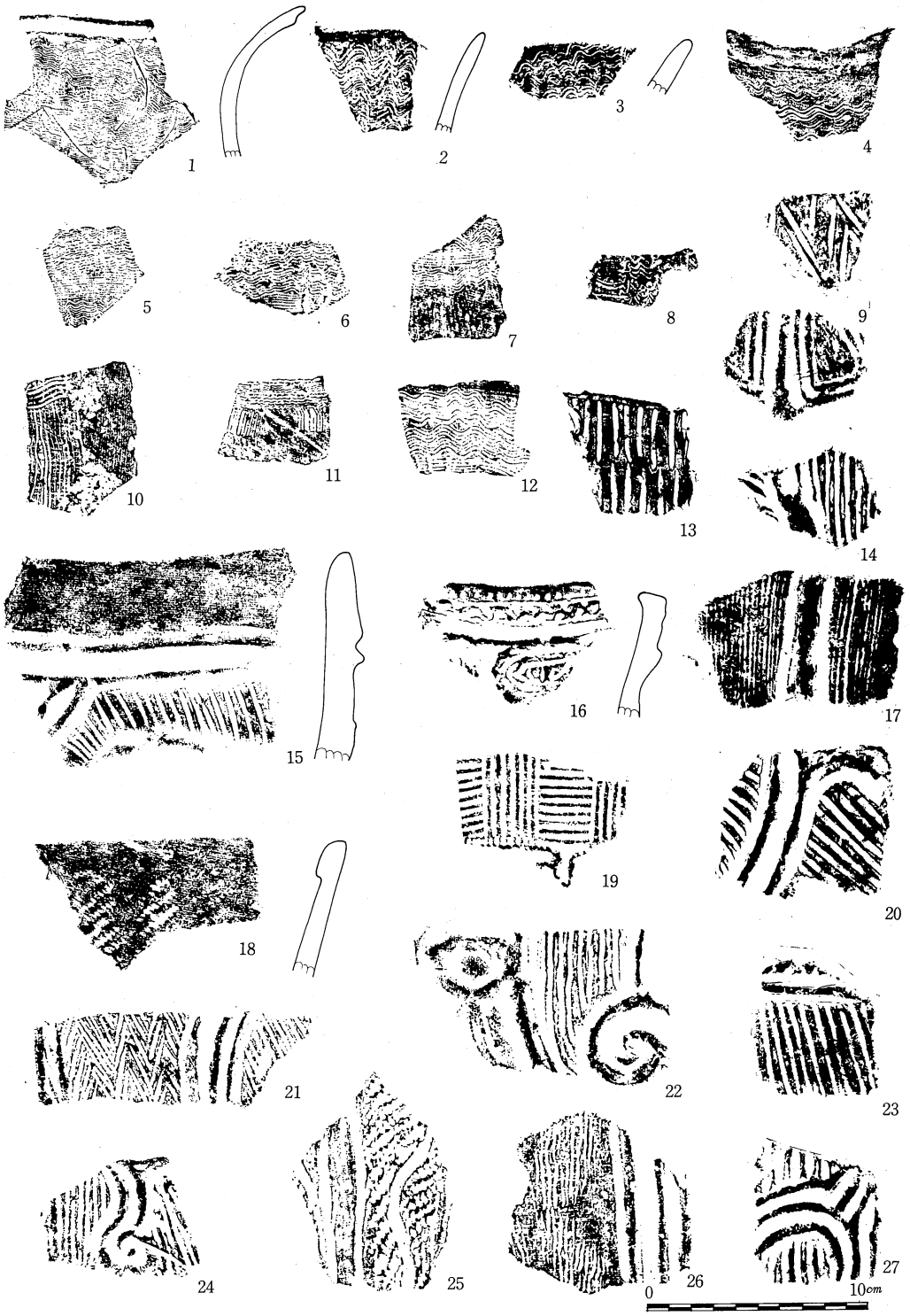
11）第11号住居址（第40・41図）

第11号住居址は弥生時代の住居址であったが，遺構の項でも記した如く縄文期の土器の混入が著しかった。

40図－3・4は炉に使用されていた土器で，19図に示したように4の中に3が逆位に埋められ，3の口縁部，胴下部を割り取ってその支えとしていた。

3は球形の胴部から頸部で収約し，口縁はゆるく開いた甕形で，口縁径は15.4cm。口縁内面は横位のヘラミガキが，胴部外面にはヘラミガキの痕跡が顕著に認められる。文様は口縁・頸部にみられ，頸部に1帯の簾状文が横走し，口縁部に4帯，胴上部に2帯の櫛描波状文が施文されている。胎土には砂粒を若干含むが非常に固く焼きしめられている。

4は球形の胴部をもつ甕形土器で，炉として使用されていた。胴部径24.8cm。文様は胴上半部に



第 41 図　第 11 号住居址出土土器

櫛描波状文が施されている。施文後，箆整形が行なわれ，波状文の1部の文様が消されている。頸部に一部赤色塗彩痕が認められ，また文様施文部下にはススの付着が顕著に認められる。薄手で胎土・焼成とも極めて良好。

2は小形甕ないしは壺形土器の胴下部の破片。外面に若干の調整痕が認められるだけで文様はない。外面上にはススの付着が著しく，黒褐色を呈し，内面は赤褐色である。焼成は良い。

41図－1は大きく外反する口縁部破片で，口唇部に幅広の沈線がめぐり，頸部には櫛描波状文と平行線文とがめぐっている。2・3も口縁部破片であるが単純に外方に開くもので，波状文は大きく激しい。5～7には簾状文と波状文を，10は頸部をめぐる平行線文に直交する平行線文を直下させ，11は波状文の下に垂下する短線文を施文している。

弥生期に属する土器は以上で，この他に無文の土器片が少量出土したのみであった。

40図－5は床面の北西隅に埋設されていた縄文土器の胴部で，埋設されていたように逆位に図示してある。条線の上に沈線による渦巻文が描かれている。この他の縄文土器は41図－15・20～22・24・27は隆帯による渦巻文と沈線文が，18は縄文の，25は蛇行する懸垂文と磨消縄文が施文されている。

12）第12号住居址（第42・43図）

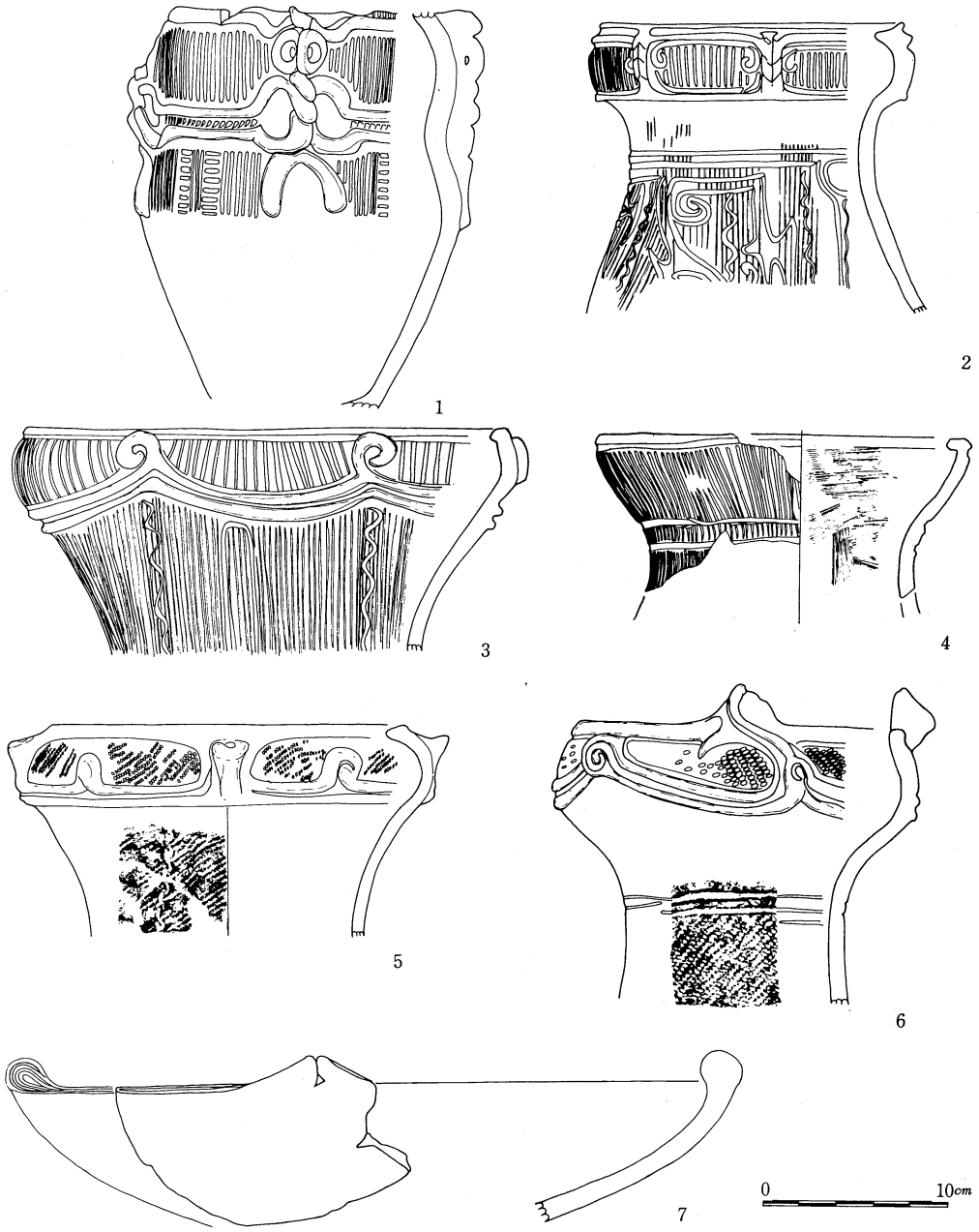
第12号住居址では炉址の周辺を中心として床面より10cm前後浮上して多量の土器が出土した。

1は胴部上半で1段のくびれをもつ中形の甕形土器で口縁部と底部を欠いている。現在高は21.5cm。文様は胴上半部に限られ，胴下半部は無文帯となっている。胴上半部のくびれた部分には2本の隆帯を横走させ，上下の文様帯に分離し，更に隆帯をX字状に結合させ，これに小さなミミズク把手と∩字状の隆帯を一列に付して一種の人体状の文様を作り出している。頸部には縦の平行沈線を，胴上部には縦と横の平行沈線文を交互に施文している。黄褐色で焼成は余り良くない。

2は内湾する口縁部から頸部で強くくびれ，胴部で大きくふくらむ甕形土器で，胴下半部を欠損している。文様は口縁部と胴部とに分けられる。口縁部は隆帯により楕円形区画文を作り出し，その内を渦巻文と縦位の平行沈線文で埋めている。胴部文様は頸部との境目に2本の沈線を横走させ，それより下位には沈線による渦巻文，懸垂文が複雑に施文されている。地文には粗い条線が施されている。口径16cm。

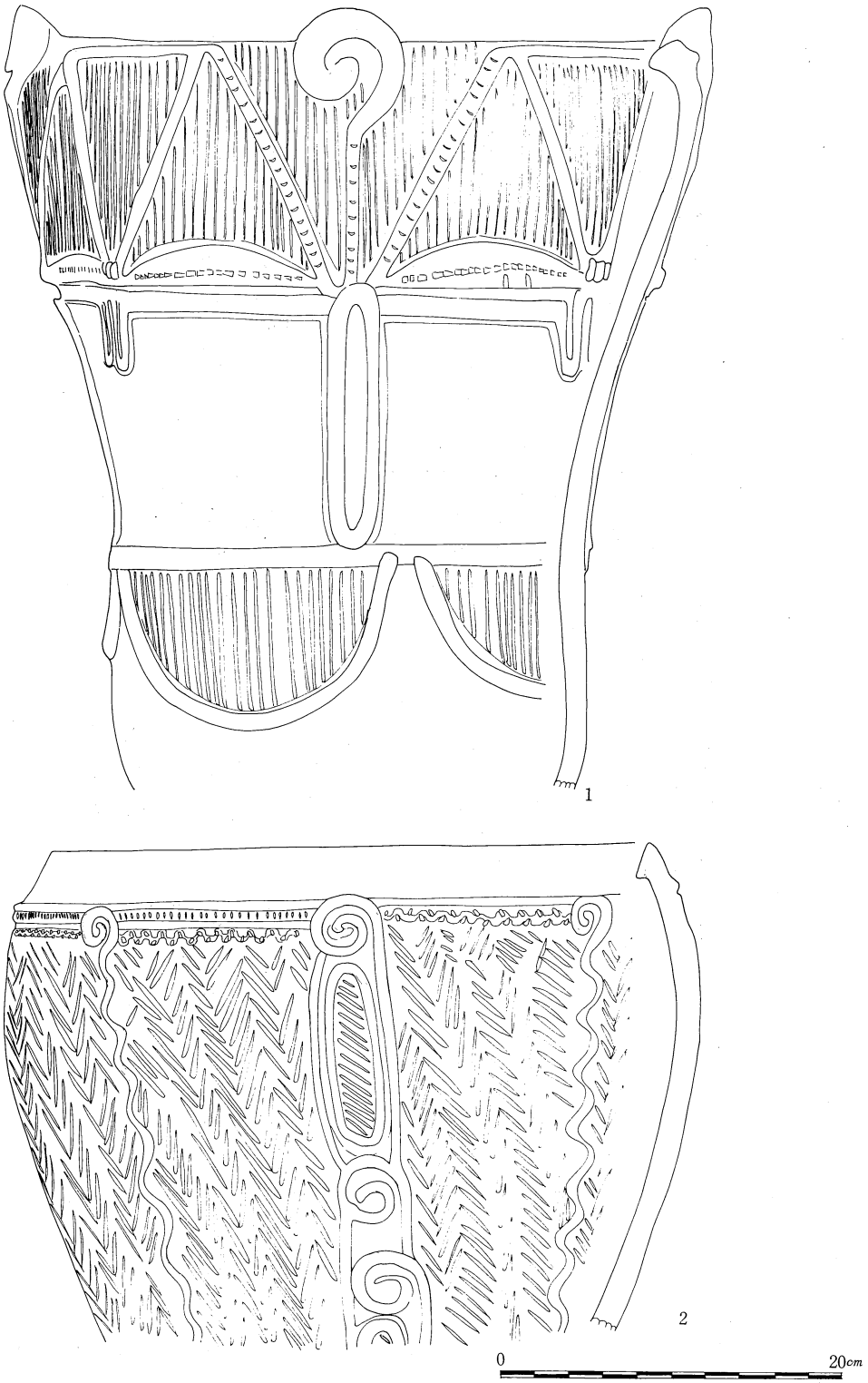
3は深鉢形土器の上半部で，口径26cm。口辺には2本の隆帯を孤状にめぐらし，渦巻文と結合させて楕円状の区画文を作り出している。区画内には縦の平行沈線を充塡している。胴部文様は条線の地文上に沈線による蛇行した懸垂文と逆U字状文を施文している。黒褐色で焼きは良い。

4は口唇部がやや内湾気味に立ち上がり，推定口径20.6cmの深鉢形土器。口縁部に沈線を一条巡らし，やや傾きかげんの縦の沈線文を配し，頸部には平行する2本の沈線文を横走させている。内面には幅1cm程の工具による調整痕がほぼ全面にわたって認められる。外面は褐色，内面は黒褐色で，胎土には石英粒が含まれ，焼成は良い。



第42図　第12号住居址出土土器

5は口縁部が大きく内湾する深鉢形土器で，口径23.8 cm。文様は口辺部に集中し，隆帯により楕円区画文を作り，区画文の結ぎ目に渦巻状の小突起を付している。区画内には縄文を充填させている。胴部には結節をもつ縄文を施している。



第 43 図　第 12 号 13 号住居址出土土器

6は口縁部が内湾する深鉢土器で，口径17.6cm。口縁部には2ヶの小突起を付している。口辺部文様は2本の隆帯が孤状にめぐり，渦巻文と結合し，楕円形区画を作り出している。内部には縄文が充塡されている。胴部には2～3条の沈線文を横走させ，これ以下に縄文が施文されている。黄褐色で焼成はよい。

7は推定口径34cmの浅鉢形で，波状口縁をもつ。文様は口唇文部にのみ施され，2本の沈線で長楕円状の文様を施文している。胎土は良く，器面整形も丁寧で焼成はよい。

43図－1は口径40.5，現存高42.5cmの大きな深鉢形土器で，口唇部は内屈し，胴部でゆるくくびれる。文様は口辺部と胴下半部との文様帯に分けられ，両者は楕円状の隆帯によって結合されている。口辺部文様は隆帯による三角形区画文を中心に，口唇部には4単位の渦巻文の突起を付し，その末端を頸部まで垂下させている。区画内には縦の平行沈線文を施し，頸部の隆帯上には連続刺突文を施している。胴下部の文様は大きな櫛形文で3～4単位配されているようである。灰黒色を呈し，焼きは余り良くない。

以上12号址からは42図－1・7・43図－1のように古い要素をもつ土器と，2～6の新しい要素をもつものがあり，曽利Ⅰ～Ⅱ式期に比定されようか。

13）第13号住居址（第43・44図）

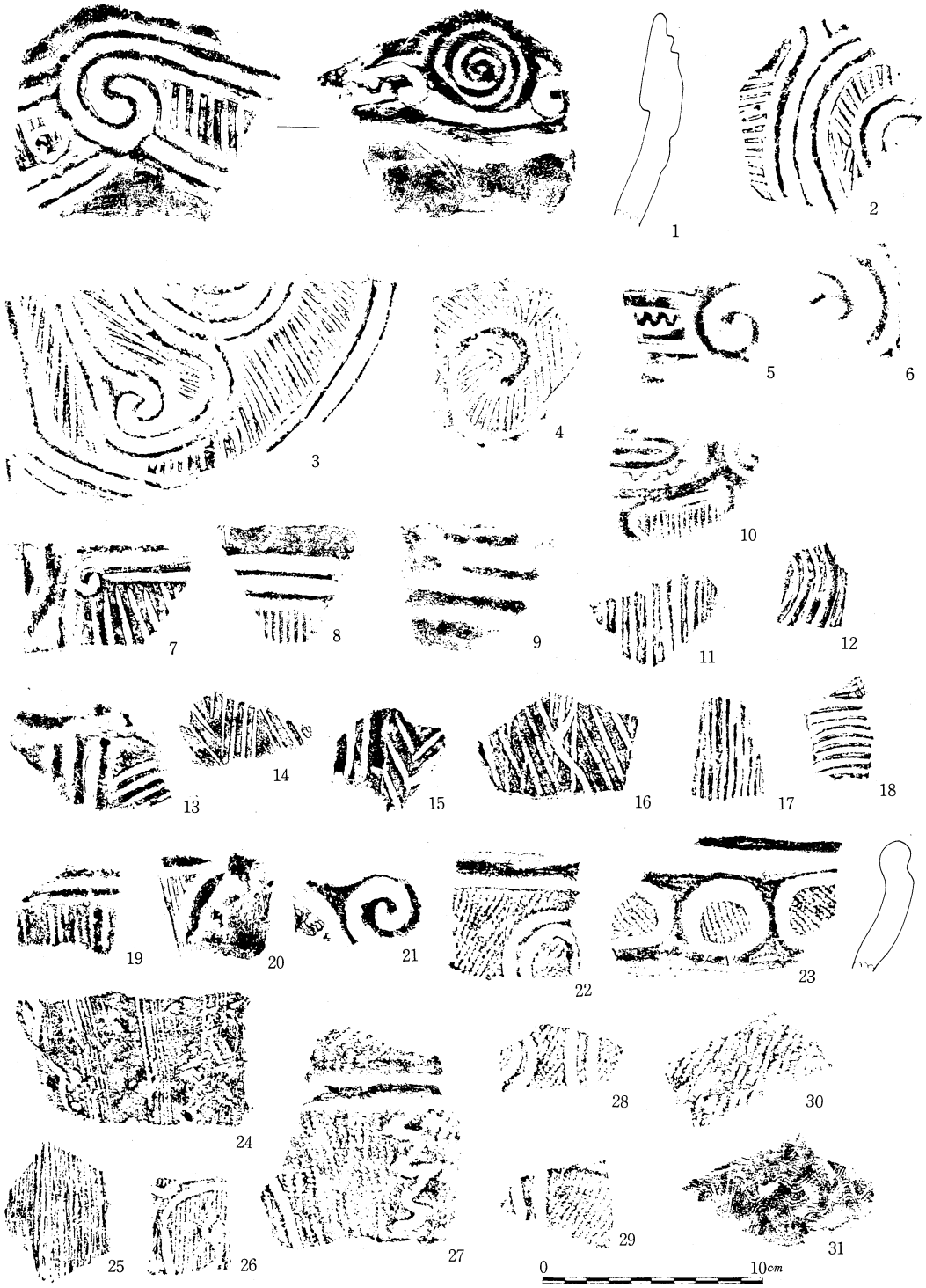
第13号住居址からは埋甕以外は余り土器が出土せず，小破片が大部分であった。

43図－2は本址で器形が分かる唯一の資料で，埋甕として埋設されていたものである。器形は胴上部からゆるやかに内湾する大きな甕形土器で口径は34.5，現存高29cm。文様は口縁部の無文部下に1～2条の隆帯を巡らし，これより隆帯による渦巻文と楕円区画文を縦位に配して器面を4単位に分け，その単位内に隆帯による懸垂文を施文し，空間部は綾杉文で埋めつくしている。黄褐色で焼きは余り良くない。なおこの埋甕内から図示しなかったが土器の底部（底径8.5cm）が出土した。

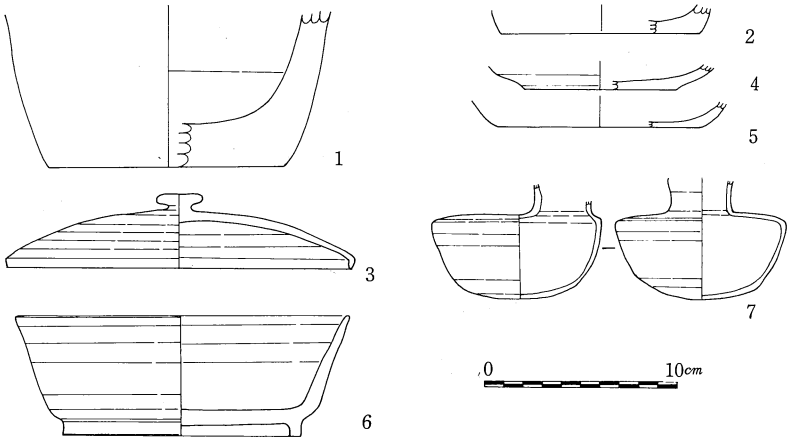
44図－1は浅鉢形土器の口縁部と思われ，口縁部外面には隆帯による渦巻文と平行沈線を充たした楕円区画文を配し，内部には沈線による渦巻文と交互刺突による蛇行状文が施されている。2～4・7は隆帯による渦巻文と沈線文とを施文したもので，6はその渦巻部分であり，11・12・14・17・18は沈線部分の破片である。5・10は渦巻と交互刺突による文様をもち，この種の土器の頸部破片であろう。21は隆帯による渦巻文と縄文，22・23は沈線による円形・楕円形区画文とその内を縄文で埋めている口縁部破片である。24～26は地文に条線文をもち，地文上に沈線の渦巻文・蛇行懸垂文を施文したものである。31は1片の出土であったが，弥生土器の頸部破片で大ざっぱな櫛描波状文を施している。

縄文土器は曽利Ⅲ～Ⅳ式に比定されるものであろう。

（小林康男）



第44図　第13号住居址出土土器



第45図　第14号住居址出土土器

14）第14号住居址（第45図1～7）

本址の出土遺物は比較的少なく，土師器，須恵器が微量得られた。完形品は全くなく，破片及至は1部欠損品等であり，その中で資料として活用し，図上復元し得るものは，土師器2片，須恵器5片等であった。以下遺物に1連番号を付し，土師器，須恵器に類別して詳述したい。

土師器（第45図1・2）

僅か2例である。1は大形の甕形土器の底部とみられるものである。器厚は上部で1.5cm，底部では2.3cmと厚く重量感があり，底径は12.2cmを数える。胎土に石英砂粒など多量に含み，外は黒褐色，内は暗黒色を呈し，焼成は必ずしも良い方とは言えない。壁面調整は概して良好である。2は，小形甕形土器の底部とみられるもので，器厚0.8cm，内外赤褐色を呈し焼成はよい。やはり胎土に石英，砂粒を多量に含み，器肌が多少ざらついている。底部径は10.4cmである。

須恵器（第45図3～7）

資料の内訳は，坏蓋1，坏3，平瓶1である。いずれも胎土に微量の砂粒を含み，色調は青灰色系をとり，焼成良好で堅緻である。3は直径18.2cmの坏蓋で，1部欠損しているものの全体をうかがい知ることができる。器厚0.3～0.4cm，つまみの頂部までの高さは4cmである。つまみは上部面が平担で，釦状を呈し，径2.5cm円形となる。内外に薄い轆轤痕が残り，端部はほぼ垂直におりる。4～6は共に坏である。4は器厚0.5cm，糸切りの平底の径は8cmを数える。器の立ち上がり部の外周を，若干篦削させた後，外反しながら立ち上がる傾向を示す。5は器厚0.3cmとうすく，底部径は11.2cmである。底部面には糸切り及至は篦切り等の痕跡を全く残さず，仕上げの調整をよくしている。又，底部より器壁への立ち上り部分には，角が全くみられず極めて円滑な移行を示している。6は図上復元により，全体を察知し得る高台付の坏である。高台の直径は12.2cm，口

径は18cm，高さは6cmを記録する。底部には回転篦削りの跡が残り，断面四角状の付高台がほぼ垂直におりている。内壁には1.2cm幅の淡い刷毛目痕が全面に残り，轆轤痕を器の内外に残さない仕上げとなっている。然し，器成形前の陶土の叩きしめが十分でなかったためか，陶土内に多分の気を含んでいたとみえ，これが焼成時に気泡となって吹き出し，ところどころコブ状のふくらみが残されている。7は，出土例をあまりみない平瓶である。丸底で上部面肩部における最大径は8.8cmを数え，底部より上部面肩部までの高さは4.5cmである。総じて小づくりであり，片手の掌におさまる程である。口径部は，器の1方の端に寄せられて立ちあがり，直径は3.5cm（内径2.8cm）を記すが，その中間程より上部を欠損してみることができない。上部面は焼成時に灰を受けたらしく，黄灰色とやや色調を異にしており，底部は静止篦削りの跡を残している。

以上明らかにされた遺構，遺物のあり方から，本址の年代的位置づけに検討を加えるならば，住居址では，竈の設定位置が1辺の壁の中央部に所在していること，素材として粘土と石組が併用された趣がうかがえること。又，出土した遺物が，土師器と須恵器に限られ，施釉陶器の伴出がないこと，平瓶は，6世紀より7世紀にいたるまでは，把手をもたないのを通例とし，把手付となるのは8世紀以降のことであり，本址出土のものは，小形ながら丸底で把手をもたず，比較的古い様式を持っていること，杯で糸切底となるもの，高台付を示すものは，平出第5様式からであり，杯の中には，底部より器の立ち上がりに角をもたない，特徴のあるものに含まれていて，本住居址の下限を示すかの様であり，その構築時期は8世紀末，9世紀初頭を下降しないだろうと推考される。

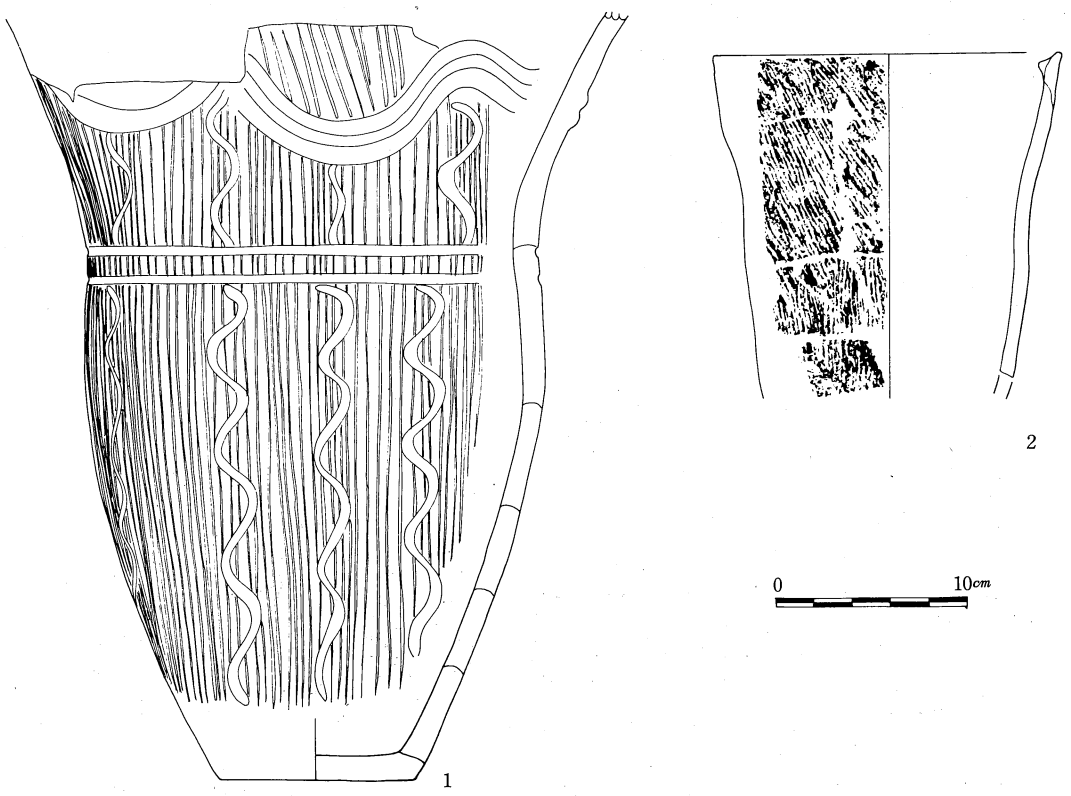
（大久保知巳）

15）第15号住居址（第46・47図）

46図－1は埋甕として埋設されていた大形深鉢形土器で，現存高40.5cm。口縁部を欠いている。形態は頸部でゆるくくびれ，口辺部は大きく外反する単純なものである。文様は口辺部にゆるやかな波状を呈する2本の隆帯がめぐり，頸部には2本の沈線文が横走している。口辺部および胴部には条線と地文として，沈線による大まかな懸垂文が施されている。黄褐色を呈し，砂粒を多量に含み，焼きは極めて悪い。

46図－2は埋甕の脇の床面上から出土したもので，口径18cmの小形深鉢形土器である。文様は左上から右下に傾斜した縦の沈線を全面に施している。内面には横方向に調整痕がみられる。暗褐色で，小砂利を含み，焼成は良い。

47図1・2は大形甕の口辺部破片で，3は胴部破片で，ともに炉址内より出土した。1・2は隆帯による渦巻文を口縁にめぐらし，それより下位には平行沈線ないしは綾杉文を施している。5・6は甕形土器の口辺部で，隆帯により横帯区画を作り，内には交互刺突による蛇行状文，渦巻文を施している。それ以下は縦方向の平行沈線文を施文する。8～9は綾杉文と懸垂文とを配したもの。10～12・15は隆帯と縄文とを組み合せたもので，口辺部では10・15のように単に楕円区画を作り出すものと，11のように渦巻文をもって区画文を作るものとがある。12～14，16～18はその胴部破片



第46図　第15号住居址出土土器

であり，幅広の沈線を垂下させ，縄文を施している。19は底部の破片で，キャタピラ文を内側にもつ楕円区画文を施文している。19を除き，曽利Ⅲ～Ⅳ式に比定されよう。

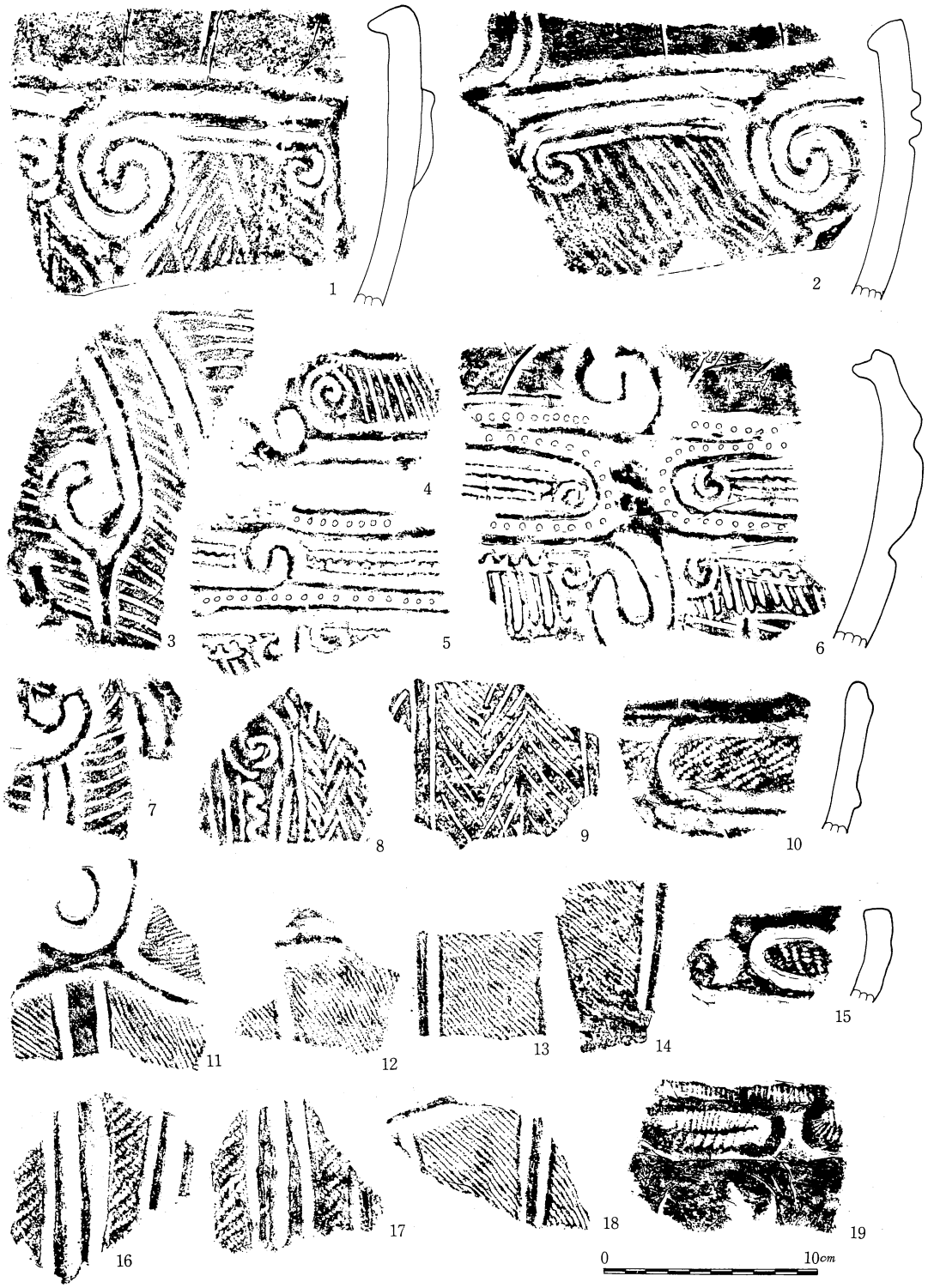
16）第16号住居址（第48図）

第16号住居址からは土器の出土が殆んどなく，48図1～9に示したものが活用可能の土器の全てである。

1は強く内屈する口縁部破片で，口唇端部に刻目を，その下位には波状文をもつ。2は隆帯による楕円区画をもつ口縁部で，内に縦の沈線文を有する。3は口縁下の無文帯につづき，以下は縄文が全面に施されている。4・5は条線のみが施され，6・7は条線を地文として沈線による懸垂文とが施文されている。8・9は沈線のみのもの。

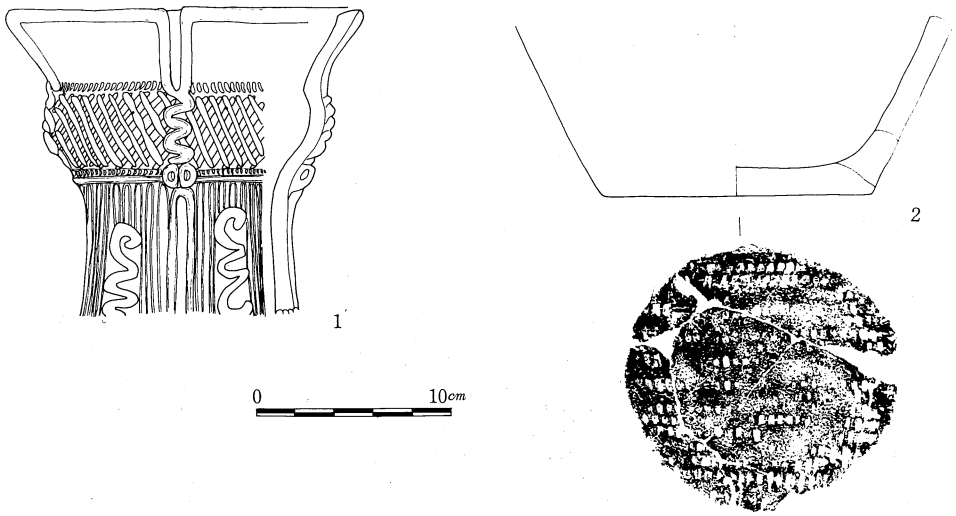
17）第17号住居址（第49・50図）

第17号住居址は調査範囲が狭いこともあって出土土器は余り多くないが，資料的には活用し得る



第 47 図　第 15 号住居址出土土器

第 48 図　第 16 号 20 号住居址出土土器



第49図　第17号18号住居址出土土器

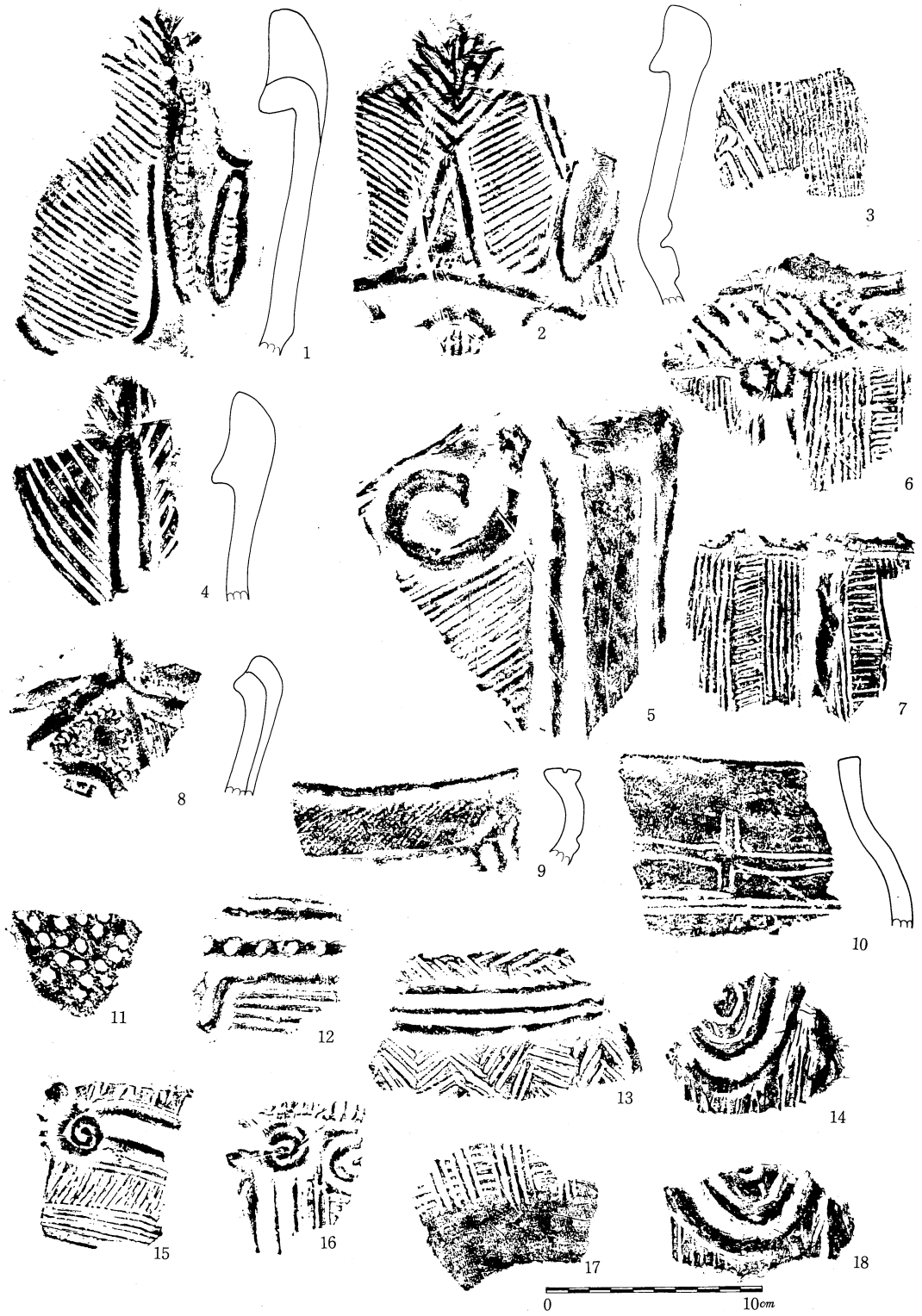
ものが多い。

1は南壁下から出土したもので，本址において器形を窺うことのできる唯一のものである。形態は頸部が突出し，口辺部が外反する小形深鉢形土器で，口径18.4cm。文様は4単位で，口唇から口辺にかけて隆帯を冂状にめぐらし，垂下する蛇行した隆帯，ミミズク小把手および∩字状の隆帯に結合している。頸部には粘土粃を格子状に貼りつけ，その両側を刻目でとり囲んでいる。胴部には沈線による蛇行した懸垂文と条線が施されている。

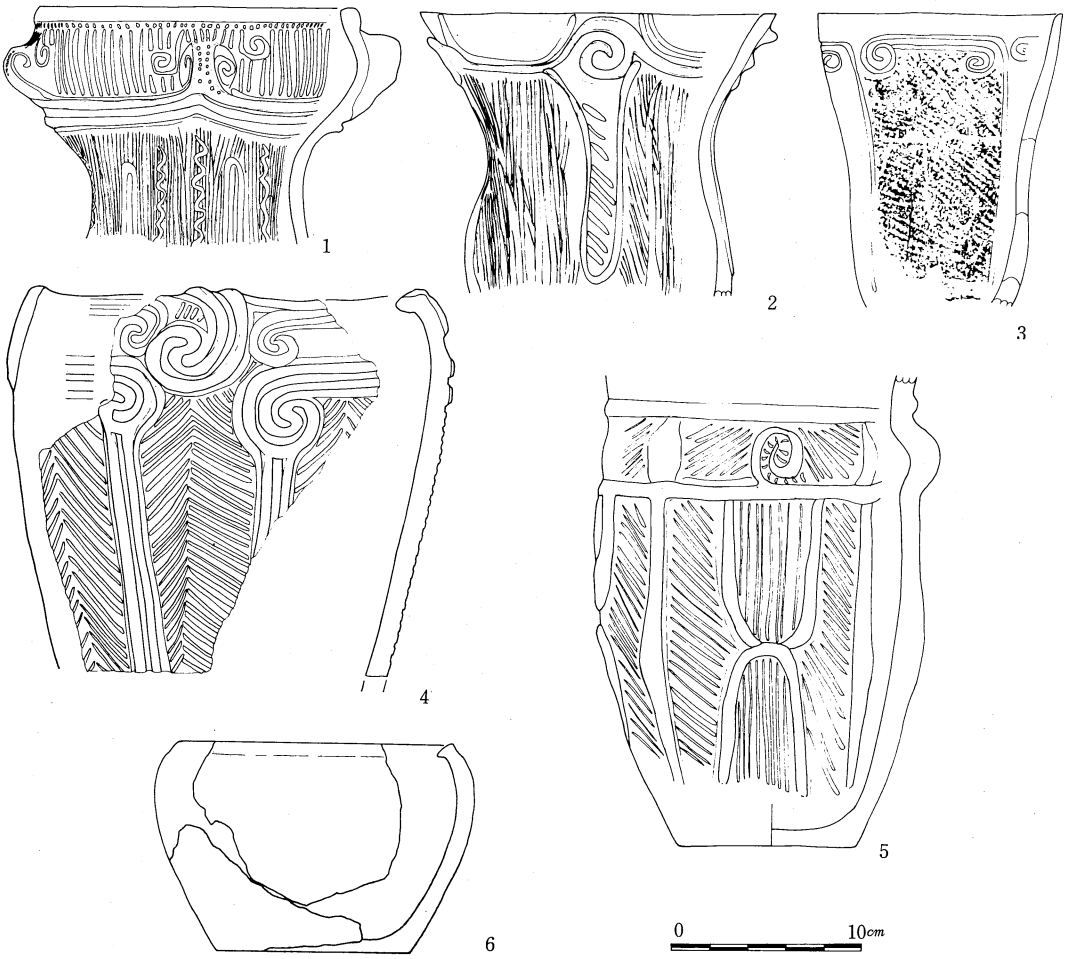
50図－1・2・4は口縁部破片で，小突起を付し，突起から隆帯による∧字状の文様を配し，末端は口縁部区画文の1部を構成する。区画内には斜行する沈線文を埋めている。6～7は同一個体の破片で，49図－1と同様頸部に粘土粃を格子目状に貼りつけ，その下にミミズク把手を付し，縦，横の平行沈線文を施している。9は隆帯による楕円区画文とその内に縄文を施文した口縁部破片であり，10は十字状に沈線文をめぐらした内弯する甕形土器の口縁部破片。11は円形刺突文を，13は隆帯と綾杉文を，14・18は渦巻文と沈線文をもつ。これらの土器の大半は曽利Ⅰ式期に比定されるものであろう。

18）第18号住居址（第49図）

18号址からは49図－2の底部土器片が1片出土したのみであった。底部径は13.5cmで底面には網代痕が印されている。



第 50 図　第 17 号住居址出土土器



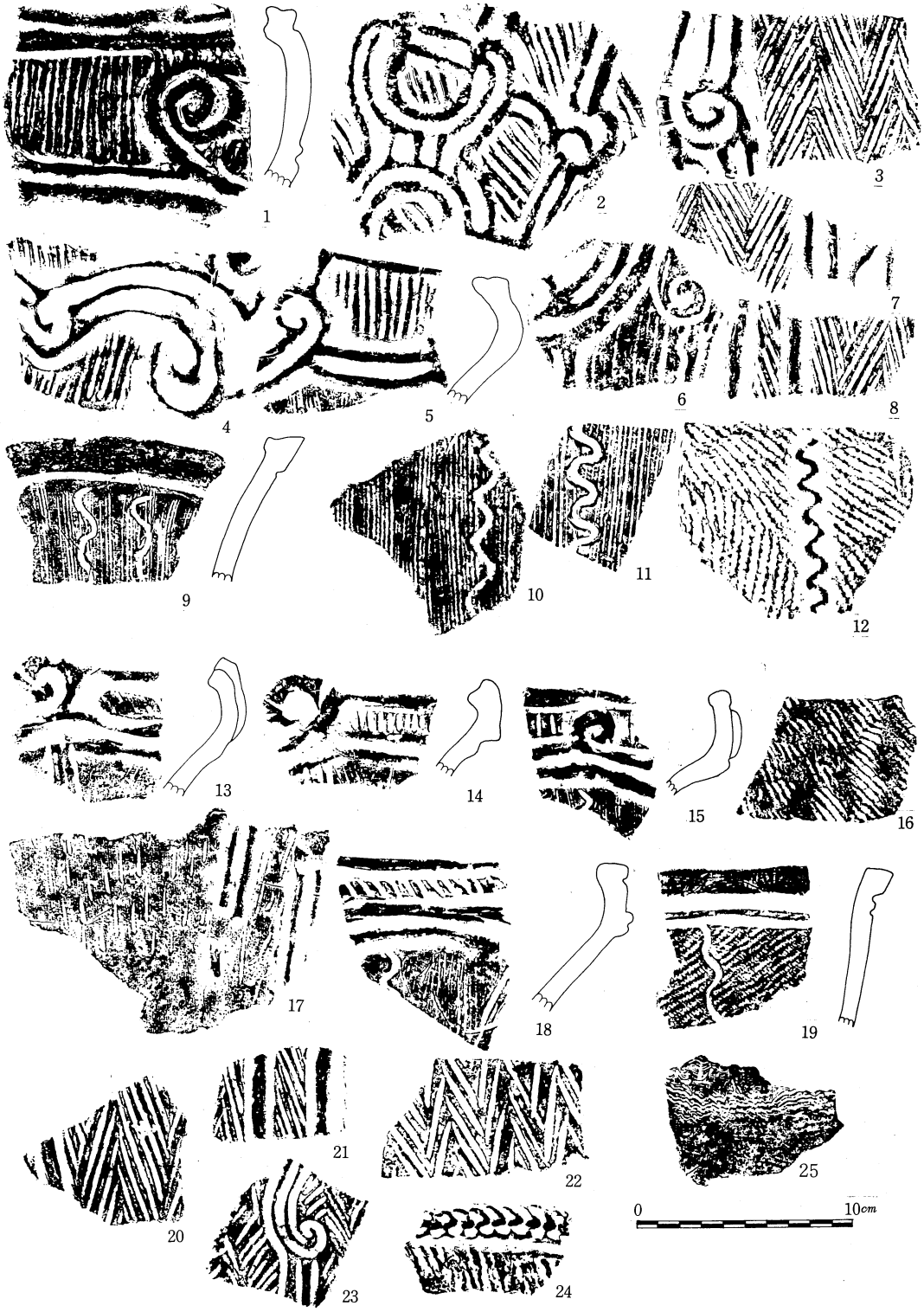
第51図　第19号20号住居址出土土器

19）第19号住居址（第51・52図）

第19号住居址からは床面からやや浮いて多量の土器が出土した。

1は頸部で強くくびれ，口縁部で内湾する深鉢形土器で，口径は16.6cm。文様は口辺部と胴部とに分けられ，口辺部は2本の隆帯が弱い孤状にめぐらされ，4単位の小突起を連結させ，楕円形の区画文を作り出している。小突起側面には沈線の渦巻文を，正面には2条の刺突文を施文している。区画内には上端に刺突文を，そしてそれより縦の平行沈線文を垂下させ，左右には渦巻文を置いている。胴部には条線の地文上に蛇行懸垂文と∧字状の沈線文が施されている。黄褐色で焼きは極めて良い。

2は胴上半が弱くくびれ，口辺はゆるやかに開く深鉢形で，口径18.4cm。文様は口辺部に1本の隆帯を孤状にめぐらし，4単位の渦巻文を連結し，その渦巻文からU字状の隆帯を胴部に下ろし



第 52 図　第 19 号住居址出土土器

ている。その中に斜行する沈線文を充たしている。胴部は条線が不規則に施されている。

3は小形深鉢形土器で，口径12.6cm。文様は口辺に渦巻文をめぐらし，その一端を胴下半まで垂下させている。各文様間には縄文を施している。黄褐色で焼きは良い。

4は口唇部が内屈する甕形土器の破片で，炉址内から出土したものである。口径は20cm。隆帯の渦巻文・沈線を施し，胴部には渦巻文から伸びる2本の平行する隆帯による懸垂文を配し，その間を八の字状の綾杉文で埋めている。黒褐色を呈し，砂粒，雲母が多量に含まれる。焼成は良い。口辺外面に炭化物が若干付着している。

52図－1・2・5は隆帯による渦巻文と区画文からなり，区画内には平行沈線を施す。3・4・6は渦巻文と綾杉文・平行沈線文を，7・8・20・21は隆帯と綾杉文とを配している。9～11は条線を地文とし，沈線の蛇行懸垂文を施文し，12は縄文地文に蛇行する粘土粃を貼りつけたものである。13～15，18はあるいは同一個体とも考えられるが，2本の隆帯を巡らし，渦巻文を連結し，区画文を作り，区画内には平行沈線を充塡している。胴部には条線を地文とし，沈線の懸垂文を施文している。19は口辺部に横走する2条の沈線を巡らし，以下には縄文地文に蛇行する沈線による懸垂文を配している。25は弥生土器の頸部破片。

19号址の出土土器は曽利II式期に比定されよう。

20）第20号住居址（第48・51図）

第20号住居址はその大半が12号址と重複しており，出土土器の所属にやや不明確さを残している。

51図－5は頸部で外に突出する深鉢形土器で，現存高26cm。文様は頸部と胴部に分かれ，頸部には2本の隆帯をめぐらし，中に渦巻文と斜行する沈線文を施している。胴部には隆帯を垂下させ，その中に∪字・∩字を組み合せた隆帯を頸部の渦巻文下に配している。この中には縦の沈線を埋め，他の部分は斜行する沈線で充たしている。一見すると人体状の表現とも受けとれる。赤褐色で焼きは良い。

6は口辺が内彎する椀形の土器で，口径14.4cm，器高11cm。口唇外面にわずかな凹みが横走する以外文様はない。砂粒を含み，丁寧に作られている。

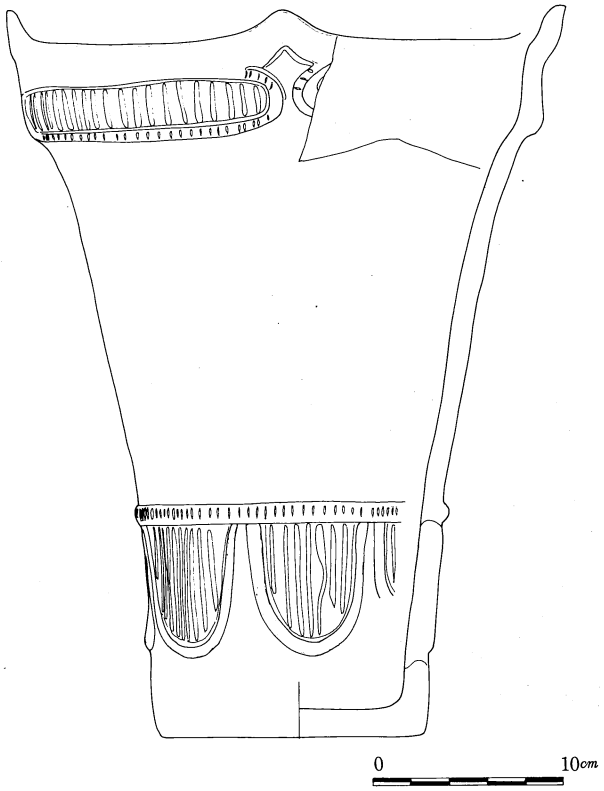
51図－10，48図－1・2は粘土粃を∪字状に器面に貼りつけたものである。13・14は地文縄文上に粘土粃を貼りつけてあり，15もその一種かもしれない。19・20は縄文地文上に沈線文をもつ。17・18は刺突文を中心とし，隆帯を一条垂下している。21・22は隆帯の渦巻と沈線文を，23は沈線の渦巻と刺突文をもつ。24は円形の貫通孔をもつ器台の一部であろう。

20号址出土の土器は曽利I式を主体にII式が若干含まれる。

21）第3号小竪穴（第53図）

第3号小竪穴の上面から53図の土器が横倒しに出土した。器高38.2cm，口径29cmの深鉢形土

器である。文様は口辺部と胴下半部にあり，口辺には4つの小突起を付した動きの少ない波状口縁で，突起下で途切れる横帯楕円区画文が隆帯により作り出されている。隆帯上には刻目を付している。胴下半部の文様はいわゆる櫛形文で6単位めぐっている。黒褐色を呈し，非常に焼成は良い。



第53図　第3号小竪穴出土土器

22）遺構外出土土器（第54・55図）

各遺構に属さない出土土器で，凡そ器形の推定できるものもかなりあり，以下取り上げたい。

54図－1は釣手土器で，釣手部分が1部欠失している。11号住居址南壁外のローム面上から出土したもので，あるいは何らかの遺構に伴うものであったとも推定されるが，畑の境界地域のため未調査で判然としなかった。文様は口辺部にのみ集中し，口縁部を沈線で囲い，その中に刺突文を付す。釣手部分にも刺突文を印し，釣手下には胴部上半まで隆帯が1条垂下し，刻目がつけられている。口縁の一部にススが濃く残されている。灯しんを置いた場所であろうか。赤褐色を呈し，焼きは良い。

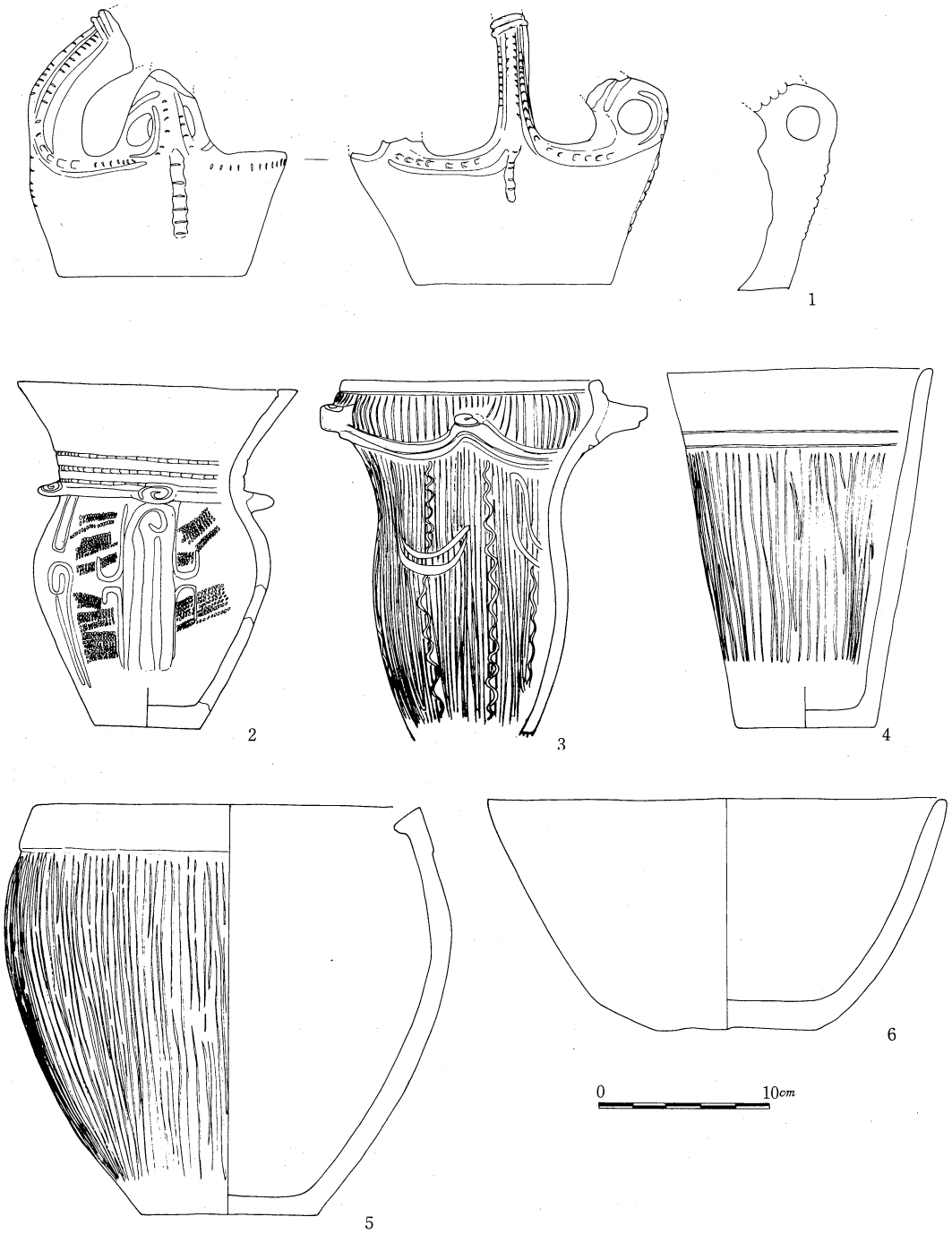
2は小形深鉢形で頸に3本の押引文を印した沈線文が巡り，その下に4単位の渦巻文をもつ小突起を付している。胴部文様は小突起に隆帯による懸垂文を配し，その両脇には沈線のL字形を施し文様間には縄文を粗く埋めている。

3は小形深鉢形で，口辺に2本の隆帯を孤状に巡らし，小突起に結合し，区画文を作っている。区画内には縦の沈線文を施す。胴部には沈線によるL字状および蛇行する懸垂文を配し，地文は条線で埋められる。器高21cm。

4は小形深鉢形で頸部に2条の沈線を巡らし，以下は縦の沈線を無雑作に施す。器高21.5cm。

5は口径22.8cm，器高24cmの甕形土器で，口辺部には無文帯をめぐらし，以下に浅い条線を無雑作に施している。

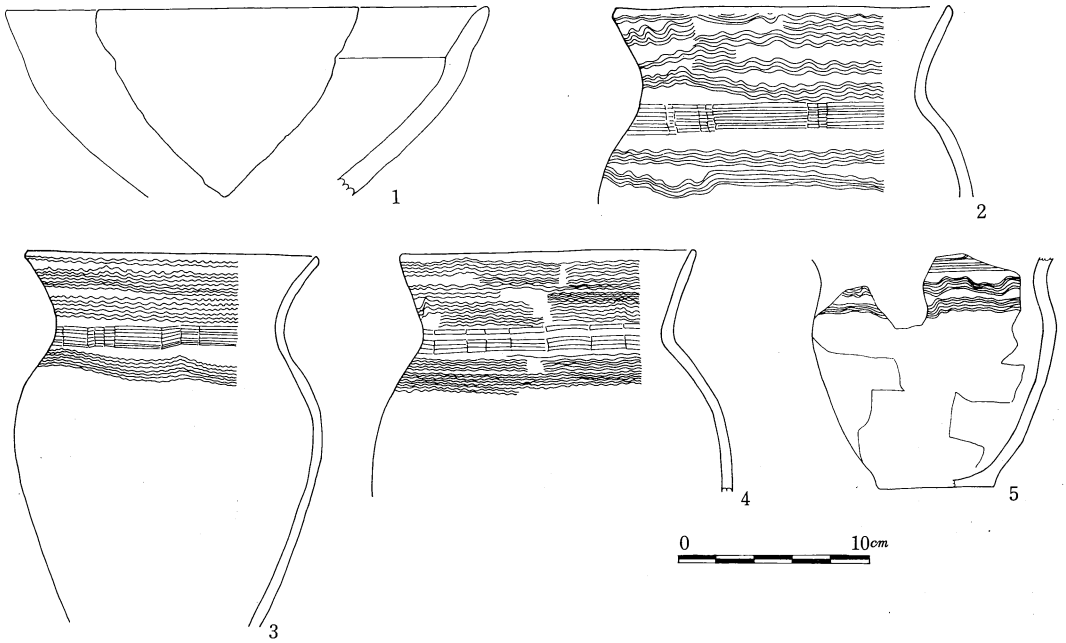
6は口径26.5cm，器高13.5cmの浅鉢形土器で文様はない。底部はかなり部厚く，土器製作時



第54図　遺構外出土土器

に器壁がくずれ，器形にゆがみを生じている。

55図－1は頸部で一たんくびれをもち，全面無文で胎土に石英を含む。



第55図　遺構外出土土器

以上が縄文土器で，以下弥生期のものについて述べたい。

2は口径17.5cmの甕形土器で，簾状文を施し，口辺部と胴部に粗雑な櫛描波状文を施す。3は口径14.5cmの甕形土器で，最大径は胴部にあり16cmを計る。文様は簾状文を頸部に巡らし，口辺に3帯，胴部に1帯の櫛描波状文を施文している。4は口径14.3cmの甕形土器で，頸部に簾状文，口辺と胴部に波状文を配す。5は小形甕形土器の破片で，胴部上半に櫛描波状文を施文している。

（小林康男）

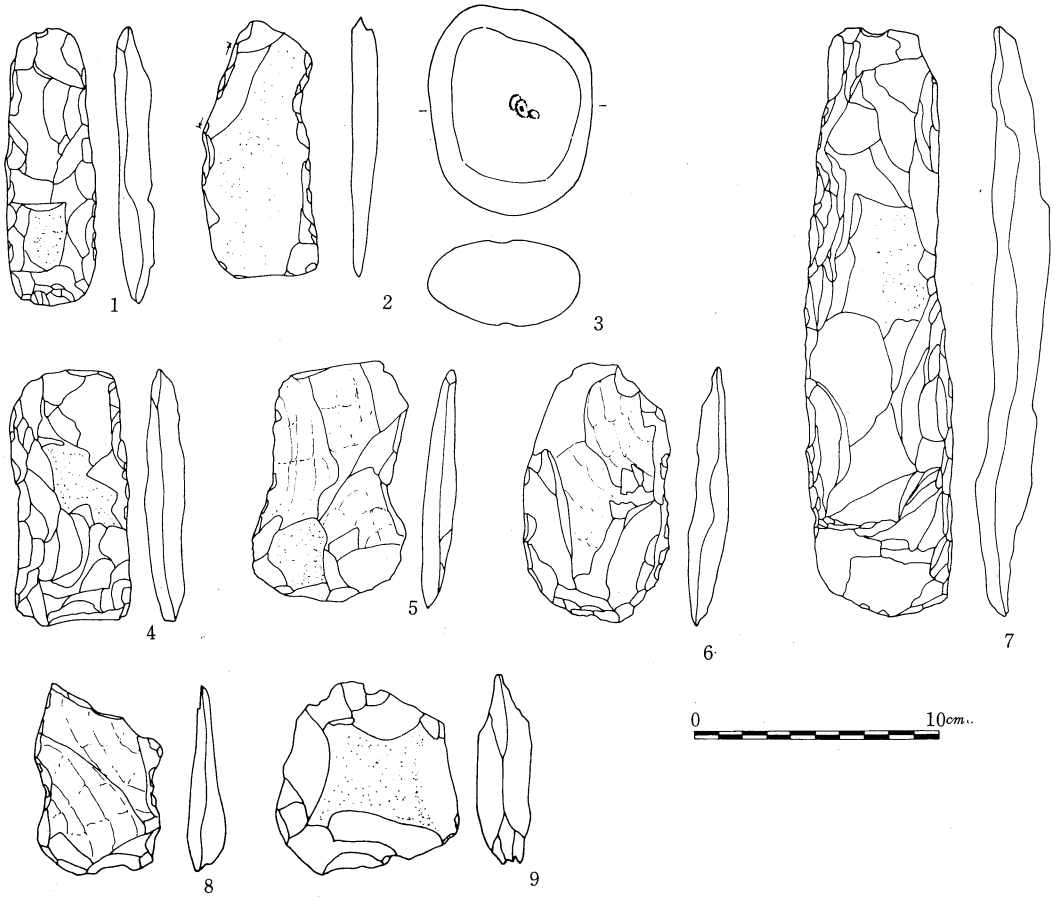
第2節　石　　器

今回の中島遺跡の発掘調査によって得られた石器は総数207点を数える。それらの出土地点ならびに点数，属性等の詳細は第1～2表に示してある。以下，各遺構別に出土石器を概観していきたい。

1）第2号住居址（第56図1～3）

2号址からは打製石器2，凹石1の3点が出土している。縄文中期前半の住居址としては極めて僅少である。

打製石器（1）は形の整った短冊形で，表面にわずか原石面を残している。（2）は表面に大き



第56図　第2号3号住居址出土石器

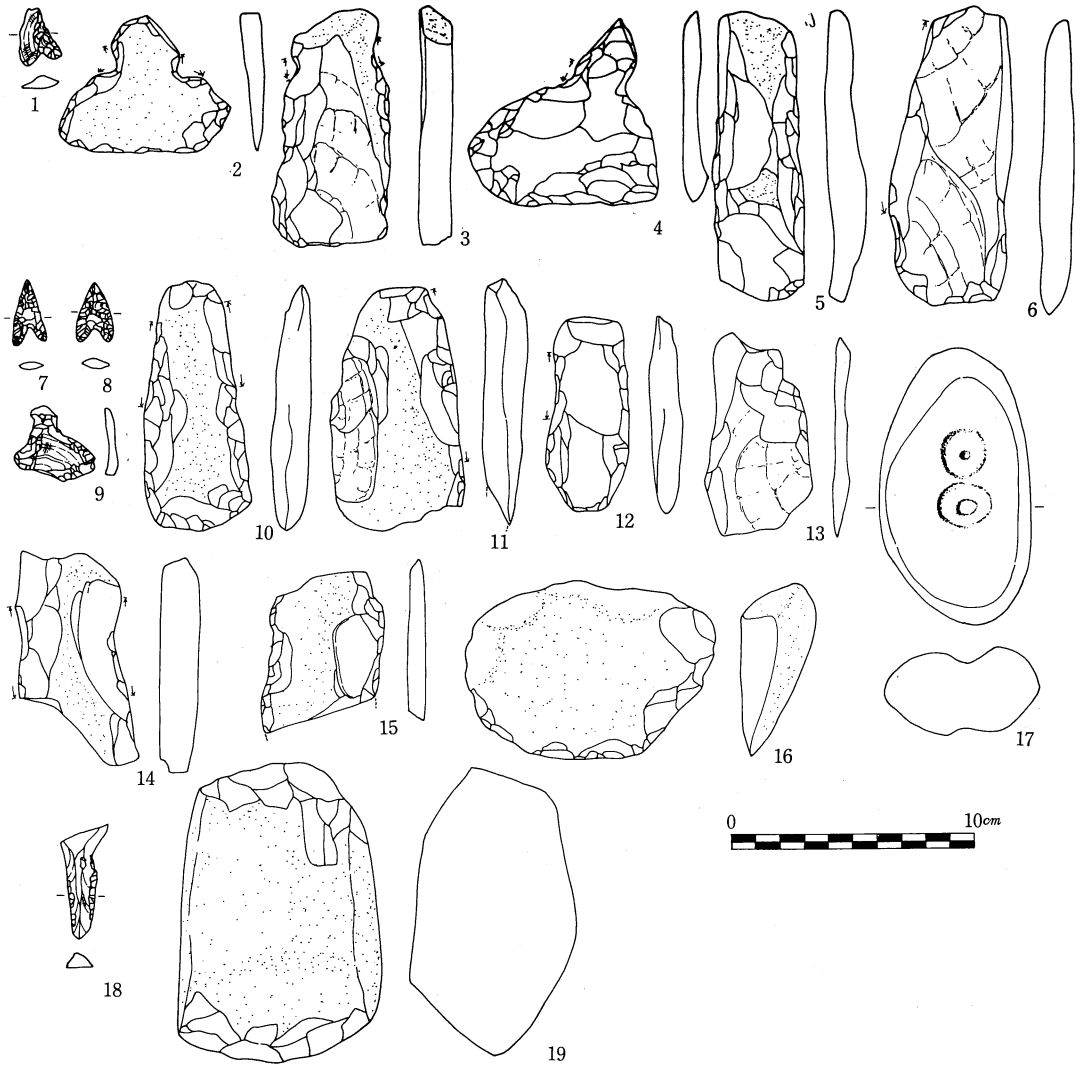
く原石面を残し，肩の部分にゆるやかなくびれを有し，左側には磨耗痕が認められる。凹石（3）は楕円礫の表裏面に打撃による小さな凹がみられる。

2）第3号住居址（第56図4～9）

3号址からは打製石斧が6点出土したのみで他の石器は出土しなかった。6点のうち完形品は4点で残りの2点は破損品である。

（4）は刃部は直線状をなし，表面中央に原石面を残している。（5）は胴部中央がくびれ，表面に原石面を残した粗雑品。（6）は楕円形を呈し，周囲にわずかな加工を施している。（7）は全長20cmを計る大きなもので，身は反り，刃部は丸味をおびている。作りは粗い。（8・9）は破損品であり，（8）は頭部を，（9）は頭・刃部を欠いている。ともに非常に粗雑なものである。

3）第4号住居址（第57図1～3）



第57図　第4・5・17・18号住居址出土石器

4号住居址は，南側部分を17号址と重複しており若干不明確な部分があったが，住居址の範囲内からは石鏃1，石匙1，打製石斧1の計3点が得られた。全て覆土中からの出土であり弥生期に属するものか否かは判然としない。

石鏃（1）は右脚のみに細かな加工を施し，左辺は第一次剝離面を大きく残している。石匙（2）は表面に原石面を大きく残し，周囲にわずかな加工を加えただけの粗雑なものである。両肩のえぐり込みの部分は両方ともかなり磨耗が認められる。打製石斧（3）は頭部に原石面を残し，中央部には第一次剝離面が残され，両辺にわずかな加工が施されている。刃部は鋭利である。両肩には小さなえぐり込みが作出され，この部分には磨耗が認められる。

4）第5号住居址（第57図7～19）

5号址は南側を19号址と重複しているので5号址の範囲と推定される地域から出土した石器を取り上げる。石鏃2，石匙1，打製石斧6，横刃型石器1，凹石1，剝片石器1，礫器1の計13点が出土している。

石鏃は（7・8）とも黒曜石製の精巧品で両方とも長さ2.5cm前後と石鏃としては大形品である。石匙（9）は刃部の1部を欠失しているが，周囲を丁寧に加工している。打製石斧は6点のうち完形品は2点のみで，他は破損品である。完形品の（10）は刃部がやや開き気味の撥形で，表面に原石面を残し，両側面の肩部には磨耗痕が認められる。（12）は全長8cmの小形品で，作りは粗い。破損品は全て刃部を欠いている。（11・14・15）は表面に原石面を残し，（13・14）は側縁に磨耗痕がある。（13）は非常に粗い加工の粗雑品である。

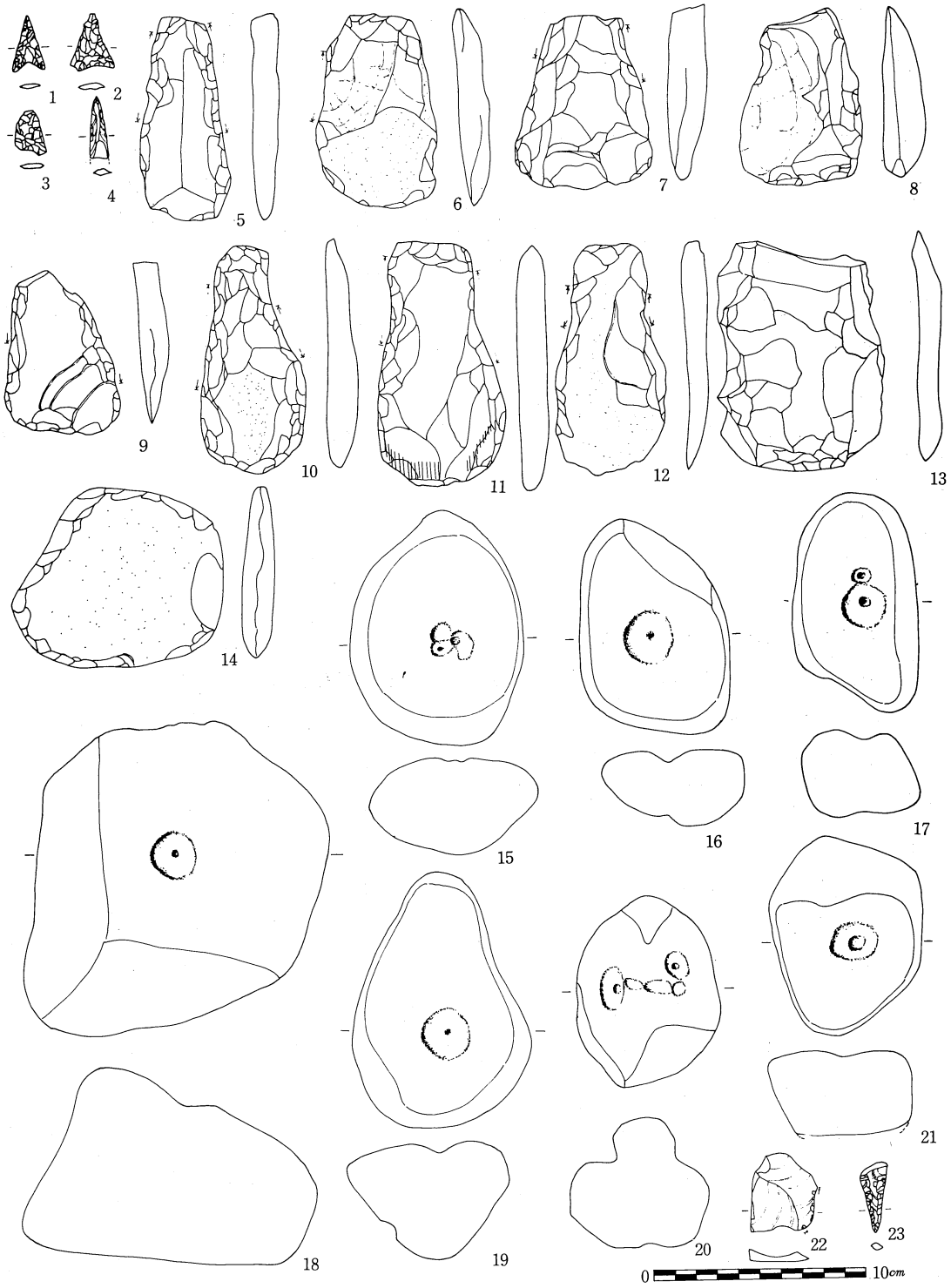
横刃型石器（16）は砂岩の原石から剝取した剝片の周辺に若干加工を加えただけのもので，表面には原石面を大きく残している。刃部は直線的で，鋭利である。凹石（17）は，楕円形の礫の表面に2孔，裏面に1孔の凹をもっている。表面の凹の1孔は擦りによった深いもので，他の1孔は打撃の集中による浅いものである。裏面は擦りによった浅い凹である。剝片石器（18）は縦長の剝片の両側縁に直線的な刃部をもち，刃は部厚い。礫器（19）は礫の両端に打撃を加え，粗く剝離しただけのもので，重量感がある。

5）第6号住居址（第58図1～23，59図－1～4）

6号址からは石鏃4，打製石斧9，横刃型石器1，凹石8，凹石・磨石兼用3，剝片石器1，石錐1の計27点であった。本遺跡における遺構内出土石器の中で最も多い出土であった。

石鏃（1）は精巧な作りの完形品で，底辺へのえぐりは大きい。（2・3）は底辺へのえぐりは浅く，左脚の先端を欠いている。（4）は細長い剝片の両側縁を加工して尖頭形に仕上げたもので，多少疑問はあるが石鏃としておきたい。

打製石斧は完形6，破損品3がある。完形品の（4）はほぼ短冊形を呈し，（5・7）は撥形，（9～11）は肩部に両側からえぐりをもった形態である。（6・9・11）は表面に原石面を残し，（4）は両



第 58 図　第 6 号住居址出土石器

側縁に，また（9～11）はえぐりの部分が磨耗している。刃部は（9～11）のようにえぐりのあるものに丸味のある刃をもつものが顕著で，（5・8）は直線的な刃をもっている。破損している3点はともに頭部を欠いている。横刃型石器（14）は原石から剝取した剝片の周囲を加工して刃部としている。余り鋭い刃部とはなっていない。

凹石（15）は表面にのみ不鮮明な打撃の集中による凹孔がある。（16）は表面には擦りによって生じた深い大きな一孔が，裏面にはやはり擦りによった小さな2孔がある。（17）は表裏とも大小1孔づつの凹がある。（18）は大きな凝灰岩の礫を用い，その表面に擦りによる凹を1孔有する。（19）は表裏面に大きな凹をもち，（20）は不整形の礫を用いた凹石で大きく深い凹孔が2孔と他に小さな不明瞭なものが3孔みられる。（21）は角形の礫で，表面にのみ大きく浅い凹が1孔ある。（2）は破損品で，表面にのみ2孔がある。凹石と磨石とを兼用しているものは3個あり，（1）は円形礫の中央に浅い2孔をもち，裏面は非常に良く研磨されツルツルしている。（3）は表裏，側面とも平担に研磨され，表裏面に1孔がある。（4）も表裏，側面とも平担に研磨されているが，凹は表面のみにあり，幾つかの凹が一連となっている。

剝片石器（22）は右辺に凸状の鋭利な刃部をもっている。石錐（23）は錐部3cmで，加工は精巧・鋭利である。

6）第7号住居址（第59図5～22）

7号址からは石鏃5，石匙1，打製石斧10，凹石1，凹石兼磨石1の計18点の出土があった。

石鏃（5～8）は完形品で，（6・7）は底辺へのえぐりが強く，（5）はやや弱い。ともに作りは精巧である。（8）は凸基状をなし，粗製品である。（9）は基部を欠いている。全て覆土中からの出土であるが，（5～7）は炉址北側の覆土中，（8・9）は北壁周辺で床より6cmほど浮いて出土。

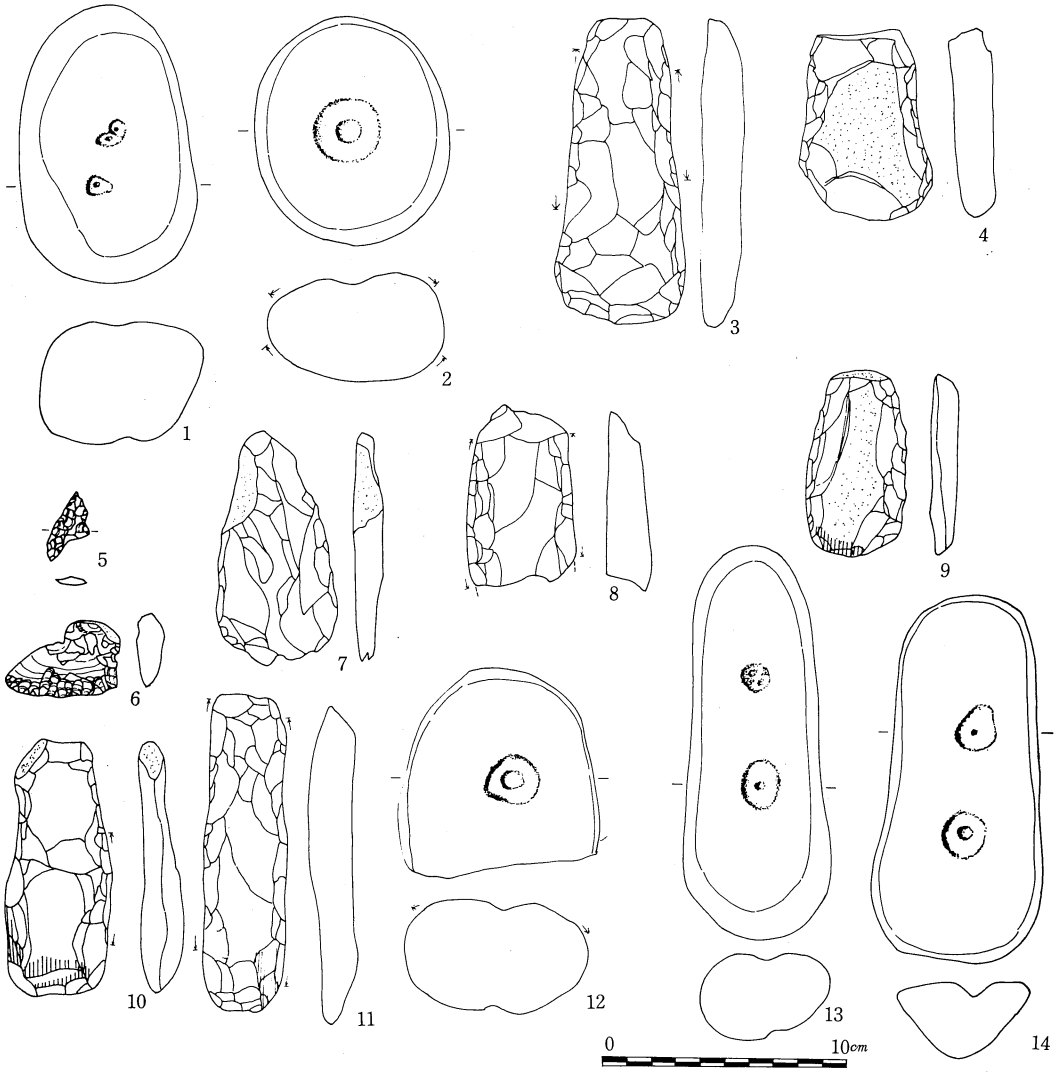
石匙（10）は刃部を欠いた横型で，作りは粗い。打製石斧は総数10点中，完形品3で残りの7点が破損品である。（11）はP_2の底から出土したもので，表面左辺に原石面を残し，両側縁に磨耗痕のある短冊形。（12）は頭部が尖頭状に尖がった細身のものである。（13）は西壁下の床面上より出土したもので，表面に原石面を大きく残し，肩部にわずかなくびれを有し，その部分に磨耗が認められる。破損品では（14～16）は頭部を欠き，（14）は直刃を，（15～16）は丸味をおびた刃を有する。（17～20）は刃部を欠き，（17・18）は肩部にゆるやかなえぐりをもち，（19・20）は凸状を呈している。（20）は部厚く重量感がある。

凹石（21）は楕円形の重い礫を用い，表面に3孔がある。P_3の南側の床面より6cmほど浮いて出土したものである。凹石・磨石の兼用品（22）は全面にわたって平担な研磨面をもち，表面にのみ小さな2孔がみられる。

7）第8号住居址（第60図1・2）

8号址からは床面から20～30cmほど上部の覆土中から出土した凹石および凹石兼磨石の2点が

第 59 図　第 6 号 7 号住居址出土石器



第60図　第8・9・10号住居址出土石器

出土したのみであった。

凹石（1）は表裏面に各々小さな2孔を有し，更に右側面にも2孔を有する。凹石兼磨石（2）は，円形礫を用い，表面に径2.6cmの凹みをもち，裏面には2.5×2.1cmの範囲に打撃が集中し明瞭な凹とはなっていないザラついた感じとなっている。表裏面ともやや彎曲した研磨面を有し，ツルツルに良く磨かれている。側面は打撃によるものかやや荒れた感じになっている。

8）第9号住居址（第60図5～14）

9号址からは石鏃1，石匙1，打製石斧5，凹石兼磨石1，凹石2の計10点が出土している。大形の住居址の割には出土量は少ないといえよう。

石鏃（5）は右脚を欠いている。P_2中より出土した。石匙（6）は横型で，刃部の調整は精巧で美しい。黒耀石製で中期からの出土は余り多くない。打製石斧の（7・8）は刃部を欠いている。作りは粗雑である。完形品の（9）はずんぐりした楕円形を呈し，（10・11）は肩部にくびれをもち，（11）は細長い短冊形をなしている。（9）は表面に原石面を残し，（10・11）は側縁に磨耗痕が認められる。また（9～11）の3点とも刃部に使用痕があり，（10）は特に顕著である。

凹石兼磨石（12）は半欠品であるが，表裏面に大きな深い各1孔を有し，表面に研磨痕が認められる。凹石（13）は細長い礫の表裏両面に各2孔づつの凹みを有する。（14）は炉址の南側の淵上より出土したもので，表面にのみ2孔を有する。1孔は深く，1孔は浅い。

9）第10号住居址（第60図3・4）

10号址からは打製石斧が2点出土したのみであった。（3）は床面中央より出土した完形品で，両側縁上半に磨耗痕を有する。均整のとれた形態をもっている。（4）は頭部を失なっている。覆土より出土。

10）第11号住居址（第61図1～13）

11号址からは石匙3，打製石器1，打製石斧5，磨製石斧3，凹石1の計13点が出土した。他の弥生期の住居址と比較して多くの出土があった。しかし，本址の床面には縄文の埋甕があったり，床面下に縄文期の小竪穴が検出されるなど縄文時代の混入が多いものと思われる。

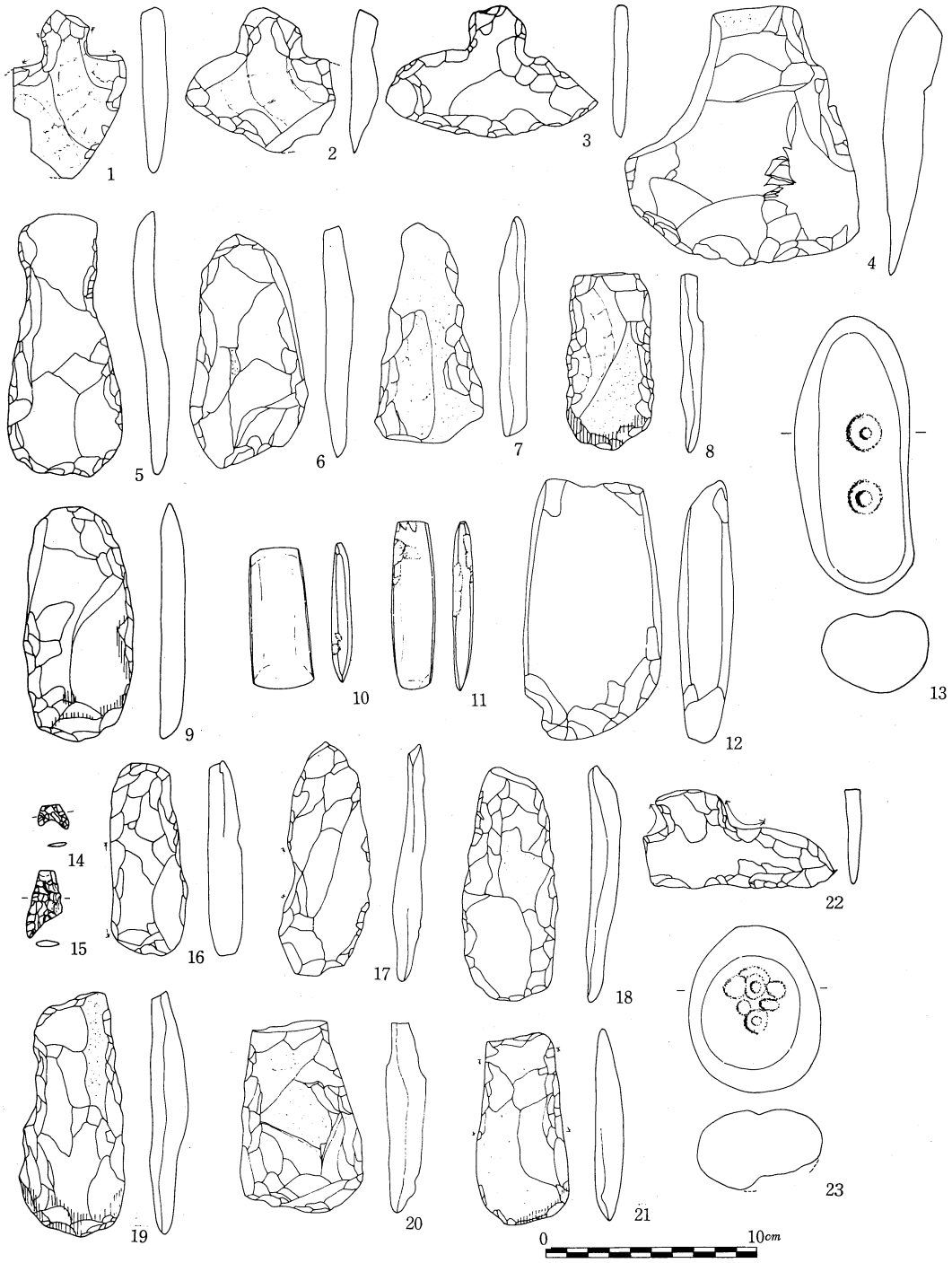
石匙（1）は西壁下の床面上，縄文の埋甕の南60cmから出土したもので，左辺を欠いた粗悪品である。（2・3）は床面より30cmほど上部より出土したもので，（2）は右辺を欠き，（3）は風化の激しい完形品である。ともに横型で作りは粗い。打製石器（4）は左辺の1部を欠くが，台形を呈した刃部の薄い石器で，打製石斧とは若干趣を異にしている。

打製石斧は出土した5点とも完形品で，（5・6）は北壁上より，他は覆土中より出土した。（5）は肩部にくびれを持ち，（6）は右上がりの刃部をもつ。（7・8）は原石面を残し，（9）は刃部および右側縁周辺に使用痕が認められる。5点とも製作は粗雑である。

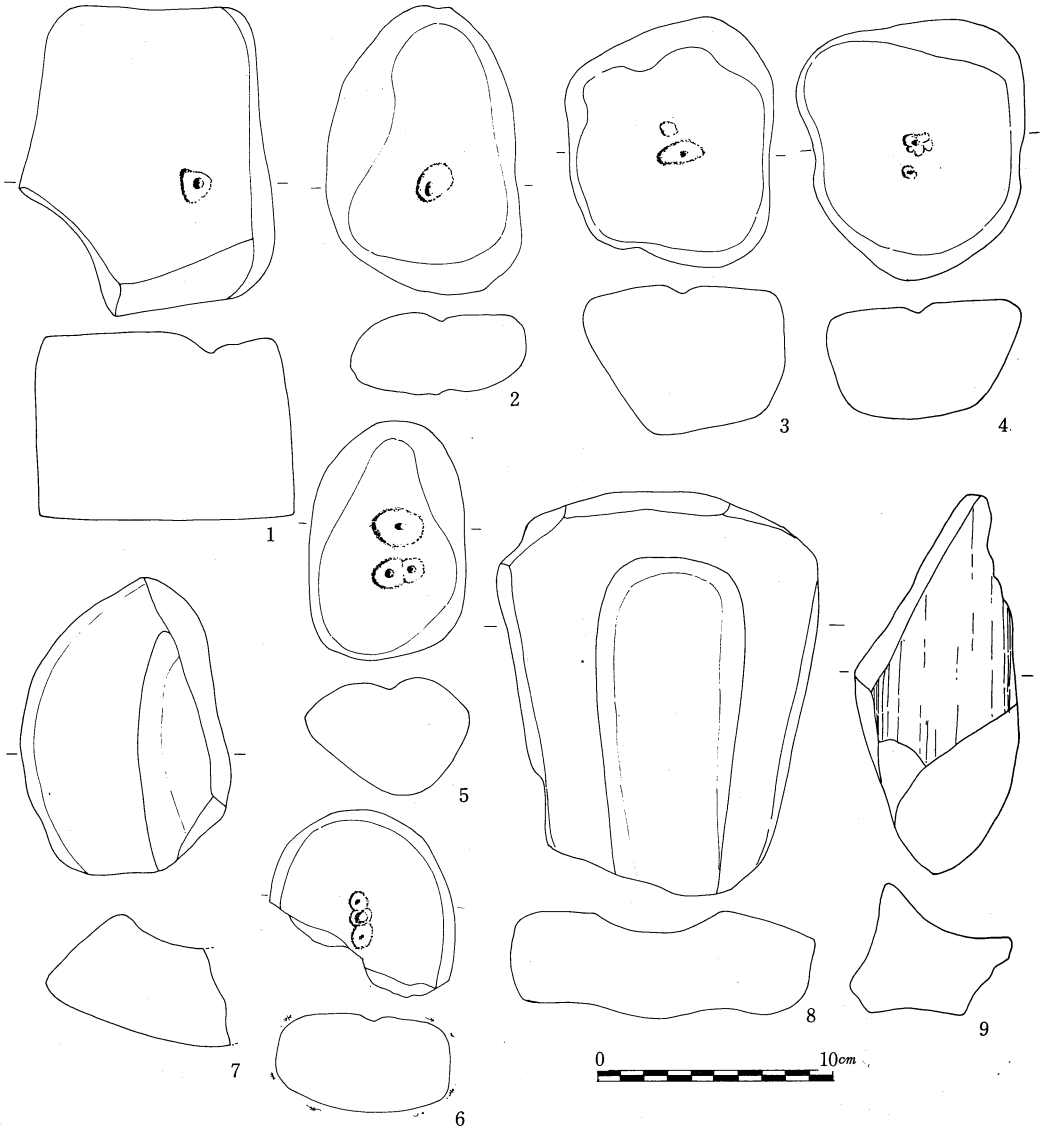
磨製石斧（10・11）は，ともに床面中央部の20cmほど上から出土した。両方とも小形の定角式で，製作は精巧丁寧で美しい。（12）も（10・11）とほぼ同じ場所から出土し，頭部・刃部に使用による欠損が目立つ。凹石（13）は細長い楕円礫の表面に浅い2孔を有する。

11）第12号住居址（第61図14～23，62図1～9）

12号址は西側の大半を20号址と重複しており，重複区域から出土した石器はどちらの住居址に



第61図　第11・12号住居址出土石器



第62図　第12号住居址出土石器

属するものか判然としない点も多い。ここでは炉址周辺および東壁・南壁寄りから出土したものを取り上げる。

石鏃2，打製石斧6，石匙1，凹石6，凹石兼磨石1，石皿2，砥石1の計19点の出土があった。

石鏃（14）はP_2の南床面上より出土し，頭部を欠く。（15）は頭部・右脚を欠き，全長3cmを越える大きなものである。打製石斧は5点が完形，1点が破損品である。（16・17・19）は側縁にくびれを有し，（18・19・21）は原石面を残している。（18・21）は刃部付近に使用痕が顕著である。

破損品の（20）は頭部を欠いている。石匙（22）は左辺の１部を欠く横型で，つまみの部分は磨耗が著しい。

凹石（23）は円形の表面に打撃の集中による７個所ほどの浅い凹がみられる。（１）は四角柱の１面に小さな凹をもっている。（２）は表裏面に各１孔がある。（３）は表面に２孔，裏に１孔を，（４）は表面にのみ小さな２孔がある。（５）は表に擦りによって生じた深い１孔と浅い２孔がある。凹石兼磨石（６）は半欠品であり，凹は表面に浅い連続した３孔がある。研磨は全面にわたり，表面および両側面は平担の，そして裏面はやや彎曲した磨面があり，その中央部はザラザラに荒れている。

石皿は２個あり，（７）は炉石として使用されていたもので，（８）はP_5の北床面上に伏せた状態で出土したものである。（７）は４分の１ほどの残欠品で，磨面は深い。（８）は扁平な安山岩を使用したもので，磨面は幅10～12 cm，長さ30 cmで，深さは1.6 cmである。砥石（９）は長さ30 cm，幅13 cmの角ばった礫を用い，砥面は一面のみで，長さ22 cm，幅12 cmで，凹は2 cmほどとなっている。

12）第13号住居址（第63図１～7）

13号址は建て直しの行なわれた住居址であるが一括して触れておきたい。

石鏃3，横刃型石器1，凹石2，打製石斧１の計７点が出土した。

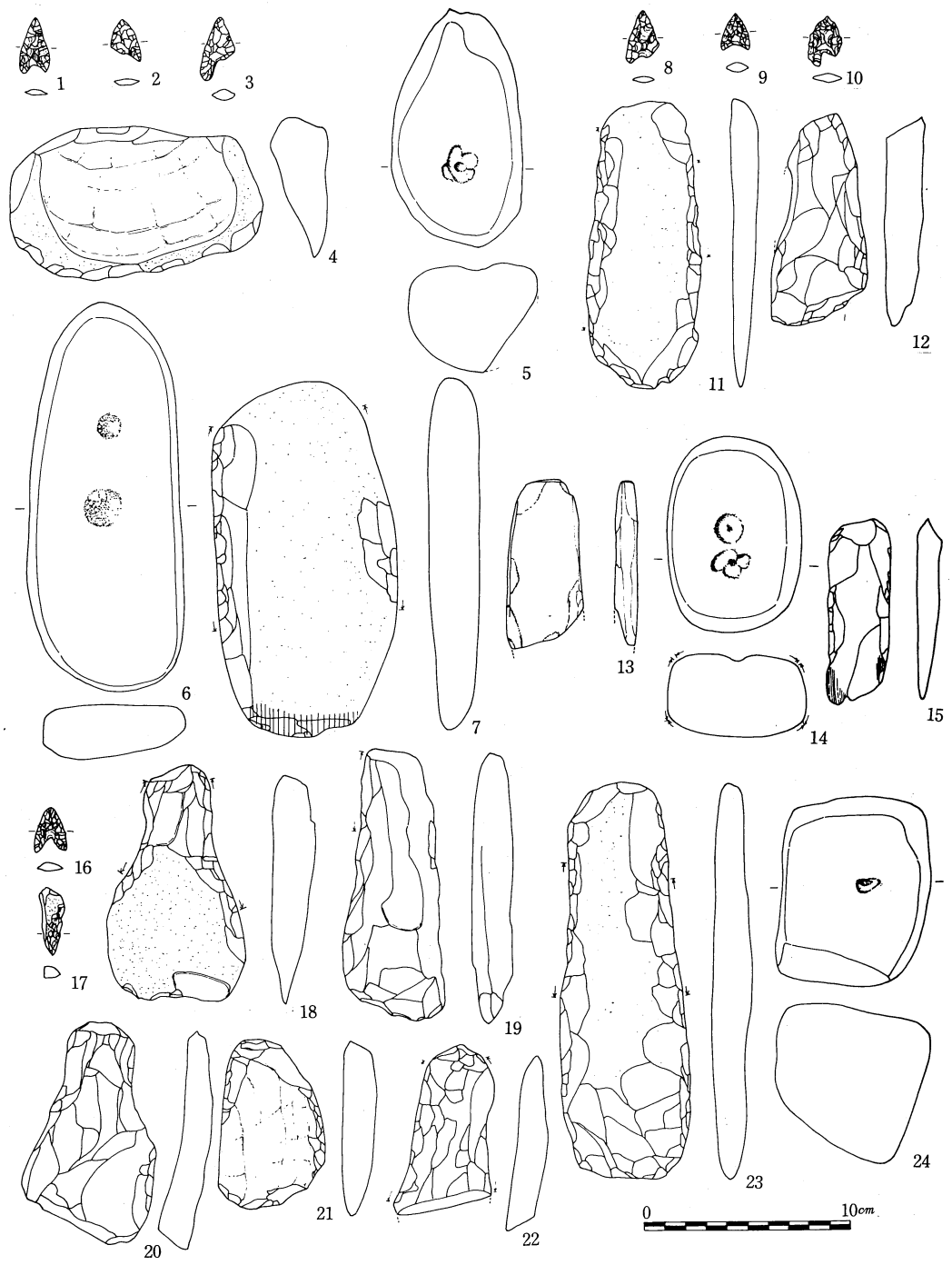
石鏃は３点中２点が欠損品であり，欠損品の２点とも埋甕内から出土し注目された。（１）は精巧な作りの完形品で，中央部の１部が表裏面とも研磨されている。（2・3）はそれぞれ片脚を失なっており，あるいは故意に破損したものを埋甕内に納めたとも推定されるが，出土状態は埋甕の底ではなく，ほぼ中位から出土している。

横刃型石器（４）は炉内より出土したもので，原石から打ち取った剝片の刃部のみに加工を加えた簡単なものである。頭部は部厚いが，刃部は鋭利である。凹石（５）は西側炉の南端上より出土し，表面に打撃による１孔がある。風化が激しくボロボロしている。（６）は埋甕北側の床面上より出土し，細長い扁平な礫の表面に２個所のまだ凹にまで至っていない打撃の集中部分が認められる。打製石斧（７）は扁平な砂岩の両縁および刃部に簡単な加工を施しただけのもので，両縁は磨耗が著しく，刃部には使用痕が観察される。

13）第14号住居址（第63図８～12）

14号址からは石鏃3，打製石斧２が出土したが全て覆土中からの出土であった。

石鏃（8・10）は右脚を欠き，底辺へのえぐりは深く，ともに作りは粗い。（９）は底辺へのえぐりは浅く完形品。打製石斧（11）は表面に原石面を大きく残し，両側縁に磨耗痕を残す。刃部は丸味をおびている。（12）は左傾した刃部を持ち，左辺の１部を欠いている。



第63図　第13・14・15・16号住居址出土石器

14）第15号住居址（第63図13・14）

15号址からは磨製石斧1，凹石兼磨石1の2点の石器が得られたのみであった。

磨製石斧（13）は刃部を欠いた定角式で，製作は良いが，両辺の破損が著しい。凹石兼磨石(14)は全面にわたって平担に研磨されている。凹は表面にのみ2孔存するが，裏面にもわずかな凹の痕跡が認められる。裏面にもおそらく凹が存したのであろうが，研磨により痕跡的にまで擦り減ってしまったものであろう。

15）第16号住居址（第63図15～24）

16号址は完掘されなかった住居址であるが，石鏃1，石錐1，打製石斧6，磨製石斧1，凹石1の計10点の出土があった。

石鏃（16）は床面中央部の覆土中より出土し，丁寧な作りの完形品。石錐（17）は原石面を残し，部厚い錐部をもつ。打製石斧は6点の内完形品は4点で破損品は2点である。(18）は刃部に至って開く撥形を呈し，両縁上半には磨耗が残されている。(19）は右辺に原石面を残した部厚い粗製品。(21）はずんぐりした楕円形で，第一次剝離面を大きく残している。(23）は周溝中より出土し，両縁上半に磨耗痕を残した均整のとれた石斧である。磨製石斧（15）は刃部周辺に研磨痕がみられる。磨製石斧の製作途中か，あるいは磨製石斧の再利用のために打ち欠いたものかと思われる。凹石（24）は表面にのみ小さな浅い凹1孔を有する。

16）第17号住居址（第64図4・5）

17号址は4号址と重複し，しかも東側部分が未調査のため本址に属する石器は石匙1，打製石斧1の2点のみであった。

石匙（4）は横型で比較的薄い剝片を使用している。打製石斧（5）は頭部付近に原石面を残した短冊形の完形品。

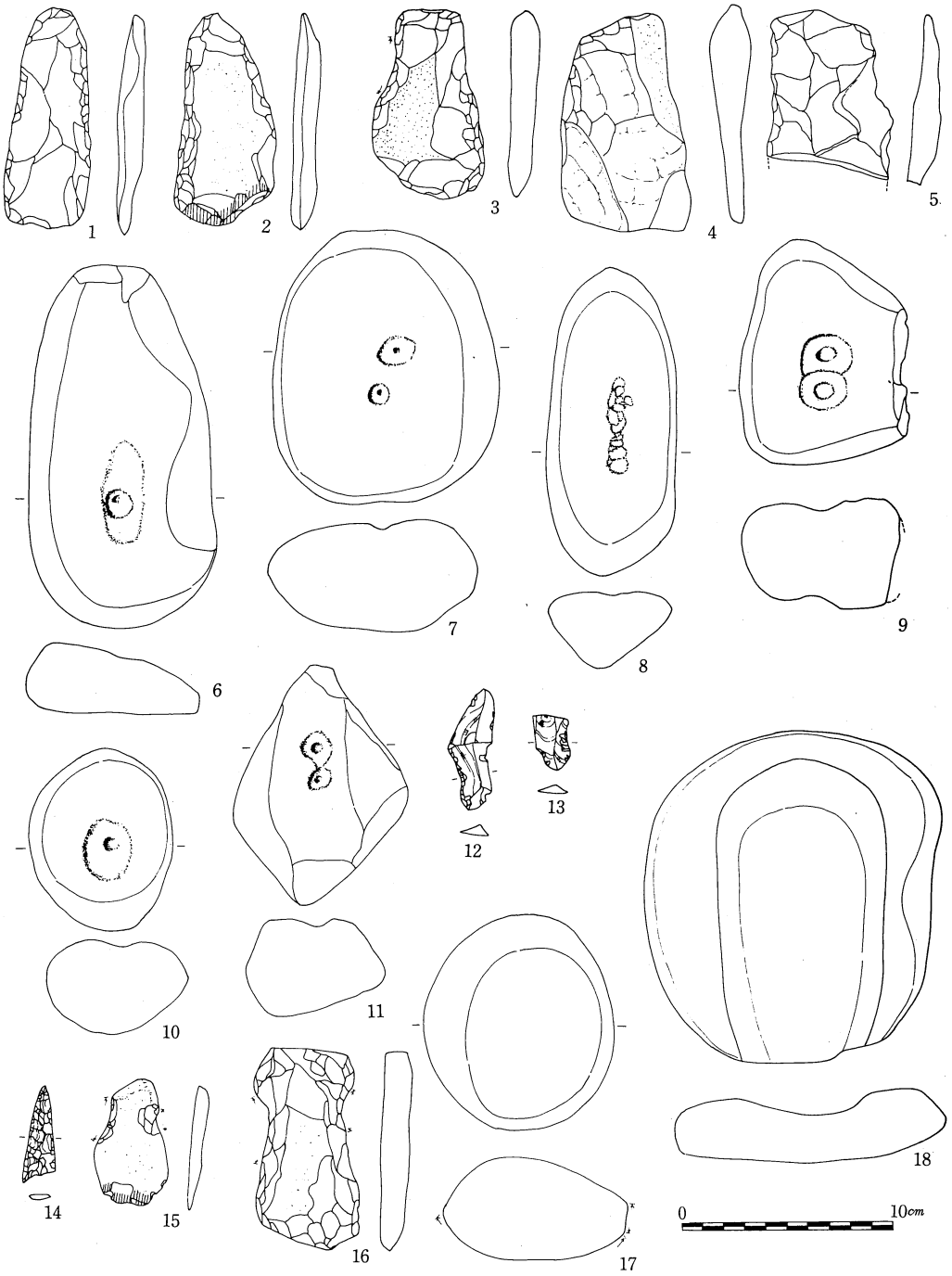
17）第18号住居址（第64図6）

18号址はその大部分が17号址と重複しているため，打製石斧が1点出土したのみであった。(6）の打製石斧は刃部付近に2次加工を施しただけの粗製品である。

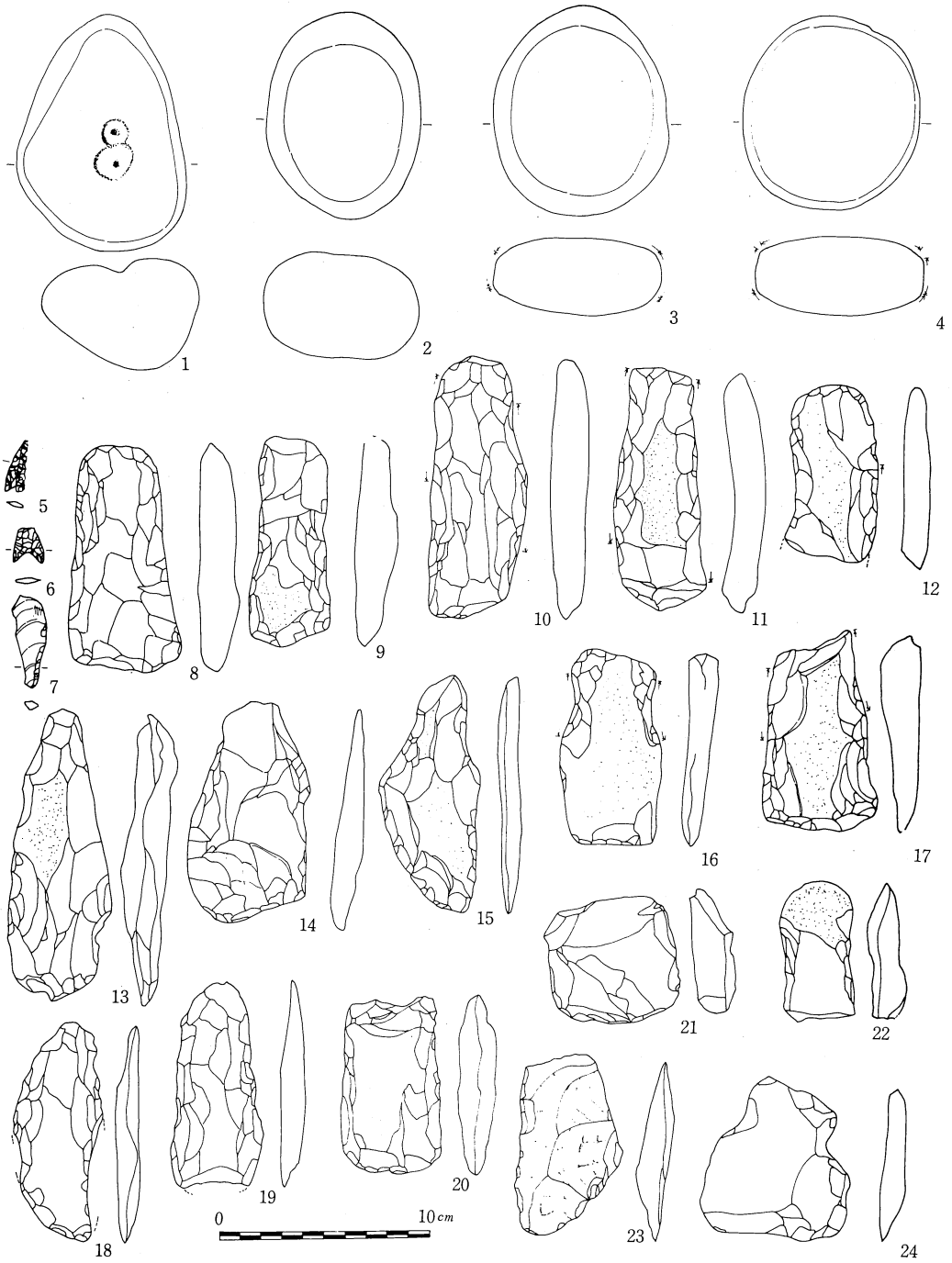
18）第19号住居址（第64図1～13）

19号址はその北側を5号址と重複しているため，5号址の範囲外から出土したものを本址の石器として取り上げる。

本址からは打製石斧5，凹石6，剝片石器2の計13点が出土した。5点出土した打製石斧は3点が完形品，2点が破損品である。(1）は細身で，(2・3）は原石面を残した撥形で，(2）は刃部に使用痕が認められ，(3）の左縁に磨耗痕が残されている。(4・5）は刃部を欠損している。凹石(6）は薄形の縦長の礫の表裏に非常に浅い1孔がある。(7）は表面にのみ大小各1孔の凹がある。(8）



第 64 図　第 19・20 号住居址出土石器



第 65 図　第 20 号住居址・遺構外出土石器

は表面に5cmの長さにわたって打撃痕がみられ，浅い凹となっている。(9) は表に2孔，裏に1孔があり，大きな凹みである。(10) は表面にのみ大きな浅い1孔があり，(11) は表面に2孔がある。剥片石器 (12) は左辺に5cmの刃部があり，(13) は両縁に1cm前後の刃がある。

19) 第20号住居址 (第64図14～18，65図1～4)

20号址はその大半を12号址と重複しており，20号址に伴うと思われるものは石鏃1，石匙1，打製石斧1，石皿1，磨石4，凹石1の計9点である。

石鏃 (14) は北壁上より出土した全長5cmの大形品で，製作は丁寧である。石匙 (15) は，つまみ部分にえぐりを作っただけの簡単なもので，刃部には磨耗が著しい。

打製石斧 (16) は肩部にくびれを持ち，その部分が磨耗している。石皿 (18) と磨石 (17) は遺構の項でも述べたが西壁下に並べて置かれていたもので，セットとして用いられたものと思われる。石皿 (18) は扁平な楕円形の安山岩を用い，磨面は幅15cm，長さ28cmを計る。磨面はゆるやかな凹状を呈し，2cmほど凹んでいる。(17) の磨石は，右辺と裏面が研磨されており，右辺は幅1.5cmの平担磨面を呈し，裏面は全面にわたって彎曲した研磨面をもっている。この磨石のほかに (2～4) の3点の磨石が出土したが，ともに覆土中からの出土で，(18) の石皿とはセットとはならない。(2) は表面に，(3・4) は表裏面および両側面に磨面があり，平担に研磨されている。凹石 (1) は表面に2孔がある。

20) 遺構外出土石器 (第65図5～24，66図1～16)

遺構に属さないもので，石鏃2，石錐1，打製石斧22，石匙1，磨製石斧2，凹石5，凹石兼磨石3の計36点がある。

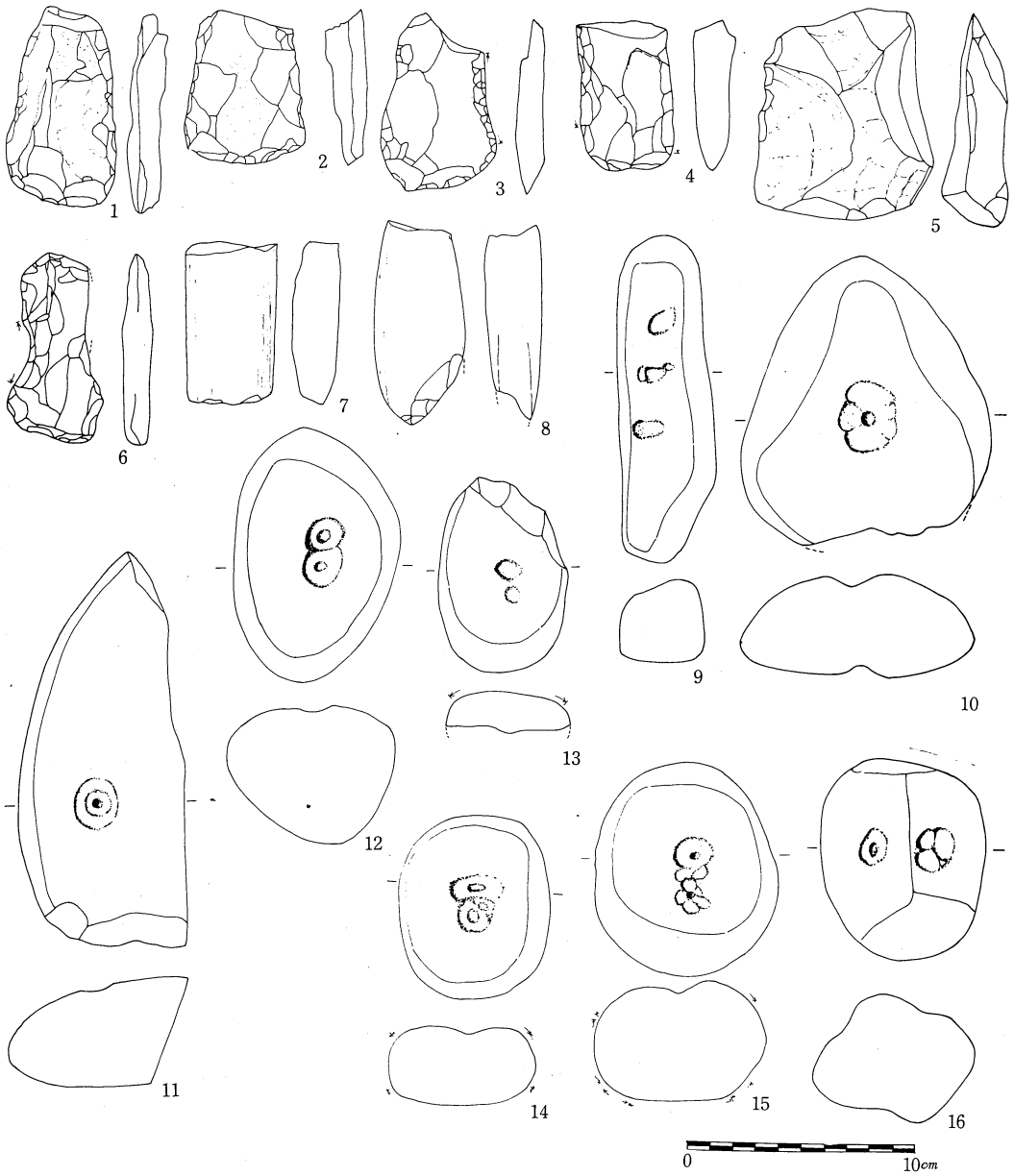
石鏃 (5) は底辺へのえぐりの少い完形品。(6) はえぐりの深い頭部欠損品。石錐 (7) は右辺に再加工を施したのみの粗製品。打製石斧22点中，完形品9，破損品13となっている。完形品中 (8・9～11) が短冊形で，(10・11) は両縁に磨耗がみられる。(13・14) は撥形で，(15・16) は肩部にえぐりをもっている。欠損品では，刃部を欠くものは (12・19・22)，頭部を欠くもの (17・20・21・2・3・4) があり，他に側面を欠く (18・6) などがある。

石匙 (24) は肩部にくびれをもち，2次加工も余り行われない粗製品。磨製石斧は (7・8) とも刃・頭部を欠いている。製作は丁寧である。凹石は (10・12) のように明瞭な凹を有するものと，(9・11・13) のように余り明らかな凹になっていないものとがある。凹石兼磨石は全面にわたって研磨されているものが多いが，(15) は裏面中央部はややザラザラと荒れた感じになっている。

(小林康男)

第3節　土　製　品 (第67図)

今回の発掘調査によって出土した土製品は土偶8，小形土器2があり，この他に調査以前に農作

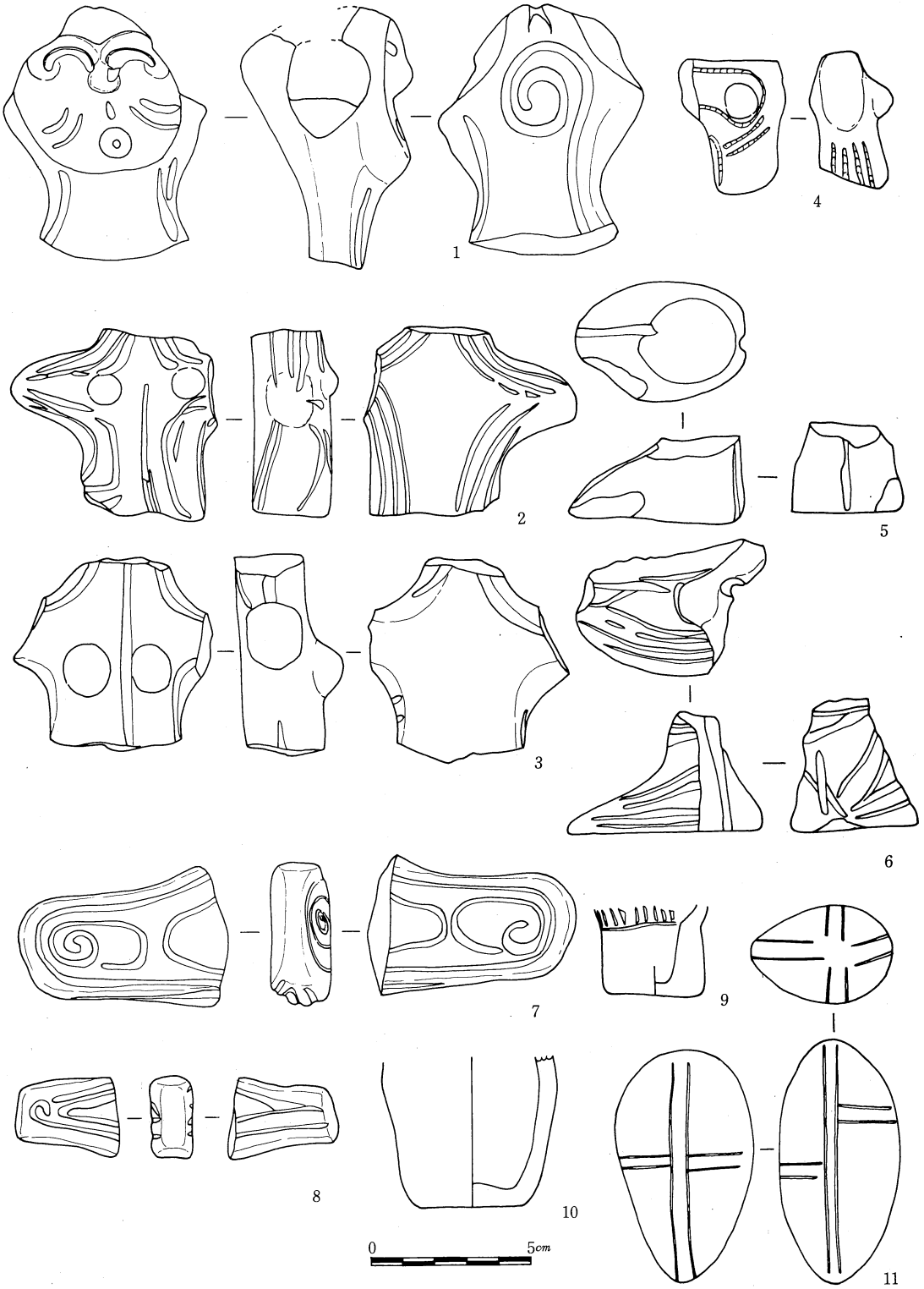


第66図　遺構外出土石器

業によって発見された土鈴がある。

1）土　　偶

土偶は第4号住居址覆土1，第12号住居址覆土3，第16号住居址床面1，その他3の計8点が出



第67図 土 製 品

土した。

1は第12号住居址から出土した土偶の頭部である。長さ8cm，幅6.3cmで顔面は直径5.3cmの円形を呈する。顔面はやや上向きかげんに作られ，眉は粘土粃を貼りつけた隆帯で孤状に表現され，その下に沈線によるやはり孤状の目が付されている。鼻は粘土を丸く貼りつけて形作られ，眉と接続している。口は円形刺突により示されている。両頬には2本の沈線が引かれ，また首には2本づつの沈線文が描かれている。裏面には沈線による渦巻文がある。なお，この土偶の頭部は橋状を呈し，中は中空となっている。首の部分には径3mmの貫通孔が開けられている。黄褐色で焼成は良い。

2は第7号住居址の南側（F4グリット）より出土した土偶の胴部で，現存長6.1cm。正面には縦の沈線による中心線を中心に両側に径1.1cmの乳房が表現され，肩から手の先端にかけて3本の沈線が引かれ，胴部にも沈線によるコの字形が描かれている。背面にも正面に対比して肩部から手先にかけて3本の，そして胴部にも3本の沈線による文様がみられる。褐色で胎土・焼成も良好。

3は第16号住居址東側（X41グリット）から出土。胴部の破片で，現存長6.3cm。正面には中央に縦の沈線が一本引かれ，その両側に乳房が高く表現されている。肩部および右脇に孤状の沈線がある。背面は肩部および両脇に沈線による簡単な文様が施されている。暗褐色で，小砂利を含む。焼きは良い。

4は第16号住居址の西側床面上から出土した胴部破片で，右半分を失なっている。乳房を中心として，それを巡るように脇まで連続刺突文が施文されている。乳房の下から脇にかけて2本の，そして側面には4本の連続刺突文がみられる。背面には文様はない。暗褐色で砂粒を多く含み，焼成は悪い。

5は長さ5.6，幅3.7，高さ2.8cmの土偶の足部で，第12号住居址の覆土中から出土した。足の甲の部分および踵に深い沈線が一本引かれている。黒褐色で，小砂利，砂粒が含まれ焼成は悪い。形態から右足であろうか。

6は第4号住居址から出土した足部で，踵の一部を欠いている。足の甲から踵にかけて並行沈線を充たし，踝には横位の沈線が描かれている。踵に貫通孔がある。黒褐色で焼きは非常に良い。現存長6.4，高さ4.0cm。

7は第12号住居址出土の手部で，長さ6.6cm。表裏面ともに外周に沈線を一条巡らし，その内に渦巻文を描いている。下側辺には2条の沈線がみられる。赤褐色で，堅くきれいな作りである。

8は第7号住居址南側から出土した手部で，沈線による簡単な文様が描かれている。黒褐色で，胎土良好，焼成も良い。現存長3.6cm。

2）小形土器

9は第6号住居址覆土から出土したもので，口縁部を欠いている。底部径3.2，現存高2.8cm。口辺部になりわずかに外方に開き，その屈折する部分に横に一条の沈線が巡り，それより上には刺突

文が施されている。内面は人指し指が入る位の狭さで，整形は拙い。黒褐色で，焼成は良い。

10は第8号住居址覆土中から出土したもので，口縁部を欠いている。底部径3.5，現存高4.6cm。口辺部でやや内彎気味となる。無文であるが表面には整形時の指圧痕が顕著に残り，内面にはヘラ削りの痕跡が認められる。薄手で赤褐色を呈する。おそらく弥生期のものであろう。

3）土　　鈴

この土鈴は昭和44年1月に地元の中島義信氏が畑を耕作中に遇然発見したもので，出土地点は今回の調査地点よりおよそ100mほど北の地点である。

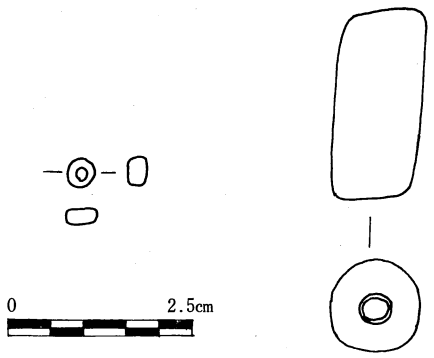
長さ7.6，幅4.6，厚さ3.6cmのやや扁平な卵形を呈する。表裏面には2本の竹管状線文が両端の一部を除いて一周し，これに交叉するようにやはり2本の沈線文が横位に描かれている。中には数個の土(石)玉が入っているらしく，振るとジャラジャラという濁った音がする。胎土は小砂利まじりで，色は赤褐色で焼成は良好である。縄文中期後半に属するものであろう。

（小林康男）

第4節　その他の出土遺物

1）ガラス小玉（第68図－1）

第10号住居址の北壁下床面上と推定される場所から出土したもので，ローム層上から発見された。特異な出土状態は示していない。大きさは直径3mmの円形で，厚さは2mm，中央部に1.5mmの孔があけられている。周縁は丸味をおび，表裏面は平滑である。色調はコバルトブルーを呈している。第10号住居址は弥生後期に属するものであり，このガラス玉も同時期に属するものと考えられる。弥生期のガラス玉に関しては既に桐原健氏により「信濃における弥生時代玉のありかたについて」(信濃25－4）で県内外の資料が収集・分析されており，その中で，本遺跡から近距離に位



第68図　ガラス小玉・有孔石製品

置する片丘中挾から同時期のものが多量に出土したことを報じているが，本遺跡から出土したガラス玉はたった一個という数量ではあったが今後の弥生期のガラス玉を考えるうえで貴重な資料を提供したといえよう。

2）有孔石製品（第68図－2）

第16号住居址の床面上から出土したもので直径1.8cm，長さ4.6cmの円筒状を呈し，中心部に直径8mmの孔が貫通している。表面は平滑ではなく起伏が激しく研磨したような痕跡は観察できなかった。周囲を敲打して形を整えたものかもしれない。両端は切り落としたようになっているが，自然か人為的かどちらとも判断しかねる。表面は風化しており非常に脆い。石質は凝灰岩。重さは8g。装飾品かあるいは形態的にみて石錐かとも考えられるがどちらとも断定できない。

（小林康男）

第5節　炭　化　物

今回の調査では第1号・6号住居址の2個所から炭化物が検出された。

1）第6号住居址（図版9）

縄文期に属する第6号住居址からはその炉址内の中位から炭化した実が出土した。ナラの実の半截品で，長さ1.9，幅1.1cmの大きさ，良く炭化している。

2）第1号住居址（図版9）

図版9に示した炭化種子は弥生後期の第1号住居址から出土した。遺構の項で詳述したように大形甕形土器の中から約5*l*ほどまとまって発見された。炭化種子は長さ3mm前後の丸味をおび，光沢をもったものである。この炭化種子を信州大学医学部第2解剖学教室の西沢寿晃先生を介して信州大学農学部の氏原暉男助教授に鑑定を依頼したところ「栽培植物と限定した場合，胚や表面の形態からイネ・ムギ・マメ・ソバ・ヒエ・アワの類ではない。小殻粒に入り，キビ（コーリャンの仲間，イナキビ等がある）に近い種類といえる。（ただし当時キビ類の栽培が存存したかどうかは問題であるが）又，麻の実の可能性もある。いずれも完全炭化物で同定が難かしく，今後一層精査したい」という電話連絡による回答があった。

弥生時代後期における食料を，また栽培植物を考えるうえで貴重な資料となろう。なお氏原・西沢の両先生には御多忙中のところをご指導いただいた。記して感謝の意を表したい。

（小林康男）

第1表　地点別出土石器一覧表

	石鏃	石匙	打製石斧	石皿	凹石	磨石	凹石・磨石	横刃型石器	磨製石斧	石錐	剥片石器	打製石器	礫器	砥石	計
1　号　住			2												2
2　号　住			2		1										3
3　号　住			6												6
4　号　住	1	1	1												3
5　号　住	2	1	6		1			1			1		1		13
6　号　住	4		9		7		4	1		1	1				27
7　号　住	5	1	10		1		1								18
8　号　住					2										2
9　号　住	1	1	5		2		1								10
10　号　住			2												2
11　号　住		3	5		1				3			5			17
12　号　住	2	1	6	2	6		1							1	19
13　号　住	3		1		2			1							7
14　号　住	3		2												5
15　号　住							1		1						2
16　号　住	2		6		1				1						10
17　号　住		1	1												2
18　号　住			1												1
19　号　住			5		6						2				13
20　号　住	1	1	1	1	1	4									9
遺　構　外	2	1	22		5		3		2	1					36
合　計	26	11	93	3	36	4	11	3	7	2	4	5	1	1	207

第2表　出土石器一覧表

（単位cm.g）

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
56	1	2号住	打製石斧	11.5	3.6	1.4	80	硬砂岩	
	2	〃	〃	10.6	4.4	1.0	70	〃	
	3	〃	凹石	8.6	6.6	3.7	250	安山岩	
	4	3号住	打製石斧	(10.3)	4.8	1.6	80	頁岩	
	5	〃	〃	10.0	6.2	1.7	65	〃	
	6	〃	〃	10.7	5.9	1.6	91	硬砂岩	
	7	〃	〃	24.2	6.0	2.2		〃	
	8	〃	〃	(7.6)	5.2	1.4	60	頁岩	
	9	〃	〃	(7.7)	7.5	2.2	131	〃	
57	1	4号住	石鏃	2.4	1.8	0.4		黒曜石	
	2	〃	石匙	5.6	7.0	0.8	27	砂岩	
	3	〃	打製石斧	9.5	4.6	1.2	67	頁岩	
57	7	5号住	石鏃	2.7	1.4	0.2		黒曜石	DE−6ベルト
	8	〃	〃	2.4	1.6	0.4		〃	床直
	9	〃	石匙	(3.0)	3.2	0.4	5	チャート	E−6
	10	〃	打製石斧	10.3	4.4	1.5	72	硬砂岩	DE−5ベルト
	11	〃	〃	(10.0)	5.3	1.8	100	頁岩	床直
	12	〃	〃	8.0	3.4	1.4	41	硬砂岩	F−6
	13	〃	〃	8.2	4.2	0.6	23	〃	E−6
	14	〃	〃	(8.5)	4.4	1.4	80	〃	D−6
	15	〃	〃	(6.5)	4.6	0.8	29	〃	F−5
	16	〃	横刃型石器	7.4	10.4	3.2	210	砂岩	EF−5ベルト
	17	〃	凹石	11.2	6.4	3.4	362	角礫凝灰岩	
58	18	〃	剝片石器	4.6	1.2	0.6	4	黒曜石	D56ベルト
	19	〃	礫器	12.2	8.7	6.6	975	砂岩	
	1	6号住	石鏃	2.6	1.6	0.2		黒曜石	C−3
	2	〃	〃	(2.6)	2.0	1.3		〃	床直
	3	〃	〃	(2.1)	1.4	0.2		〃	D−3
	4	〃	〃	(2.9)	0.8	0.3		〃	D−2壁上
	5	〃	打製石斧	9.5	4.0	1.4	51	硬砂岩	床直
	6	〃	〃	9.2	5.6	1.4	90	〃	D−2
	7	〃	〃	(8.2)	6.4	2.8	103	〃	C23ベルト
	8	〃	〃	(8.2)	5.6	2.2	82	〃	D−2
	9	〃	〃	7.8	5.2	1.4	64	砂岩	CD−2ベルト
	10	〃	〃	10.7	4.8	1.4	85	硬砂岩	D−3
	11	〃	〃	11.4	6.0	1.4	108	砂岩	CD−3ベルト
	12	〃	〃	10.7	5.0	1.2	81	硬砂岩	C−3
	13	〃	〃	(10.7)	7.4	1.0	95	頁岩	
	14	〃	横刃型石器	8.5	9.8	1.5	139	砂岩	D−2
	15	〃	凹石	11.0	8.1	4.3	541	安山岩	CD−4ベルト
	16	〃	〃	10.0	7.1	3.6	430	凝灰岩	D−3

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
58	17	6号住	凹石	10.2	6.1	4.2		凝灰岩	D−2
	18	〃	〃	14.2	13.7	8.8		〃	
	19	〃	〃	12.0	8.4	5.4		安山岩	
	20	〃	〃	(9.0)	6.8	6.6		角礫凝灰岩	D−3
	21	〃	〃	9.4	6.8	(3.9)	51	安山岩	
59	1	〃	凹・磨石	7.0	6.8	3.4	90	〃	D−2
	2	〃	〃	(8.1)	8.5	(3.6)	103	凝灰岩	D−2
	3	〃	〃	(7.1)	8.4	4.5	82	安山岩	CD−2ベルト
	4	〃	〃	(8.6)	7.0	3.2	64	〃	
58	22	〃	剝片石器	3.6	2.9	0.4	85	黒曜石	
	23	〃	石錐	3.1	1.1	0.3	108	〃	
59	5	7号住	石鏃	2.0	2.0	0.4	81	〃	F−2
	6	〃	〃	1.9	1.9	0.3	95	〃	〃
	7	〃	〃	2.2	2.2	0.4	139	チャート	〃
	8	〃	〃	1.9	1.9	0.4	541	黒曜石	G−1
	9	〃	〃	(2.4)	(2.4)	0.6	430	〃	
	10	〃	石匙	(3.3)	(3.3)	0.9	319	頁岩	F−3
	11	〃	打製石斧	9.1	9.1	2.2	1898	砂岩	
	12	〃	〃	10.2	10.2	1.5	573	硬砂岩	G−1
	13	〃	〃	10.3	10.3	1.0	420	頁岩	G−1
	14	〃	〃	(4.0)	(4.0)	0.6	330	〃	F−3
	15	〃	〃	(7.6)	(7.6)	1.0	210	〃	F−3
	16	〃	〃	(7.0)	(7.0)	1.3	300	砂岩	F−2
	17	〃	〃	(5.2)	(5.2)	1.2	390	硬砂岩	F−3
	18	〃	〃	(7.7)	(7.7)	1.4	272	〃	F−2
	19	〃	〃	(10.0)	(10.0)	1.4	11	頁岩	F−3
	20	〃	〃	(12.2)	(12.2)	2.1	3	安山岩	F−2
	21	〃	凹石	13.5	13.5	6.9		〃	〃
	22	〃	凹・磨石	8.9	8.9	5.2		〃	
60	1	8号住	凹石	11.4	11.4	5.0		〃	H−4
	2	〃	〃	9.7	9.7	4.4		〃	H−3
60	5	9号住	石鏃	2.9	2.9	0.3		黒曜石	E−8
	6	〃	石匙	2.9	3.1	1.1	11	〃	F−9
	7	〃	打製石斧	2.9	9.5	1.2	82	硬砂岩	E−9
	8	〃	〃	3.1	(7.4)	1.9	69	〃	〃
	9	〃	〃	9.5	7.6	1.0	60	〃	D−9
	10	〃	〃	(7.4)	10.5	1.8	20	砂岩	E910ベルト
	11	〃	〃	7.6	3.5	1.8	40	硬砂岩	E910ベルト
	12	〃	凹・磨石	10.5	8.1	4.5	58	安山岩	D−9
	13	〃	凹石	16.1	6.0	3.5	30	砂岩	
	14	〃	〃	15.0	6.8	3.1	67	凝灰岩	床直

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
60	3	10号住	打製石斧	12.6	5.2	1.6	140	頁岩	E−11床直
	4	〃	〃	(7.7)	5.2	1.5	73	〃	〃
61	1	11号住	石匙	7.9	(5.4)	1.1	40	泥岩	西壁下床面
	2	〃	〃	6.5	(7.0)	1.1	52	安山岩	G−7
	3	〃	〃	6.1	9.8	0.6	50	頁岩	〃
	4	〃	打製石器	12.1	11.0	2.0	293	硬砂岩	
	5	〃	打製石斧	12.0	5.2	1.1	87	〃	北壁上
	6	〃	〃	11.1	5.4	1.3	90	頁岩	〃
	7	〃	〃	10.4	5.1	1.2	71	硬砂岩	H−9
	8	〃	〃	8.9	4.1	1.0	58	〃	G−7
	9	〃	〃	11.0	5.2	1.1	86	砂岩	H−8
	10	〃	磨製石斧	6.7	2.8	0.9	35	蛇紋岩	〃
	11	〃	〃	7.9	2.1	0.9	26	〃	〃
	12	〃	〃	(12.2)	6.6	2.6	362	安山岩	H−7
	13	〃	凹石	13.1	5.6	3.9	401	砂岩	
61	14	12号住	石鏃	(0.9)	1.4	0.2		黒曜石	床直
	15	〃	〃	(3.1)	0.6	0.2		〃	E−16
	16	〃	打製石斧	9.1	3.6	1.6	69	硬砂岩	東壁上
	17	〃	〃	11.0	4.0	1.4	60	〃	東壁上下
	18	〃	〃	11.0	4.5	1.4	70	砂岩	
	19	〃	〃	11.4	4.9	1.8	98	泥岩	E−15
	20	〃	〃	(9.1)	5.6	1.9	109	硬砂岩	
	21	〃	〃	8.9	4.2	1.1	62	〃	東壁下
	22	〃	石匙	4.7	8.5	0.6	41	〃	E−15
	23	〃	凹石	7.9	6.2	(3.8)	230	角礫凝灰岩	東壁上
62	1	〃	〃	13.0	10.6	7.9	1841	凝灰岩	床直上
	2	〃	〃	12.0	7.4	3.5	485	角礫凝灰岩	E−15
	3	〃	〃	10.6	8.0	6.4	782	安山岩	炉南床直
	4	〃	〃	11.2	8.4	4.6	645	砂岩	〃
	5	〃	〃	10.2	6.8	5.0	399	角礫凝灰岩	
	6	〃	凹・磨石	(7.7)	7.1	4.2	350	安山岩	
	7	〃	石皿	(24.8)	17.6	8.0	4850	〃	炉石
	8	〃	〃	33.0	25.6	8.2	12850	〃	P5北床面
	9	〃	砥石	32.0	13.6	10.6	3600	砂岩	
63	1	13号住	石鏃	2.1	1.4	0.2		黒曜石	
	2	〃	〃	(1.4)	(1.3)	0.3		〃	埋甕円
	3	〃	〃	(3.0)	(1.4)	0.5		〃	〃
	4	〃	横刃型石器	7.2	12.0	2.6	200	粗粒砂岩	炉内
	5	〃	凹石	11.2	6.2	(5.1)	403	凝灰岩	〃
	6	〃	〃	17.9	6.6	2.6	568	砂岩	埋甕北床面
	7	〃	打製石斧	16.9	8.4	2.4	600	〃	

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
63	8	14号住	石鏃	2.5	(1.4)	0.3		黒曜石	
	9	〃	〃	1.6	1.4	0.4		〃	
	10	〃	〃	(2.1)	(1.4)	(0.4)		〃	
	11	〃	打製石斧	13.8	5.3	1.1	110	頁岩	
	12	〃	〃	9.8	4.4	1.7	101	〃	
63	13	15号住	磨製石斧	8.0	3.7	1.1	50	頁岩	
	14	〃	凹・磨石	9.4	6.6	3.8	420	安山岩	
	15	16号住	磨製石斧	9.0	2.9	1.1	41	頁岩	埋甕東床面
	16	〃	石鏃	2.1	1.4	0.4		黒曜石	
	17	〃	〃	3.1	1.0	0.6	3	〃	
	18	〃	打製石斧	11.0	6.5	1.9	119	硬砂岩	
	19	〃	〃	13.0	4.4	1.4	141	〃	
	20	〃	〃	10.6	6.6	1.4	109	頁岩	
	21	〃	〃	8.2	5.0	1.0	71	硬砂岩	
	22	〃	〃	(8.4)	4.3	1.4	81	頁岩	
	23	〃	〃	18.9	6.2	1.6	260	〃	
	24	〃	凹石	(9.0)	7.0	7.4	652	凝灰岩	
64	4	17号住	石匙	7.6	7.6	0.9	60	頁岩	
	5	〃	打製石斧	11.8	3.7	1.6	71	硬砂岩	A−5
	6	18号住	〃	12.3	4.8	1.4	109	頁岩	A−45
64	1	19号住	〃	10.2	4.1	1.2	63	硬砂岩	A−7
	2	〃	〃	9.9	4.1	1.1	80	粘板岩	F−8
	3	〃	〃	8.6	5.2	1.4	62	頁岩	〃
	4	〃	〃	10.4	5.9	2.0	109	硬砂岩	F−5
	5	〃	〃	(7.4)	(5.5)	1.2	55	〃	G−7
	6	〃	凹石	17.0	8.0	3.2	680	頁岩	G−6
	7	〃	〃	12.8	9.7	4.9	841	〃	
	8	〃	〃	14.4	5.8	3.7	429	砂岩	
	9	〃	〃	10.7	7.3	5.1	570	安山岩	F−7
	10	〃	〃	8.6	6.5	4.6	314	〃	F−6
	11	〃	〃	11.1	6.6	4.6	561	〃	
	12	〃	剝片石器	5.6	2.1	0.6		〃	
	13	〃	〃	2.6	1.4	0.4		〃	
	14	20号住	石鏃	4.5	1.4	0.2		黒曜石	
	15	〃	石匙	5.9	3.4	0.6	13	〃	北壁上
	16	〃	打製石斧	9.4	4.8	1.4	81	チャート	F−16
	17	〃	磨石	10.1	8.6	4.8	600	頁岩	〃
	18	〃	石皿	31.2	23.4	5.8	8650	〃	西壁下
	1	〃	凹石	11.1	7.5	5.2	532	安山岩	
	2	〃	磨石	9.8	7.4	5.0	580	〃	F−14
	3	〃	〃	10.0	7.9	3.7	440	〃	F−16

図版番号	No.	遺構名	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
65	4	20号住	磨石	9.4	8.9	3.8	389	安山岩	
	5	遺構外	石鏃	2.9	1.4	0.2		黒曜石	
	6	〃	〃	(1.4)	1.5	0.2		〃	F−4
	7	〃	石錐	4.4	1.4	0.4	3	〃	B−5
	8	〃	打製石斧	10.8	5.4	1.9	89	頁岩	G−4・5
	9	〃	〃	9.9	3.8	2.0	81	〃	G−5
	10	〃	〃	12.4	4.4	1.8	135	硬砂岩	C−12
	11	〃	〃	11.6	3.8	1.4	102	頁岩	CT−13
	12	〃	〃	(8.2)	4.2	1.2	63	硬砂岩	E−1
	13	〃	〃	13.8	4.9	2.2	141	頁岩	
	14	〃	〃	10.4	5.6	1.4	85	硬砂岩	
65	15	〃	〃	11.2	4.2	0.8	61	頁岩	G−4
	16	〃	〃	9.4	4.7	1.2	81	硬砂岩	EF−4
	17	〃	〃	(9.6)	5.2	1.7	101	砂岩	G−5
	18	〃	〃	10.4	(4.2)	1.0	62	硬砂岩	J−6
	19	〃	〃	(9.6)	4.2	1.2	42	〃	C−5
	20	〃	〃	8.4	4.4	1.8	86	〃	
	21	〃	〃	5.9	6.0	(1.8)	89	頁岩	
	22	〃	〃	(6.6)	3.0	1.4	48	〃	
	23	〃	〃	8.9	4.8	1.4	42	〃	
	24	〃	石匙	7.5	6.8	1.0	58	硬砂岩	
	1	〃	打製石斧	8.7	4.7	1.4	71	〃	
	2	〃	〃	(6.6)	5.2	1.6	71	〃	
	3	〃	〃	(7.8)	5.2	1.1	58	〃	
	4	〃	〃	(6.4)	4.1	1.7	52	〃	
66	5	〃	〃	(9.4)	7.5	4.7	191	〃	
	6	〃	〃	8.4	4.2	1.1	60	〃	G−6
	7	〃	磨製石斧	(7.1)	4.0	2.0	100	砂岩	A−1
	8	〃	〃	(9.1)	4.0	2.5	190	蛇紋岩	
	9	〃	凹石	14.9	4.1	3.7	300	砂岩	
	10	〃	〃	(12.2)	10.2	4.6	610	凝灰岩	C−1
	11	〃	〃	(17.2)	(6.7)	4.7	722	砂岩	G−6
	12	〃	〃	11.2	7.4	6.1	659	〃	G−5
	13	〃	凹・磨石	(8.4)	5.2	(1.2)	150	凝灰岩	
	14	〃	〃	8.1	6.4	3.5	311	安山岩	H−5
	15	〃	〃	9.4	7.4	5.2	518	砂岩	F−4
	16	〃	凹石	(9.0)	7.1	5.0	433	安山岩	H−6

第V章　結　　語

中島遺跡は松本平の東南端鉢伏山塊より西下し此処で流路を北に変える田川右岸に存し現河床面より約3mの比高差を有し，南から北へ伸びる狭長な西に緩傾斜東へ低平に傾く台地でその北縁部は二十数戸の集落を戴せている。

已に縄文時代において田川の氾濫原の中に取残された中洲状的な中島となっていて，それは古代人生活の拠点となり得る場所として歴史時代迄も続いていた。

従来縄文期の大遺跡は山麓辺縁の段丘上や河川の扇頂・扇中央部に存し，大方の人々はそれに目を奪われていたが，中期半を下る加曽利E式土器時代には河川上の低平地に住居址の発見例も多くなり，安曇地方においても掘金村の中島遺跡，穂高町の矢原・梅地・正島の水田地帯に，松本市柳田は女鳥羽川右岸にあり往古の氾濫原の中に，笹賀牛の川は奈良井川の造りなした低平地であり，大集落と言えない迄も定住性と生活内容にも恵まれ豊かであったことは山麓上の高台に織りなす如く営まれた大遺跡のそれと変化や差異等は全く認められない。

この南北約800m東西幅150m内外の狭長な微高地の北辺部は前述の如く現在の中島部落であり部落の南端より高地面は畑地となっている。この畑地域が遺跡地域となって居り，長さ250mの範囲である。この区域での発掘による住居址の編年的分布は縄文中期前半（1戸）の古い時期に属する住居址は南側に，中期後葉期（13戸）はやや北よりに位置し，弥生期の住居址（5戸）は拡散して高地全域に分布していた。

このように時代による立地の選び方は地形と気候，人口密度や生産性の変化に関係あると思われる。本微高地の最南部は田川の削流作用を激しく受け舌状突起状となり先端左右は比較的急峻な傾きをなして居り，少ない戸数が居を構えるには最も安全安住地であったと思われる。中期後半期は13戸と増加するが実際はその$\frac{1}{3}$位が同時代のものであろうが，分散化は当然であり，それも高地内と言う制限区域内での事であった。

弥生時代の住居5戸は広域に散る傾向が現れているのも丘陵台地上と言う制限区域内ではあるが農耕による生産性の向上に伴う当然の結果であろう。

本址台地上の縄文住居址全14戸に就いては，中期前半（藤内Ⅰ），中期後半（曽利Ⅰ）・（曽利II）・（曽利III）・（曽利Ⅳ）迄の型式の編年体系が樹立可能な資料が整っており，松本平における曽利式土器の編年の尺度を考える上に大なる参考となった。

縄文期の住居内に於ける埋甕と炉址との関係を見ると埋甕は西よりに炉址は東側にその位置を共通して占めているのに気づく。

これは住居の出入口が田川面即ち埋甕を配した西側に開いていたのではないかと考えられる。(出入時に踏まれる埋甕と言うことを想定した上で)。他にも西口開口していれば川泉利用に便利でもあるからであろう。

縄文19号住居址床面上の小ピット内に何れも拳大の黒曜石の原石が20個程集めて置かれてあった。珍らしい現象である。和田峠の黒曜石交易者達は原石をほぼ握り拳大に打欠いて1塊としこれを交易用としたものだろうか。交易用の黒曜石の大きさを決める為の一重要参考資料として注目したい。

縄文9号住居址の二つの埋甕中，石蓋のあるものと小形で蓋なくローム質土壌を口まで一杯盛入れてある甕については一旦廃棄したもので，新に石蓋を伴う甕を近くに増設したのではないかと発掘調査者は述べているが，廃棄そして新設と結論づけるのは早急ではないか，これは埋設したごく近い時期に何かを例えば胞衣の如きものを埋納し封じ込めてしまったとは考えられぬか，初めから廃棄する為の甕とは思えない。目的あってこの埋設が直ぐ達成可能になったと考えた方がより穏当ではなかろうか。埋設には夫れ夫れ別の用途や使用目的があったとした点から考えて見ては如何。埋甕には正逆横位等その位置も種々あるが中に何を入れたかという点になると不明なもの大多数である。それだけに周囲の状況や外形上から判断を探ぐるのだが内容が複雑過ぎるから慎重であってほしい。しかし今回の器内にローム質土壌を一杯充満させた埋甕の例はそう沢山ないであろう。

曽相Ⅲ式に属する5号址内炉址の石囲に使った炉石は板状節理を伴ったもので，在地では見かけられず1,800m以上の高所でなければ存在しないとの事，此の種の石材は第3紀層の急冷却によって生じたもので諏訪二葉高校裏手一帯の山からは良質な石材を産し，和田峰を経て美ヶ原付近に至る間にも採取される。梓川村荒海渡遺跡の敷石遺構の鉄平石も諏訪産と言われている点から見て，相当重量ある物質も我々の予想外の力と努力や工夫で搬入されたのではなかろうか。

生活にとって物交経済も必要な時代であったから，それに伴う経済圏と組織力等も考究されねばならぬ。ただし黒曜石とかヒスイ等の此処では得られぬ物質を交換経済に依存することは理解し得るが，敷石とか炉石等時には代用の石材でも間に合うような物迄遠路はこんでくると言うことの精神的な意義も考えて見るべき事だ。

土鈴の出土に就いてであるが，塩尻では焼町遺跡出土のものは早くから知られていた。本址からは作業中の耕運機によって偶然掘り出されたものである。ラクビーの球の如き形をなし振ればジャリジャリと音を発する。梓川村荒海渡遺跡，波田町麻神遺跡等と併せると近くで四例となった訳だが当時の縄文人の信仰と深くつながりがありそうだ。信仰生活の所産としての土鈴と考えられる。又此処からは頭部を橋状に飾った頭部だけの土偶が1体発見されている。橋状装飾は珍らしい。

石器類については石棒皆無，凹石も少なく，石鏃は多い方であった。石錘，土錘の如き魚労用具が川の近くであり乍ら発見されないのも不思議だ。山一つ越えた木曽川の上流では土錘が何個もでているのと対照的である。

弥生式土器については，後期に属する千曲川水系の箱清水期のものが大半を占め少数ではあるが天竜川水系の座光寺系も混じていたと言う事は，両系文化の接触を示す点で東海系文化圏を代表する銅鐸を出した柴宮遺跡とは目睫の間にあり誠に注目すべき事である。又今迄余り見なかった朱塗の弥生土器片も見つかっている。

本址ではいくつか注目すべき事柄があるが，弥生1号住居址内の大形甕より炭化種子5 l 程の発見がある。信州大学での鑑定の結果黎の類か麻の実のようであるとの事であった。黎はイネ科に属しインドが原産地であるが朝鮮半島を南下し日本に至ったのは縄文晩期と伝えられている。麻はクワ科に属し原産地は中央アジアである。わが国への伝来は弥生後期とされ，それは千葉県銚子市の余山貝塚・木更津市の清水菅生遺跡から発見された事で立証されている。当時これを植えて織物・食用・搾油等に利用された事であろう。

稲に関する資料は今回見つからなかったが田川の澱み等を利用して水田耕作も前記畑作植物と併行して行われていたと推定される。

弥生10号住居址の床面上からただ1顆であるがコバルト緑に輝く美麗なガラス小玉が発見された。日本最古のガラスは弥生遺跡の小玉類からと言い古されているが，本址出土のガラス小玉も勿論その例には入るもので貴重である。数多くの小玉を紐で連ねてネックレスにしたと考えられる。何れにしても松本平の弥生式住居址内からの発見はこれが第一号と言うべきであろう。

弥生期のガラスには鉛ガラスとアルカリ石灰ガラスとがあり，丸玉・勾玉・管玉は前者，小玉及び古墳時代の玉類は後者に属している。岡山県百間川遺跡では弥生中期に属するガラスを融かした炉が見つかった。炉のまわりにアルカリ石灰ガラスの塊が見られたので，原石からガラスを造った炉であると考えられている。本址発見のガラス小玉も上記の近畿中国地方で造られたものが伝えられたと考えられる。

近くの塩尻市中挾で鉢の中からガラス製管玉・丸玉等が何顆も発見の報告がある。(桐原健氏報告)

松本市中山の弘法山古墳からも多くのガラス小玉が出土しており，本址のものと一見全く同質のものであることが受止められた。

以上弥生式住居址5戸全ては後期で箱清水系の土器を大半有し中に若干天竜水系の中島式系土器の混入している事は，柴宮の駿遠式銅鐸，松本宮渕本村の弥生遺跡及び当地出土の銅鐸破片についても再検討精査の資料を提供したものと言えよう。

弥生8・11号炉址構造は，何れも甕を埋めてあり，8号址は胴部補強の為，外側より他の土器片を貼り付けて炉内部には大きな土器破片を平に敷いてあった。

11号住居址は大形甕を埋めて炉囲としその中に小さな甕の胴部を除去して逆位に立て底の部分には大形片の土器を平にしてあった。火を焚くと言うよりも常時火種を保存して置くための火壺的なものではないだろうか。

奈良から平安期と推定される竈を伴う住居址であるが，方形プラン四本柱の床面で北側ほぼ中央に住居の北壁を利用してカマドを構築しているが，煙道部分は崩れて不判明，石組は粗雑，粘土張りも丁寧ではない。住居内よりは数少ない小型平瓶の完成品が見られ，蓋付の杯も出土している。平瓶は延喜式に「平居瓶」と出ている。近くでは松本市岡田松岡の積石塚より出土したと称するものを御子柴直十氏が所持している。これは平安半を下るものである。特徴はコの字形の把手がついて大型である。本址出土のものは小形で上面に中心をはずした短かい頸部をつけている。

胴部に丸味があるが上面にコの字形の把手がない。用途は液体を入れたものと言われている。時代判定であるが，本址の平瓶は胴部は扁平ではあるが，丸味の帯び方が強い。把手がない。小形であると言った点は，奈良期に属すると思われ平安迄は下げられまい。

上記のカマドに就いては，今少し述べておきたい。カマドは普通和泉期の住居址に最初に現われる。それは粘土のみで造られる。それが時期の下降に伴なって石材を取入れ，石組を主として隙間を粘土で充塡させて固める過程を経て平安期に入っている。四隅の柱石を主軸として組立てられるようになってくる。

本址のカマドは小生が調べた範囲では奥壁は住居址壁を利用してこれに喰いこむか添えるが如く密着させて左右に2石を支柱として据えた形跡が見当らず，又焚火口の左右に支柱を上下に支え石と焚口の敷石を組んだ様子は全く見当らず，散存する人頭大の転石は力マド構成上の左右壁に粘土を貼るための芯にしか使用されていない。誠に幼稚粗雑である。これらの点から勘案して平瓶と同時期と見て奈良未以下には降ることはあるまい。

次ぎに本址及び本址付近について注目しなければならぬことは，信州では大方何処でも見られる位普遍的な灰釉陶片が全く見られなかったことである。

灰釉陶の生産の始まったのは瓶類が最初であることは平城宮跡の木簡が伴って出土していることで知られている。皿類に施釉されるのは9世紀後半から10世紀初である。 であるから灰釉陶器の初源期よりも先行する時代の住居址であることになる。

最後に書き残こして置きたいことは，中島遺跡の発掘範囲は南北300m前後，巾70m内外の狭い丘上から20個の住居址が隣接したり切り合ったりの出現であった。掘り上げた大量の土の山の処理場がなくなり，発掘し，続いて調査，実測，それが済み次第埋戻し作業，作業の連続と言う極めてきびしい重労働であった。全て限られた予算と限られた調査員の作業は哀れである。労組の指導者や労基署員等がこれを如実に見聞きしたら何と思うだろう。殊に最近は年間を通してこのような過酷な作業が続くと調査員は日曜も祭日もなくなってしまう。更に労力提供だけが発掘調査ではないと言う事を理解して下さる方が何人いるだろうか。一つの報告書が完成する迄には発掘に要した10倍の日時が必要となる事。繁雑な編集仕事の苦労も充分に理解してほしい。報告書造りに費す個人負担も決して少くはないのにその費用は充分見て貰えない。調査従事者は炎熱の野天に，木枯の鳴る野に佇み，氷雪の土中に泥にまみれ，寒月氷る深更迄実測，トレス，原稿書きと休むことのない忍者と自己犠牲の連続である。調査，作業のやりやすい段取と日時を与えて欲しい。文化財保護法の精神が物心共に守れるような調査を願う事切である。 （中島豊晴）

＝付　　編＝

発掘作業に加わって

米窪　すぎ

雪におほわれた穂高の山脈がくっきりと西空に聳て見えるここ堀の内に，古代の遺跡があることを知ったのは夏も終りかけたある日，発掘作業に誘われた時でした。六十路過ぎた者がと一時はためらったけれど，夢を追うような魅力にとりつかれ，孫のような大学生に交って持ちつけないスコップとジョレンを使い始めたのは11月も中頃でした。 耕土を除くこと30センチメートル，何かカチンと当る。土器の破片だ，出た出た。思わず胸が高鳴る。隣に堀っていた仲間も何か出たらしい。赤土になるまで堀り下げる。土の重みもものかわ，次第に汗ばんでくる。様々な形の石，石斧，凹み石，黒曜石，矢尻，出る度に先生を呼び見ていただく。なんでもない石と言われがっかりすることもある。時の経つのも忘れる程で，１日が終ればさすがに腕が重い。でも翌日は，何が出るだろうかと霜柱を踏んで張り切って出かける。炉の跡，柱穴，床面，古代住居の説明を先生にお聞きする度に何とも言えない気持になる。数日して，掘り出した破片を復元した壺をみせていただいた。縄文のあざやかな紋様に驚く。

或る日，壁の近くの床面の土をきれいに取り除き赤土まで堀ろうとした時，移植鏝の下が黒く光った。そっと土を除いたら，５センチメートル角位の黒曜石の集群が現われ，思わず大声をあげて先生を呼んだ。見つけた時は驚きが大きかったが，時間が経つにつれて徐々に喜びが大きくなった。背丈程も掘れど赤土が出ない時もある。冬の日はあっと言う間に落ちてゆく。刺すような北風も穴の中では汗が出るが，夕方になるとさすがに冷い。古代人はよく考えたものだ。塩尻でもここが一番冬の陽が長く当り，清水も湧き，近くに川が流れ，狩に行くには三方山も近い。4,000年も昔がつい先頃のことのような気がする。縄文式土器，弥生式土器と日が経つにつれて考古学にちょっぴり明るくなった感じがする。

でも掘り上げた土山を埋める作業はまた大変だ。若い者には負けまいと頑張った。約１ヵ月，終りの日に先生は約20戸の住居跡が見つかったと報告された。土器も復元すれば大変な数になり，やがては博物館に飾られるだろう。過ぎてみればあっと言う間であった。この作業に加わることができて心から嬉しく思っている私である

古代へのいざない

米窪千加代

私が考古学に特に興味をもちはじめたのは，8年程前，藤森栄一先生の「鐸を追う少年」を読んだ時からのような気がする。その前もというより中学生の頃から，未来を想像するより昔のことをいろいろ考える方が好きだった。特に京都や奈良，その他由緒ある場所などで昔の人のことをいろいろ想像すると，何故かしらなつかしいような，胸の高鳴りを覚えた。そして，遺跡発掘のニュース

や，野尻湖発掘のことを聞くたびに，一度でいいから掘ってみたいという気持は，いつも変らないまま持ち続けていた。塩尻でも，片丘や平出や上西条の焼町などと，発掘の話を聞いても，家庭の事情でなかなか発掘に参加することができなかった。それでも平出遺跡の復元家屋にだけは，時折暇をみつけて車を走らせて行って，古代人としばらく話をして来る。そのような矢先，中島遺跡発掘の話があった。ためらうことなくお願いした。

今年ほど農作業を早く片付けたいと思った年は今までにはない。私以上に，地理，歴史はたまた考古学に興味を持っている夫は，会社勤めの間をみてどうしても発掘に参加したいと言う。その夫をせきたてて農作業をはかどらせたいと思っていたが，結局天候が悪く思うようにはゆかなかった。

11月中旬，予定通り発掘が始まった。何もかも初めてのことである。胸をわくわくさせながら出かけた。春頃試し掘りをした時に，何回も見学に行っていたので様子はわかっていたが，しかし，実際に掘るのは初めてなので，専門用語が耳新しい。グリッドに入って畦を残して平らに土をはぎながら真すぐ下へ掘り進む。これだけの作業が以外と思うようにできない。擂り鉢型に下の方へゆくと狭くなってしまったり，横はぎ法で平らに掘り進んでほしいと言われても，土器を見つけると，ついそのまわりばかり深く掘ってしまって先生に注意を受けた人もいた。

私の最初に掘ったグリッドは，石ころがごろごろしていて何も出てこない。隣りのグリッドからは，ほぼ完成品にちかい縄文時代の土器が出てきた。そこを掘っていた二人は初めは大きな感嘆の声をあげていたけれど，そのうちに土器のかけらなどではなく完成品にちかい壺であることがわかってくるにつけひそひそ声になっていった。宝物でも掘るかのように，ある程度はっきりするまでは誰もがあまり声を出さずに黙々と掘り続けている。埋甕をいくつも見つけた人は，埋甕の上にのっている形のよい石に，自分の手が一番先にふれた時の感触を決して忘れないと言う。参加者全員，生き生きと発掘作業をしていた。

中島遺跡は小さな丘にあると言えようか。西に向って傾斜になっていて，その傾斜が下へさがる少し手前の所のグリッドは，いくつ掘っても土器のかけらが少し出ただけで何も無かった。しかし住居跡が出てきたグリッドを掘った時は，掘るのが楽しいくらい古代人の遺物が出てきた。これは初めての経験であるためだろうか。とにかく新鮮で充実した時を過すことが出来た。

住居跡がいくつもおおよその形をみせた時，指導して下さる小林先生に埋甕を予測され，堀ってみたら本当に出てきた時にはびっくりしてしまった。と同時に，過去についての研究や知識が，将来や未来を予測するためには絶対に必要であることを痛感した。しかし，また一緒に掘っていた信州大学の学生さんが，「知識や学問があって，このようであるはずだと規定の概念で掘っていて，大切なものを見落してしまって，われわれが本当の歴史を壊してしまうこともある。知識も必要であるが，事実に忠実に掘ることが一番大切なことである。」というようなことを掘りながら語ってくれた。すばらしい意見と思って聞いた。過去の歴史を，今，私達が作りかえることは許されないことである。手鏝を持つ手の神経も無意識に緊張した。現実をみるということは，現代の社会においても通じることであると思う。知識や研究や教育ばかりを振りかざして，現実を見落している部分も

ありはしないだろうか。よいことを学ぶことができた。

掘り初めて幾日目だっただろうか。私と一緒に住居跡の床を掃除していた仲間の一人が，壁に近い所で黒曜石の山を見つけた。山と言うと，私達の身長より高い山のように想像されるけれど，実は，5センチメートルくらいの黒曜石のかたまりが10数個くらいである。でも，黒曜石製の石鏃（ヤジリ）か，小さな破片しか掘ってない私には，一瞬，黒曜石の山と感じられたのも無理のないことである。と同時に，何故黒曜石が集められて保存されたままになっているか，そのことをいつも考えるようになった。

私の考えたことは，先ず第一に，この集落が災害か何かに合って，一度に皆んな居なくなってしまったのではないだろうか。もし，どこかへ移住したとしても，当時としては大切な黒曜石だから持って移動したと思う。

第二に，保管していたがだんだん不必要になってそのままになってしまったか。小林先生は，縄文農耕も学界ではある程度考えられていると言われた。とすればやはり，保存はしていたがだんだんいらない時代になって残ってしまったのかもしれない。

第三に，同じ残ったとしても，集落で力のある人が私達が宝石を大切にしまって置くように，貴石として個有財産として持っていたのかもしれない。

今，黒曜石のこの小さな山を見ると，丁度，ねずみが田の土手などの穴に，稲の穂などを集めて山にしてあるように，床より少し浅い穴に10数個集めて保存されていた黒曜石を見ると何んともいとおしい思いである。これから何を読み取れと言うのだろうか。言葉も文字もないことは，反面すばらしいことである。いろいろなことを語りかけてくれるから。いろいろな空想が泉のように湧いて，古代人が私のすぐ隣りに居た。

中島遺跡発掘で私はすばらしい経験をした。天候が悪く気にしながら遅れた農作業を捨て置いても参加してよかった。私の歩む私自身の人生で，また新しい経験をすることができた。そのことはそれだけ私の人生が豊かになったことと言えようか。

素焼きのぐいのみで古代人と乾杯!!

土器洗いに参与して

小柳みぎわ

わが人生40年，かくもロマンに溢れ，心おどる出来事ははじめてである。何しろ4,000年前の人物との出合いなのだから。その人物とは古代の陶器師たちである。専門職であったのか，老若男女であったのか，知る由もないが，確かに古代に生きていた人の手になる土器。その破片を洗い，ちいさなブラシで土を落していく，その作業であった。

最初のうちは，土器の色・形・模様に興味がひかれ，数片をつなぎ合わせてみたり，土器そのも

のから数千年前の息吹きが伝わり，そんな感動が心をふるわせたものだ。やがて，何に使われたのだろう。どんな生活をしていたのか，言葉はあったのだろうか，と，いやはや日本古代史のおさらいである。

おりしも12月。土器洗いの水替えに庭に出ると，何もかも凍結したように眠っている。そんな夜空に耳をすませばキーンという永遠の響きを波長にして星達が語りかけてくる。何億光年という過去を現在に見上げ，手には数千年前の土器を持てば，「時とは何か，存在とは，人間とは，」と無限者に問いたくもなり，はたまた「有限と知りつつ生きる素晴しさよ」と人間を認め，たたえたくもなるひとときであった。

日頃は無認可保育所の保母であり，3才になる娘との母子家庭とあって，絶えず，確かに生きる為の不安と焦操がつきまとう。この生活の中で，娘を寝かしつけた後の土器洗いの数時間は，私の心を現実から解き放ち，自由に，おおらかに古代を駈けめぐらせてくれた素晴しい時であった。

最後に，ひとこと。数多くの出土品，古代人は意図してこれらを後世に遺したわけではあるまい。素朴な生命力，創造力の積み重ねが人の生きざまとなり，自然と戦いつつも，それに調和共存してきた故に，自然が彼等の足跡，文化を保存し得て今日に到ったのではないか。カプセルに様々な物を積め地中深く埋蔵し後世に遺す知恵を有する現代。しかし地上では，お金・コンピューター万能時代。しかも人類繁栄の名のもとに自然破壊はとどまることを知らない。果して現代は後世に何を残しうるのか。土器洗いに参与した一主婦の，ちいさな心の痛みである。

以　上

土　器　　**米窪千加代**

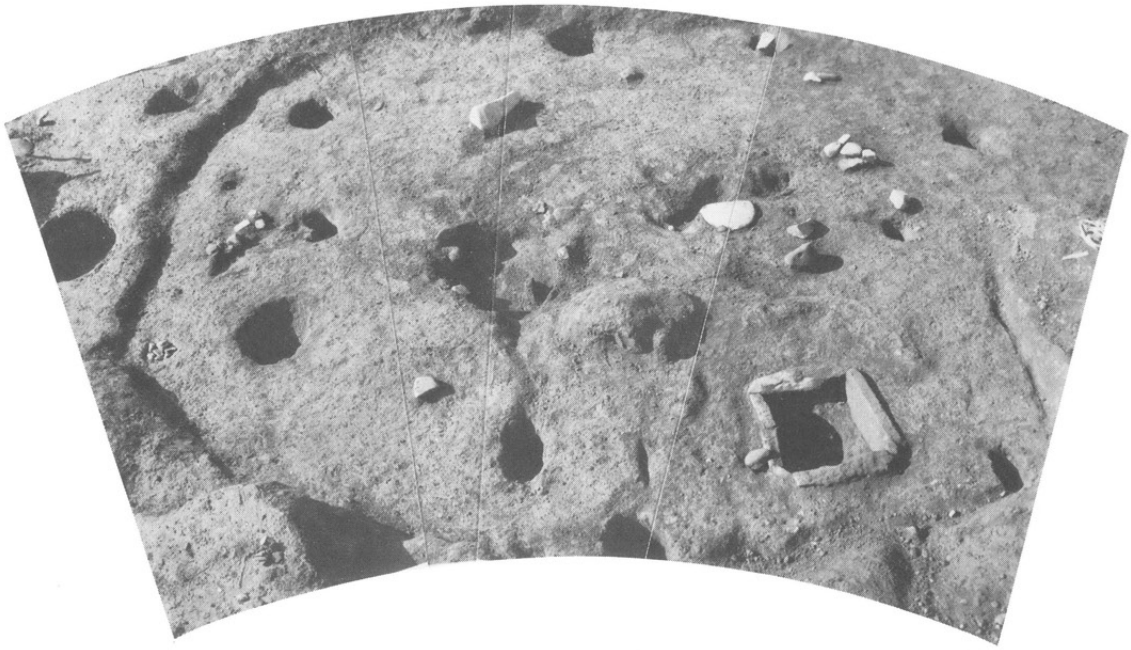
堀りすすむ土に素焼きの端見出で竹べら持つ手の昂ぶりおさふ
美しき紋様の土器に驚きと親しみ湧きぬ手に取り持ちて
紋様は女性のつけしものと聞き土器のかけらにふれていとしむ
土器のかけらあまた出でくるこの辺り厨のありてをみな佇ちしか
埋れゐし土器掘り出だせば晩秋の淡き光に甦るごと
遺跡掘るひと日の暮るる空ひくくうつつに鳥は群なしてゆく

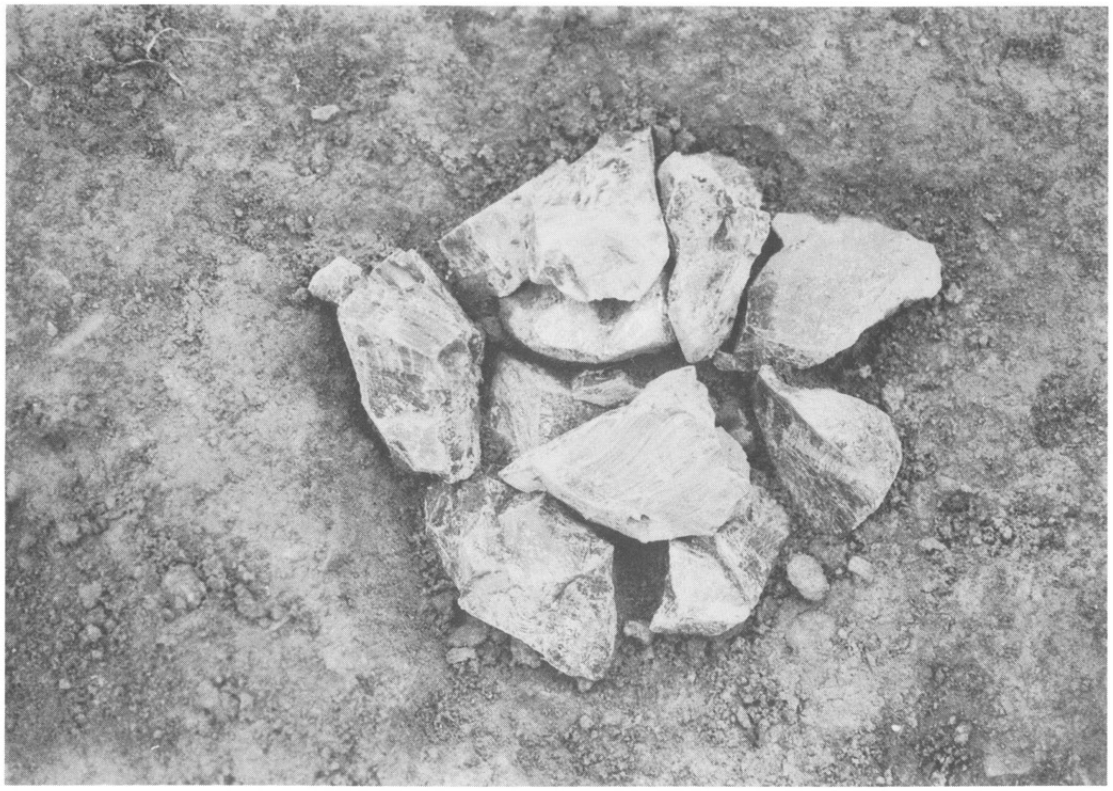
発　掘　　**米窪　すぎ**

野わきさへ汗ばむ肌に快よく遺跡掘る手に老いを忘るる
古代人は此の石つきて焚きしかと四方に想ひつつ掘る手のはづむ
縄紋の古代にわれを置きすえてただひたすらに夢を掘りつぐ
掘り当てし黒曜石群思はづも声はづませり胸ときめきて
霜しろき朝の遺跡に陽射し来て土の山々湯気立りのぼる

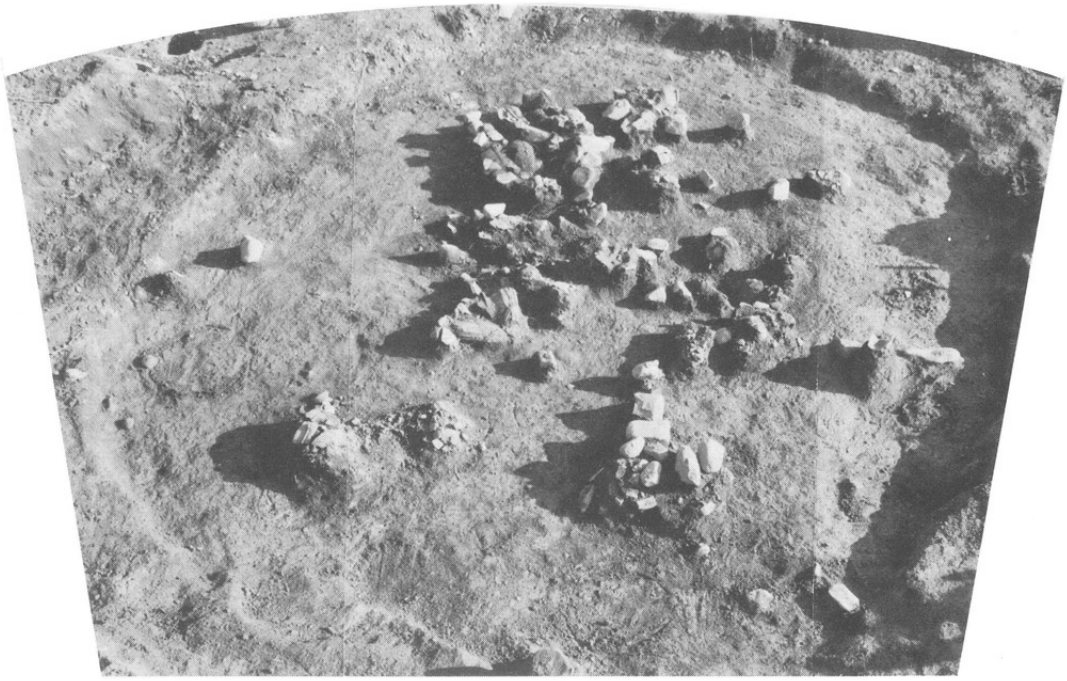
遺　跡　　**米窪　三保**

霜どけの遺跡の里土掘る人らただ黙もくと鍬をうごかす
出土せしは炉の石なるか方形に据えられてあり掌にふれてみる



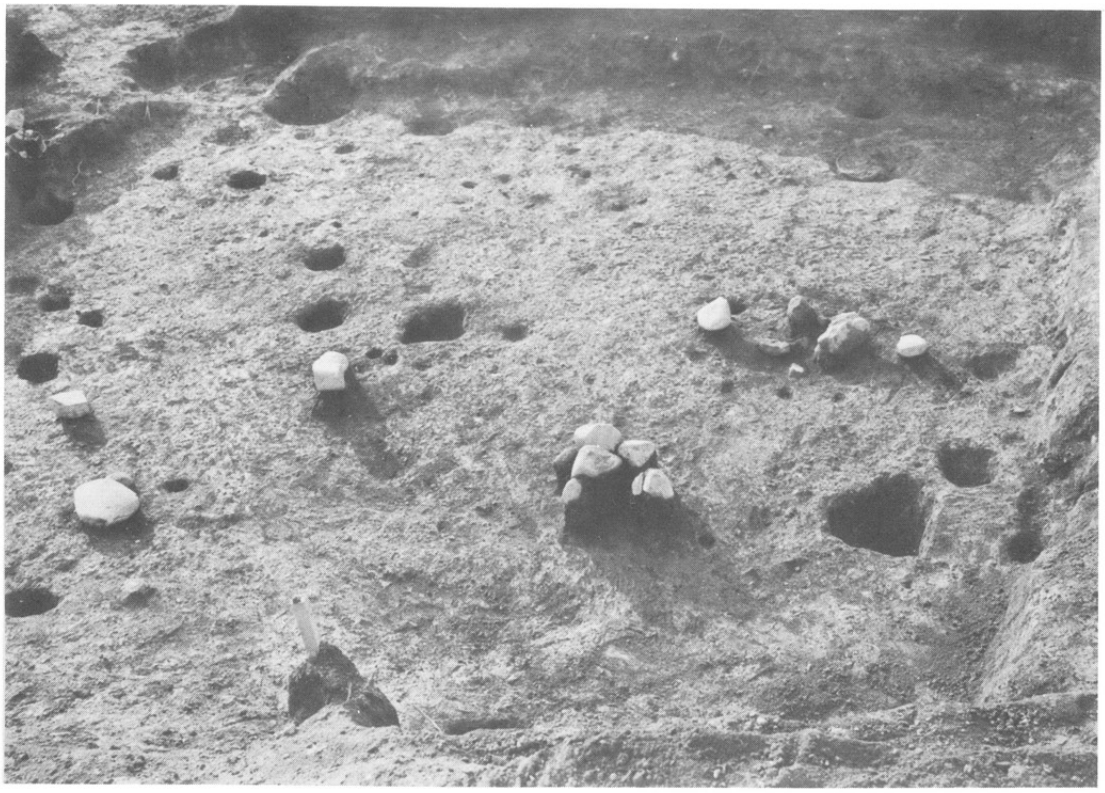


図版第１　上：第５号・19号住居址，下：第19号住居址黒曜石集石

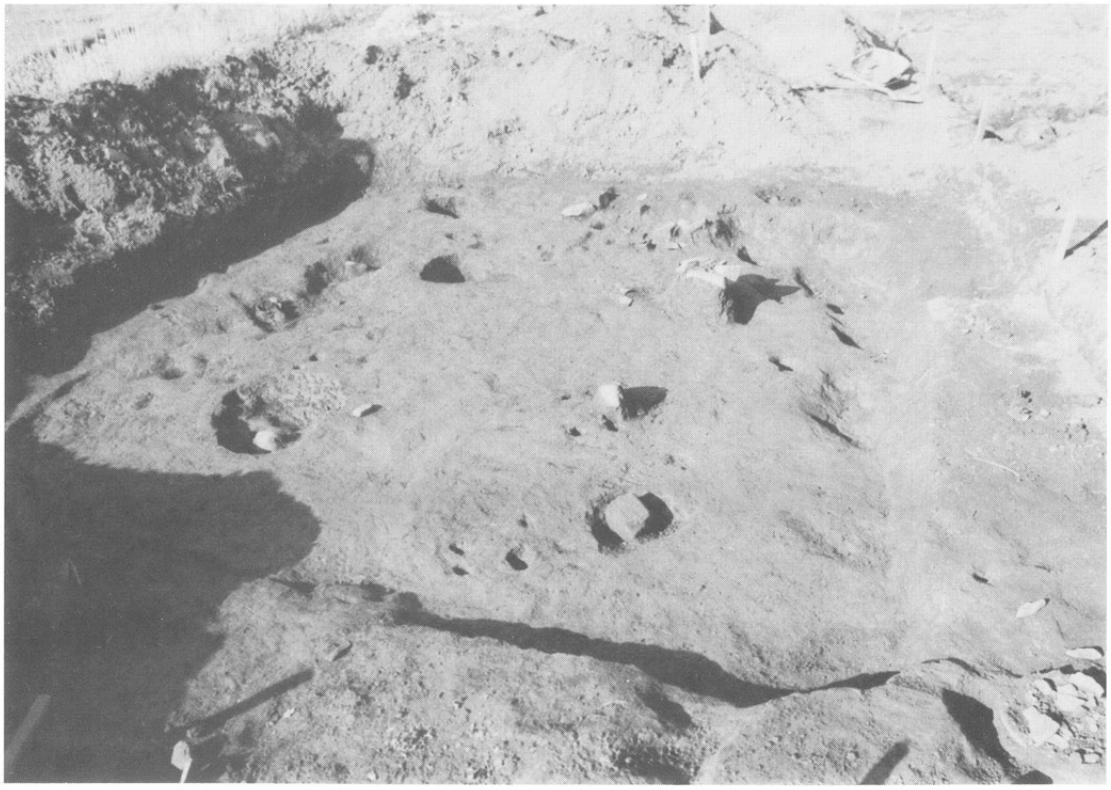


図版第 2　上：第 6 号住居址遺物出土状態，下：第 6 号住居址

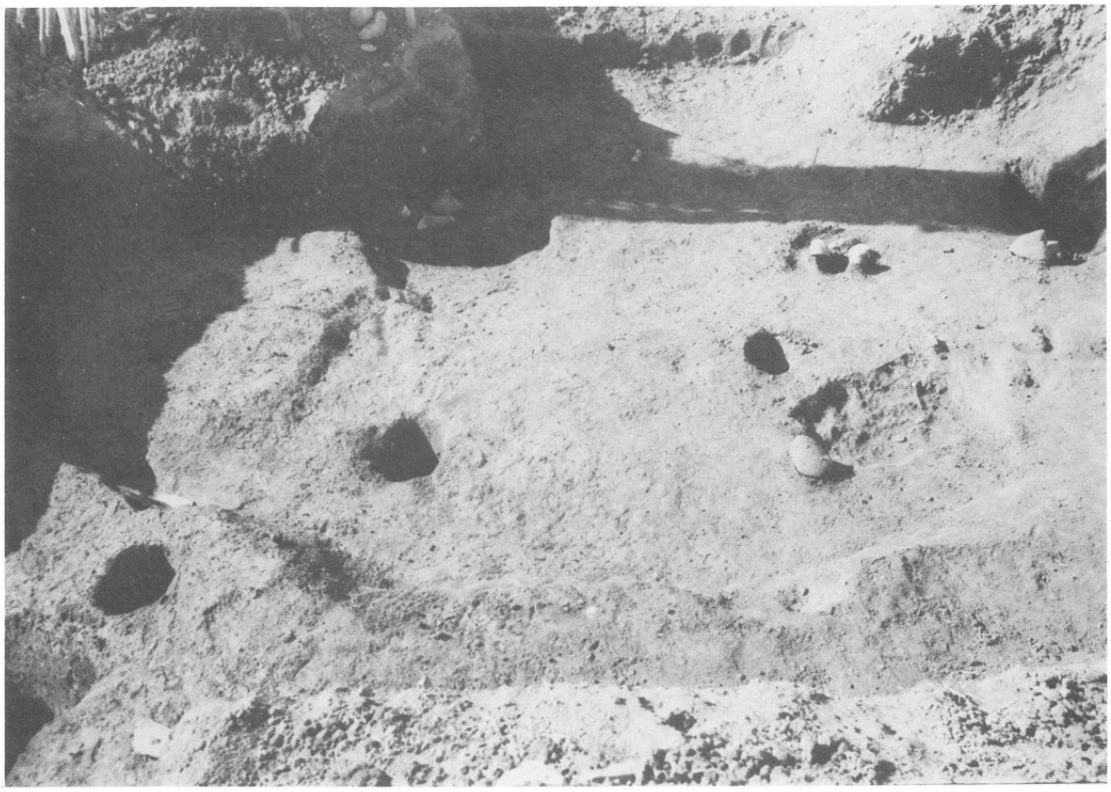
図版第3　上：第8号住居址，下：第9号住居址



図版第 4　上：第10号住居址，下：第11号住居址



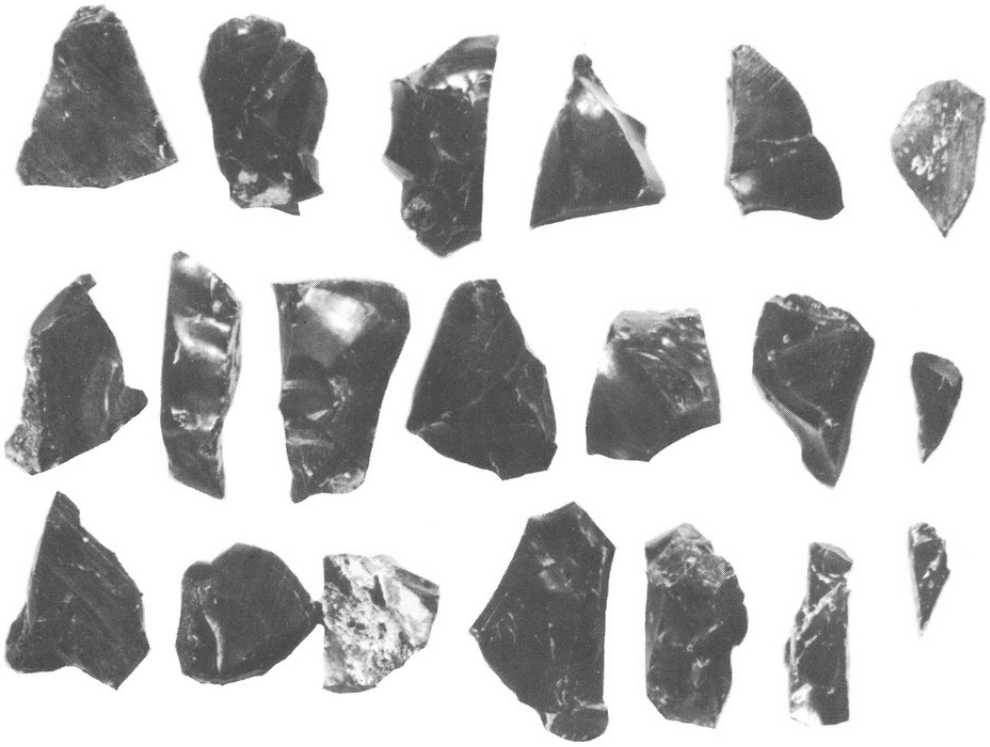
図版第 5　上：第14号住居址，下：第15君住居址



図版第 6　上：第16号住居址，下：ガラス玉，土偶出土状態

図版第7　第5，6，9，12，17号住居址出土土器

図版第8　第1，4，5，8，9，10，11，15号住居址出土土器



図版第 9

上　：第19号住居址出土黒曜石
下左：第 1 号住居址出土炭化種子
下右：第 6 号住居址出土炭化物

中　島　遺　跡

長野県塩尻市中島遺跡発掘調査報告書

（非売品）

昭和55年３月10日　印刷

昭和55年３月18日　発行

発行所　長野県塩尻市教育委員会

印刷所　㈱　高　砂　印　刷　所